

# 蔵王町内遺跡発掘調査報告書 1

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査  
(平成18～24年度)



戸ノ内遺跡出土土器 (平安時代)

原遺跡  
鍛冶沢遺跡  
台遺跡  
西浦B遺跡  
谷地遺跡  
円田入B遺跡  
寺門前遺跡  
諏訪館前遺跡  
三の輪遺跡  
戸ノ内遺跡  
愛宕山遺跡

2014年3月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会



# 蔵王町内遺跡発掘調査報告書 1

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査  
(平成 18～24 年度)

原遺跡  
鍛冶沢遺跡  
台遺跡  
西浦 B 遺跡  
谷地遺跡  
円田入 B 遺跡  
寺門前遺跡  
諏訪館前遺跡  
三の輪遺跡  
戸ノ内遺跡  
愛宕山遺跡

2014 年 3 月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会



寺門前遺跡出土磨製石斧（繩文時代）

# 序 文

蔵王連峰の東麓に抱かれた蔵王町には、蔵王火山の造り出した変化に富む地形・地質と、四季折々の豊かな自然に育まれた山麓文化が息づいています。蔵王の山と、そこに暮らす人々が創り出した蔵王山麓の風景は、私たち町民の誇りであると同時に、将来へ守り伝えるべき大切な財産でもあります。

蔵王町には約 200 か所の遺跡が発見されており、先人の生活文化を伝える貴重な文化遺産として保護されています。遺跡は、古文書などの文字資料だけでは知ることのできない地域の実情や、まだ文字がなかった時代の人びとの暮らしぶりを、私たちにありのままに教えてくれるものです。

一方で、町内各所の地中に埋もれている遺跡は、様々な開発による破壊の危機にさらされています。このため当教育委員会では、遺跡地図の公開などで遺跡の所在を周知するとともに、開発との関わりが生じた場合には宮城県教育委員会と連携して遺跡の保護に努めています。

本報告書には、各種開発事業計画と遺跡の関わりを確認するために実施した遺構確認調査と、小規模開発事業で遺構の破壊が避けられない場合に実施した緊急発掘調査の結果を収録しています。いずれも小規模な調査で、それぞれの遺跡の全容が明らかになったわけではありませんが、発見された遺構や出土品は、かつてそこに生きた人びとの暮らしぶりを、私たちに生き生きと語りかけてくれます。

先人たちの残した貴重な文化遺産を保護し、活用を図りつつ未来へ継承していくことは、現代を生きる私たちに課せられた責務です。蔵王山麓の歴史や文化遺産は、蔵王町に息づく山麓文化の根底となるものであり、現代社会において求められている地域色豊かなまちづくりにとっても欠くことのできないものであります。本報告書にまとめられた学術的成果が広く町民の皆さまや各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、各種開発事業主の方々には、遺跡保護の重要性について深いご理解を賜り、事業計画との調整や遺跡調査の実施等にご協力いただきました。また、調査の実施と本報告書の作成に際して、多くの方々にご指導とご協力を賜りました。ここに心より深く感謝申し上げます、序といたします。

平成 26 年 3 月

蔵王町教育委員会  
教育長 佐藤 茂 廣

# 例言

1. 本書は、蔵王町教育委員会が埋蔵文化財保護調整事務の一環として平成18～24年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本書で報告するのは、下記の発掘調査の成果である。  
各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（8遺跡9件）  
小規模開発事業に伴う遺跡の記録保存を目的として実施した緊急発掘調査（2遺跡2件）
3. 本発掘調査とその整理・報告書作成作業は、町単独事業として蔵王町教育委員会が実施し、教育総務課文化財保護係が担当した。  
平成25年度の職員体制は下記のとおりである。  
教育長 佐藤 茂廣 教育総務課長 佐藤 則之 課長補佐 佐藤 浩明 主幹兼文化財保護係長 佐藤 洋一 主事 鈴木 雅  
文化財専門職臨時職員 庄子 善昭 渡邊 香織 我妻 なおみ 鈴木 和美 海藤 元  
文化財室内整理作業員 我妻 英子 我妻 智子 岩佐 若菜 大庭 慶志郎 菅野慶一 小杉 佐和子 小林 四郎 小林 美智子  
佐藤 かおる 佐藤 貴美子 佐藤 恵子 佐藤 里栄 松崎 祐二 松田 律子
4. 本発掘調査の整理作業は、鈴木雅と文化財専門職臨時職員、室内整理作業員が行なった。
5. 遺物写真の撮影およびデジタル画像の現像処理は、庄子善昭が担当した。
6. 遺物実測図の作成は、戸ノ内遺跡出土遺物を鈴木和美、愛宕山遺跡出土遺物を渡邊香織、これ以外の縄文土器・陶磁器を渡邊香織、石器・石製品を我妻なおみ・海藤元が担当し、鈴木雅・庄子善昭が作業を統括した。
7. 調査区・遺構配置図、遺構図の作成は、戸ノ内遺跡・愛宕山遺跡の遺構図を我妻なおみ、これ以外の各図を鈴木雅が担当した。
8. 石器・石製品の実測図は、写真実測により作成した。
9. 遺物実測図のトレース図、調査区・遺構配置図、遺構図は、デジタルトレースにより作成した。
10. 本書の執筆は、第3章第2節1「調査の成果」を鈴木和美、これ以外を鈴木雅が担当し、鈴木雅が編集した。
11. 本発掘調査の写真・図面等の記録資料と出土遺物は、蔵王町教育委員会が一括して永久保管している。

# 凡例

1. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図、調査区配置図・遺構平面図の方位は座標北を示している。
2. 本書に掲載した遺跡分布図・位置図は下記の図幅を使用して作成した。  
「蔵王町の地形区分と遺跡の分布」（第6図）  
：5万分の1都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」（宮城県、昭和58年調査）  
「蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図」（第7～9図）、「調査地点位置図」（第10・12・18・22・24・26・33・37・45・46・50・56図）  
：電子地形図25000（国土地理院、自由図郭版・平成24年図式・平成25年4月9日調製）
3. トレンチ配置図・遺構配置図に記載した現況GLからの深度は、掘削したトレンチ底面の深度であり、遺構残存面と一致しない場合がある。
4. 土色の記述は、「新版標準土色帖」（小川・竹原2005）を参照した。
5. 遺構番号は、遺構種別に関わらず調査時に付された連続する番号を使用した。
6. 遺構略号は、下記のとおりである。  
S I：竪穴住居跡、S E：井戸跡、S K：土坑、S D：溝跡、S X：土器埋設遺構・性格不明遺構
7. 遺構・遺物実測図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
8. 遺構断面図に付した土層注記表で、土層の解釈は下記の略号を使用して記載した。  
（住掘）：住居掘方埋土、（柱痕）：柱痕跡、（柱抜）：柱材抜き取り痕跡  
（堆）：堆積土、（崩）：崩落土、（構）：構築土、（人為）：人為的埋土（特記ないときは自然堆積土）
9. 遺物実測図では、下記の表現方法を使用して記載した。  
黒色処理 内面：右端の一部に灰色（10%）の塗り  
赤彩 確認した範囲に赤色（30%）の塗り  
黒色付着物 確認した範囲に灰色（25%）の塗り
10. 遺物観察表では、下記の表記方法を使用して記載した。  
製作工程 調整・加工の痕跡に前後関係が確認でき、痕跡Aより痕跡Bが新しい「A→B」、新旧不明：「A・B」  
墨書土器 判読不能の文字は「□」で記載した。  
計測値 残存値である場合は（ ）を付した。
11. 報告書抄録に記載した各遺跡の緯度・経度は、電子国土配信データ上で修得した調査地点付近の緯度・経度（世界測地系）である。
12. 引用文献および執筆にあたり参考にした文献・報告書については巻末に一括して掲載した。

# 目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 蔵王町の環境と遺跡 ..... 1

第2章 平成18～24年度の遺跡調査概要 ..... 7

第3章 調査の成果 ..... 15

第1節 遺構確認調査 ..... 15

1. 原遺跡 (平成18年度 コミュニティセンター建築計画) ..... 15

2. 鍛冶沢遺跡 (平成18年度 広域営農団地農道整備計画) ..... 16

3. 台遺跡 (平成18・19年度 藪川局部改良計画) ..... 22

4. 西浦B遺跡 (平成21年度 店舗建築計画) ..... 22

5. 鍛冶沢遺跡 (平成22年度 農道青ノクキ線拡幅計画) ..... 26

6. 谷地遺跡 (平成22年度 消防庁舎建設用地造成計画) ..... 26

7. 円田入B遺跡 (平成23年度 個人住宅建築計画) ..... 36

8. 寺門前遺跡 (平成23年度 社会福祉協議会施設建設計画) ..... 39

9. 諏訪館前遺跡隣接地 (平成23年度 清立寺駐車場造成計画) ..... 46

10. 三の輪遺跡 (平成24年度 個人住宅建築計画) ..... 47

第2節 緊急発掘調査 ..... 50

1. 戸ノ内遺跡 (平成21年度 個人住宅建築計画) ..... 50

2. 愛宕山遺跡 (平成24年度 愛宕神社神楽殿再建計画) ..... 59

第4章 総括 ..... 65

参考・引用文献 ..... 66

報告書抄録 ..... 67



円田盆地から西に高木丘陵と青麻山、新雪の蔵王連峰を望む



# 第1章 蔵王町の環境と遺跡

## 1. 蔵王町の位置と自然環境

### (1) 地形・地質

蔵王町は宮城県南西部にあり、奥羽山脈に連なる蔵王連峰の東麓に位置する（第1・2図）。町域は東西23km、南北13kmで面積は152.85km<sup>2</sup>を占め、海拔標高は最高点が西端の屏風岳で1,825m、最低点が南東部の松川と白石川の合流点で20mを測る。

町域の6割を山林原野が占めており、西部は高原・山岳地帯、東部は平野・丘陵地帯である。西部は蔵王火山の活動による溶岩台地が発達し、火砕流堆積物からなる扇状地地形も見られる。東部の松川流域には盆地や段丘群が形成されており、沖積平野での稲作と丘陵部での果樹栽培が盛んである。

蔵王連峰は、火口湖（御釜）・溪谷・湿原など変化に富んだ地形を擁し、高山植物をはじめとする多様な動植物が生息・生育する。蔵王国定公園・蔵王高原国立自然公園の指定地域となっているほか、成層火山群の活火山である蔵王火山は地質学的に貴重なフィールド

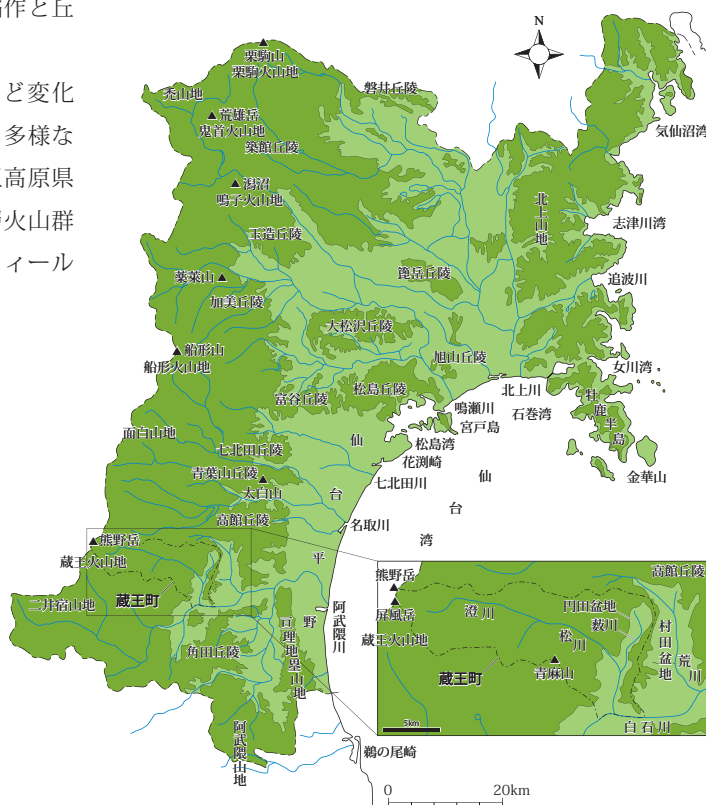
ドとして「日本の地質百選」に選定されている。

蔵王連峰から東流する松川は、独立峰をなす青麻山の東麓で流路を南へ向けて白石川に注ぐ。町域の東部では2～3段のやや広い段丘面を形成し、北東部では支流の藪川流域に円田盆地を擁する（第6図）。

円田盆地は東西1.2km、南北3.5kmの底面を持ち、南を除く三方を丘陵で画されている。盆地北側から西側にかけては高木丘陵、東側は愛宕山丘陵と通称されている。盆地内を蛇行しつつ南流する藪川は自然堤防が未発達で、流域に湿地帯を形成している。



第1図 蔵王町の位置



第2図 蔵王町と周辺の地形

### (2) 気候

宮城県地方の気候区分は、全体としては温帯湿潤気候に属する。温帯湿潤気候では、平均気温が最寒月でマイナス3度以上、最暖月で22度以上で四季の変化が明瞭であり、夏に高温多雨となる。宮城県地方はこうした気候の北限に近く、海拔標高が500mを越すと、最寒月の平均気温はマイナス3度以下となり、亜寒帯気候の様相を帯びる。夏季の平均気温は最暖月の8月で25度前後のところが多い。降水量は、年間の平

均値が仙台で1,392ミリ、西部山地で2,000ミリ前後である。積雪日数は、海岸部で30日以下、中央部で50日程度、西部山間部では90日以上に及ぶ。

県南部では、沿岸部は海洋性気候の影響が強く、年較差、日較差ともに小さい。夏季は冷涼、冬季は緯度の割には温暖であり、福島県浜通りの気候の延長線上にある。一方、蔵王町を含む西部内陸方面は福島県中通りの気候の延長線上にあり、より寒冷で積雪も多く、豪雪地帯に指定されている。

### (3) 動植物相

町域の東部は古くから人間活動の場として開発され、青麻山以東の平野・丘陵地帯を中心に水田・畑地などの農耕地が開けている。丘陵地帯では、かつては薪炭材などとして盛んに利用され、萌芽再生によって維持された里山の雑木林に特有のコナラ・クリ林が優勢であった(第3図)。現在はこれらの伐採が進んでスギ・ヒノキ・アカマツが植林されたり、果樹園が開かれてモザイク状の分布を形成している。

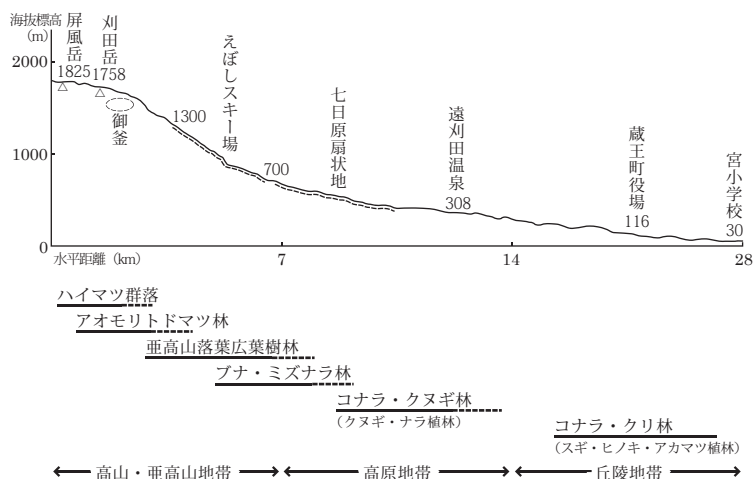
高原地帯も遠刈田温泉から七日原にかけてはコナラ・クヌギ林が優勢であったが、伐採が進んで草原となった後は厳しい気象条件により植生が回復せず、クヌギ・ナラなどの植林・造林が繰り返行なわれている。烏帽子岳中腹にかけては冷温帯落葉広葉樹林の山地帯で、広大なブナ・ミズナラ林が形成されている。

西部の亜高山帯では、常緑針葉樹林のアオモリトドマツ林が広大な森林を形成している。屏風岳東面の断崖には亜高山落葉広葉低木林が分布する。

さらに高度を増した高山帯では高木の

生育は見られず、ハイマツ低木林が分布する。山頂付近は火山荒原となり、イワカガミ・コマクサなどの高山植物がカーペット状の群落を形成している。

こうした森林地帯の植物相を背景として、町内には大型獣のニホンツキノワグマ・ニホンカモシカ、中小型獣のホンダヌキ・ホンゴツネ・トウホクノウサギ・ホンドリス・ホンDOIタチ・オコジョ・ムササビ・ネズミ類・モグラ・ヤマネ・コウモリ類などの哺乳動物をはじめとする多様な動物が生息している。



第3図 蔵王町の東西模式断面と植生の垂直分布

## 2. 蔵王町の歴史的環境と遺跡の概況

### (1) 歴史的環境

蔵王町と七ヶ宿町からなる刈田郡は、かつては白石市を含む宮城県南西部の広い地域を占めていた。この刈田・白石地方の地形がつくりだす景観について「刈田郡誌」では「郡下到るところ連丘連山起伏し、谿谷溪流を見る。この一圓の水を聚めて阿武隈川に運ぶもの即ち水清く、石白き白石川にして、其本流支流に沿って、管内各村を往訪すべき諸道開けたり…」と記している(刈田郡教育会 1928)。

蔵王東麓の広大な山地・丘陵と、これを限なく開析する大小の河川は、多種多様な動植物を生息・生育させ、先史時代には人類の豊かな生活基盤となっていたことが濃密な遺跡分布から窺える。このような複雑な地形環境から、歴史時代には軍事上の要衝地域として数多くの城館が構築され、しばしば戦乱の舞台ともなったが、一方で土着の耕作者にとっては耕地が狭小である上に低地は洪水の常襲地帯で、時折集落や耕地の流失もあり、交通の難所でもあった。

刈田郡に関する最古の記録は、「続日本紀」に記された養老5年(721年)の陸奥国刈田郡建置に関する

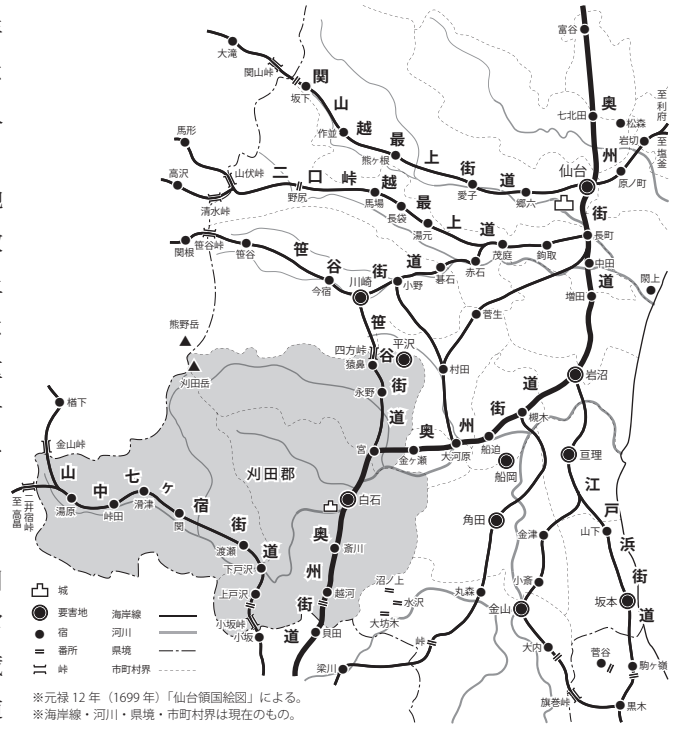
記事である。これによると刈田郡は柴田郡のうち二郷を分割して設置され、仙南地方では最も遅い建郡であった。陸奥国は7世紀半ばに亘理・伊具地方を北辺として成立し、7世紀後半頃には大崎平野周辺までその範囲を広げていたと考えられている。このため、柴田・刈田郡周辺は陸奥国成立後の早い段階で律令政府の安定した統治下に置かれていたであろう。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配下にあったとみられ、丈六阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂が建立された。また、奥州合戦について「吾妻鏡」の伝えるところでは、文治5年(1189年)に藤原泰衡軍は刈田郡根無藤(蔵王町円田)に城郭を構え、四方坂(同平沢)との間で源頼朝軍と進退七度に及ぶ戦いの末に敗退したという。このことから、この地域が軍事上重要視されており、根無藤から四方坂を経る道筋が、出羽国へ至る出羽道の一部であったことが窺える。

鎌倉時代以降は白石氏(刈田氏)が刈田郡の中心勢力であった。白石氏は南隣の伊達郡を本拠とする伊達氏との関係が深く、戦国時代には伊達氏の傘下に組み込まれた。天正18年(1590年)に豊臣秀吉による

奥州仕置で刈田郡は伊達領と確定されたものの、翌年の再仕置で伊達政宗が岩出山城へ移封され、刈田郡は長井・信夫・伊達などの各郡とともに会津黒川城に入封した蒲生氏郷に与えられた。慶長3年（1598年）には蒲生氏に代わって会津に入封した上杉景勝の領地となり、家臣甘粕備後景継が白石城主となったが、政宗は慶長5年（1600年）に徳川家康の命を受けて上杉氏を押さえるため白石城を攻めて奪還し、刈田郡は仙台藩領となった。政宗は慶長7年（1602年）に重臣・片倉景綱を白石城主とし、藩境西南の固めを任せた。以後は代々片倉氏が白石城主を務め、江戸時代を通じて刈田郡の過半は片倉氏の知行地であった。

江戸時代には奥羽山脈を挟んで陸奥国を奥州街道、出羽国を羽州街道が縦貫しており、刈田郡内にも奥州街道が白石城下を通過していた。また、奥州街道の宮宿（蔵王町宮）から分岐して永野宿・猿鼻宿・四方峠（蔵王町円田）を経由し、笹谷峠を越えて山形の羽州街道へ抜ける笹谷街道も設けられていた（第4図）。



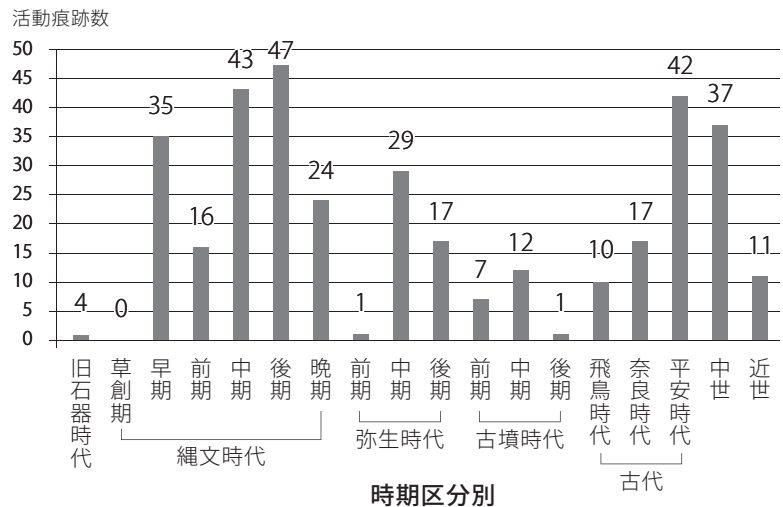
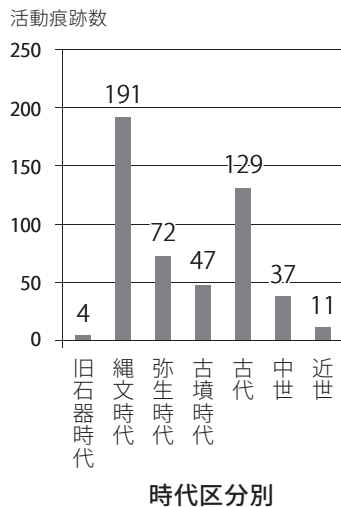
第4図 刈田郡周辺の街道（風間 1983 原図）

(2) 遺跡の概況

蔵王町内における周知の遺跡は現在 192 か所を数える(第6～9図、第1表)。その多くは町域東部の平野・丘陵地帯に分布し、①青麻山東麓の丘陵と段丘上、②松川北岸の段丘と高木川など支流流域の丘陵上、③円田盆地に接する丘陵上に集中域を形成する。なお、町域西部の高原地帯では七日原扇状地の扇端部に少数の遺跡が分布する。これらの遺跡のほとんどは、複数の時代や時期区分に比定される活動痕跡が重複する複合遺跡であるが、時代や時期ごとの分布には一定の傾向が認められ、主に生業形態の変化を反映している。

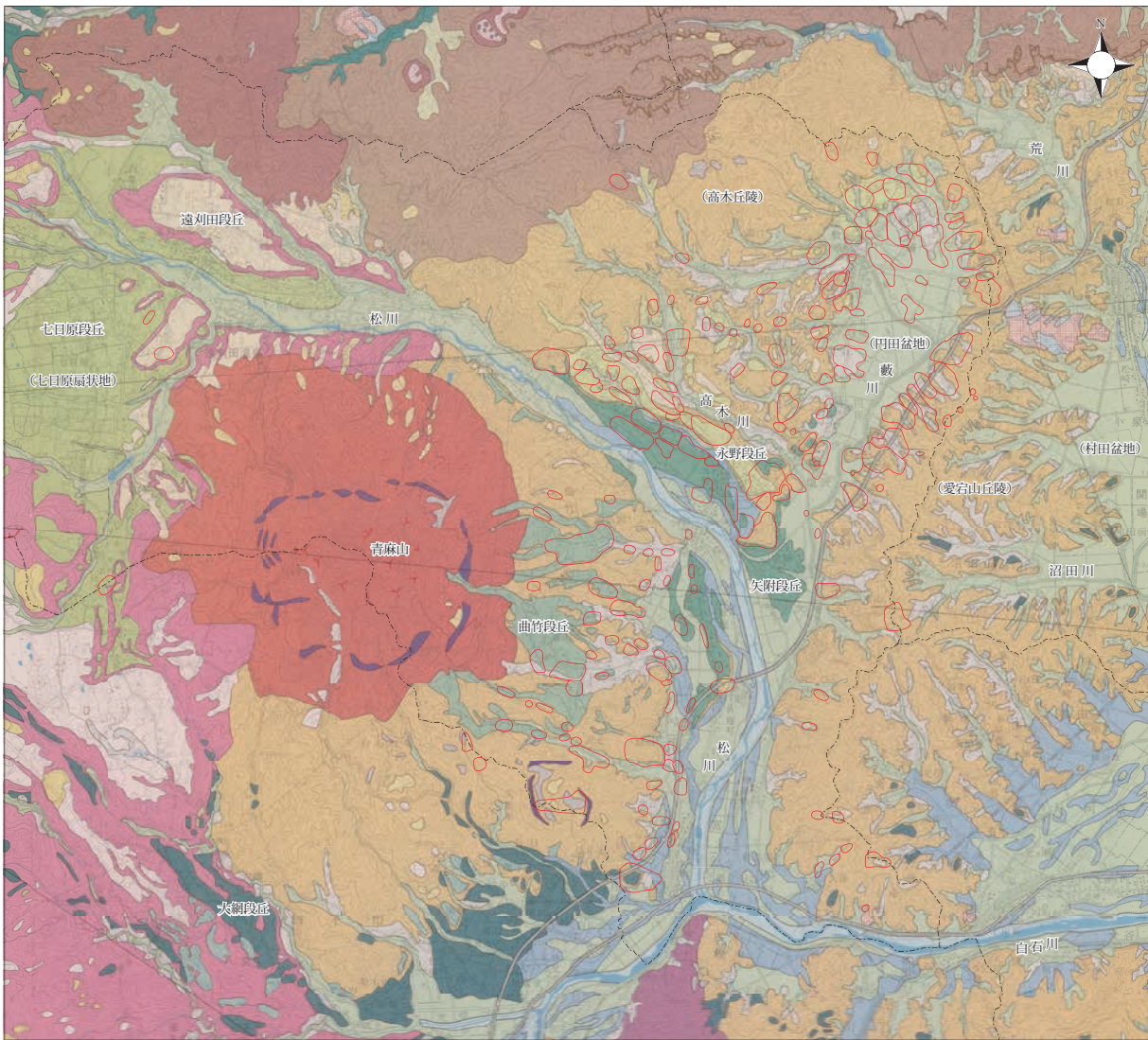
各遺跡に残された活動痕跡を時期区別に集計するとその総数は 491 か所を数え、時代・時期ごとの人間活動の動態を窺い知ることができる(第5図)。

旧石器時代から縄文時代草創期にかけての活動は低調であるが、早期になると激増する。前期には半減するが中期に再び増加傾向を示し、後期には活動痕跡が最多となる。晩期には再び半減し、弥生時代前期の活動は低調である。中期には回復するが、その後は段階的な減少傾向が見られ、古墳時代後期の活動は低調である。飛鳥時代以降、再び活動は活発化するが、平安時代の活動痕跡はほとんどが9世紀代に比定される



※各時代・時期区分の時間幅は均等ではない。※時期区分が不明な活動痕跡があるため、時期区分別の合計と時代別の活動痕跡数は一致しない。

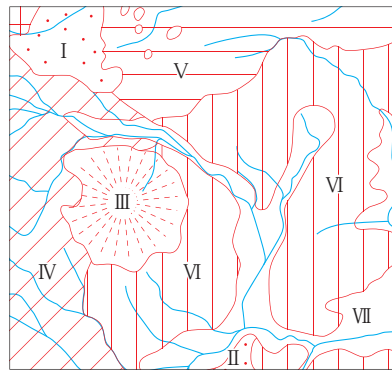
第5図 蔵王町の遺跡における活動痕跡の動態



- 山地及び丘陵地**  
(蔵王火山)  
山麓丘陵地  
(青麻火山)  
山地  
尖頂峰  
火山性急崖  
(非火山性山地)  
奥羽山脈の山地(峩々)  
大鳥谷山地  
山頂平坦地(大森付近)  
大萩山地  
(非火山性丘陵地)  
高い丘陵地  
低い丘陵地  
頂部平坦地  
高位谷底  
旧火山性急崖
- 低地**  
河岸平野・谷底平野  
(後背湿地を区別した区域では自然堤防)  
後背湿地  
河原及び堤内地

- 台地及び段丘**  
高位段丘  
(蔵王東麓段丘群)  
火山泥流台地(弥治郎泥流台地)  
遠刈田段丘  
七日原段丘  
川原子段丘  
蔵本段丘  
大網段丘  
(松川段丘群)  
永野段丘  
曲ヶ竹段丘  
矢附段丘  
低位段丘
- その他**  
人工平坦地(主として切土による部分)  
人工平坦地(主として盛土による部分)  
支倉川流域と荒川流域の間の崖線
- 遺跡**  
遺跡範囲(蔵王町内)
- 行政界**  
市町の境界

1:100,000  
2000m 0 2000 4000  
(5万分の1 都道府県土地分類基本調査 地形分類図「白石」)



- 地形区分図**  
I 大鳥谷山地  
II 大萩山地  
III 青麻火山  
IV 蔵王山麓丘陵地  
V 高い丘陵地  
VI 低い丘陵地  
VII 白石川河岸平野
- 行政区分図**  
川崎町  
蔵王町  
白石市  
村田町  
大河原町

第6図 蔵王町の地形区分と遺跡の分布

もので占められており、中世に入って13世紀代の活動痕跡が見られるようになるまでの期間は考古学的には空白期となっている。なお、前述のとおり12世紀には奥州藤原氏の影響下で阿弥陀堂が建立されたとみられる。近世に関しては周知の遺跡数は少ない現状にあるが、奥州街道の宮宿をはじめ街道筋を中心に活発な活動があった。

以下、各時代・時期における活動痕跡を概観する。

**旧石器時代** ナイフ形石器が出土した持長地遺跡など、低位段丘上で4か所の活動痕跡が認められる。いずれも単独出土・採集資料のため、帰属時期や活動の内容には不明な点が多い。

**縄文時代** 青麻山東麓の丘陵・段丘上や松川北岸の段丘・丘陵上などに191か所の活動痕跡が認められる。

草創期は明確な活動痕跡が発見されていない。

早期は青麻山東麓の明神裏遺跡・上原田遺跡・沢入D遺跡、松川北岸の手代木遺跡・三本槻A遺跡、七日原扇状地の北原尾遺跡などがあり、比較的小規模とみられる活動痕跡が広範囲に点在する。明神裏遺跡は明神裏Ⅲ式（林1962）の標識遺跡である。

前期は青麻山東麓の上原田遺跡・長峰遺跡、松川北岸の西浦遺跡・上曲木B遺跡、七日原扇状地の七日原遺跡などがあり、青麻山東麓から松川北岸にかけての段丘上に多く分布する。

中期は青麻山東麓の上原田遺跡・二屋敷遺跡、松川北岸の谷地遺跡・寺門前遺跡・高木遺跡・鞘堂山遺跡・湯坂山B遺跡などがあり、松川北岸の段丘上に多く分布する。中期前葉の谷地遺跡では住居跡11軒、貯蔵穴50基、遺物包含層などを確認している。土偶などを含む多量の遺物が出土し、拠点的な集落跡と考えられる。鞘堂山遺跡では中期中葉の住居跡5軒、貯蔵穴23基などを確認し、住居は貯蔵穴・柱穴群を囲むように配置されていた可能性がある。湯坂山B遺跡では中期後葉の住居跡17軒、貯蔵穴16基などを確認し、土笛などを含む多量の遺物が出土している。

後期は青麻山東麓の二屋敷遺跡・山田沢遺跡、松川北岸の西浦B遺跡などがあり、青麻山東麓の自然堤防上から松川北岸の段丘上に多く分布する。二屋敷遺跡では後期初頭～前葉の炉跡2基、土器埋設遺構2基、配石遺構1基などが確認されている。西浦B遺跡では広場を囲むように弧状に配置された後期初頭～前葉の建物跡23棟、貯蔵穴31基などが確認されている。

晩期は青麻山東麓の下別当遺跡・願行寺遺跡・鍛冶沢遺跡などがあり、青麻山東麓の沢地形に面した段丘上に多く分布する。鍛冶沢遺跡では後期末～晩期末に

かけての土坑墓・土器埋設遺構・建物跡・住居跡などの遺構群が確認され、建物群は広場を囲むように弧状に配置されていた。また、鍛冶沢遺跡では中空土偶、願行寺遺跡では屈折土偶が採集されている。

**弥生時代** 72か所の活動痕跡が広範囲に点在する。

前期は明確な活動痕跡に乏しいが、青麻山東麓の鍛冶沢遺跡では、縄文時代晩期から継続する墓域で再葬墓が確認されている。

中期は松川北岸の西浦遺跡、円田盆地の大橋遺跡・立目場遺跡・都遺跡などがある。この時期になると、松川北岸から円田盆地にかけての丘陵・段丘・微高地上に多く分布するようになり、本地域における遺跡分布の大きな画期となっている。西浦遺跡は円田式（伊東1955）の標識遺跡である。都遺跡では籾殻圧痕のある土器片が出土している。

後期は円田盆地の愛宕山遺跡・天王遺跡・赤鬼上遺跡・磯ヶ坂遺跡などがあり、円田盆地の微高地から丘陵上にかけて多く分布する。

**古墳時代** 47か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上にほぼ限定され、一部が青麻山東麓の微高地上に分布する。

集落跡を見ると、前期は円田盆地の大橋遺跡・堀の内遺跡・伊原沢下遺跡・六角遺跡などがあり、丘陵尾根上に立地する。大橋遺跡では住居跡3軒が確認され、県内における塩釜式最古段階の集落跡とみられる。中期は円田盆地の中沢A遺跡・台遺跡・都遺跡・窪田遺跡などがあり、丘陵尾根・微高地上に立地する。中沢A遺跡では住居跡9軒が確認され、県内における南小泉式最古段階の集落跡とみられる。台遺跡では盛土と筏地業による水田跡が確認されている。後期は円田盆地の窪田遺跡で陶器MT15型式期の須恵器が出土しているが、明確な活動痕跡は未確認である。

高塚・横穴古墳を見ると、円田盆地の丘陵上に夕向原古墳群・古峯神社古墳・宋膳堂古墳・天王古墳群・西脇古墳・中屋敷古墳・八幡古墳、青麻山東麓の松川・白石川の合流点付近の微高地上に明神裏古墳がある。古峯神社古墳は主軸長約38m、夕向原1号墳は主軸長約57mの前方後円墳、宋膳堂古墳は直径約30mの円墳である。明神裏古墳は墳丘が残存しないが、凝灰岩板石を用いた箱式石棺が確認されている。

**古代** 129か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上に拠点的なものを含む活動痕跡が密集し、青麻山東麓から松川北岸にかけての丘陵・段丘・微高地上の広範囲には比較的小規模とみられる活動痕跡が点在する。

飛鳥時代は塩沢北遺跡・十郎田遺跡・窪田遺跡・諏訪館横穴墓群などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。塩沢北遺跡では住居跡3軒が確認され、陶器TK217型式期の須恵器が出土している。十郎田遺跡では、材木堀による大規模な長方形区画施設と住居跡27軒、建物跡5棟などが確認され、出土した土器群には福島～関東地方との関係を窺わせるものが含まれている。諏訪館横穴墓群は所在を確認できない。

奈良時代は堀の内遺跡・六角遺跡・都遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡・前戸内遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に分布する。六角遺跡では大溝による区画施設と住居跡などが確認されている。住居跡には短い煙道をもつカマドを付設するものがみられ、出土した土器群は福島～関東地方との関係を窺わせるものが主体的である。こうした土器群は円田盆地の複数の遺跡で確認され、移民を伴った外来勢力の移入を強く示唆している。都遺跡では材木堀・大溝による区画施設と建物跡などが確認され、多賀城創建期とみられる軒平瓦が採集されていることから官衙関連施設の可能性が考えられている。これらの活動痕跡の多くは奈良時代前半～中頃に位置づけられ、奈良時代後半の明確な活動痕跡は未確認である。

飛鳥～奈良時代の活動痕跡が円田盆地にほぼ限定されるのに対し、平安時代の活動痕跡は青麻山東麓から松川北岸にかけての地域を含めた広範囲に分布する。円田盆地では東山遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・赤鬼上遺跡・六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・戸ノ内脇遺跡、松川北岸では西浦B遺跡、青麻山東麓では観音堂山遺跡・青竹遺跡・二屋敷遺跡・下原田遺跡などがある。東山遺跡・西浦B遺跡・観音堂山遺跡・赤鬼上遺跡などでは、燃焼部から煙道までの全体を河原石組みで構築したカマドを付設する住居跡が確認されている。東山遺跡では土器溜遺構が確認され、「万田」などの墨書土器が多量に出土している。前戸内遺跡では、住居跡14軒、建物跡21棟などで構成される拠点的な集落跡が確認されている。集落内には建物跡が逆L字形に配置される一角があり、郷長・百姓クラスの豪族居宅と考えられている。「苜田」「草手」などの墨書土器が出土している。これらの活動痕跡の多くは平安時代前葉に位置づけられ、平安時代中葉以降の明確な活動痕跡は未確認である。なお、平安時代末葉には円田盆地の丘陵上に「丈六阿弥陀如来坐像」（県指定文化財）を安置した阿弥陀堂が建立されたとみられ、現存する「平沢弥陀の杉」（県指定天然記念物）は阿弥陀堂の参道杉並木として植えられたものと伝えられている。

**中世** 37か所の活動痕跡が確認されている。このうち15か所は城館跡で、青麻山東麓の松川に面した丘陵上、松川北岸の丘陵上、円田盆地西縁の丘陵上に分布する。また、城館跡に隣接する段丘・微高地上で屋敷跡が確認されているが、集落跡は未確認である。

城館跡は、青麻山東麓の宮城館跡・山家館跡・館の山城跡・青竹遺跡・曲竹小屋館跡、松川北岸の棚村館跡、円田盆地の矢附館跡・花楯館跡・築館館跡・兵衛館跡・西小屋館跡などがある。これらの機能時期・内容については詳らかでないが、概ね2km前後の間隔で丘陵突端部を繋ぐように分布することから、相互に関連を持ちながら機能したとみられる。兵衛館跡は円田盆地最奥部にあり、丘陵頂部の平場を画する土塁・空堀が良好に残存する。西小屋館跡は円田盆地北部の微高地上にあり、土塁と水堀を伴う方形館である。

城館跡以外では、青麻山東麓の持長地遺跡・二屋敷遺跡、円田盆地の西屋敷遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・六角遺跡・戸ノ内脇遺跡・本宿前遺跡・中組遺跡・堂の入遺跡・窪田遺跡・戸ノ内遺跡などがある。持長地遺跡は山家館跡、西屋敷遺跡は西小屋館跡に隣接し、武士階級とみられる屋敷跡が確認されている。十郎田遺跡では屋敷跡の一角で確認された井戸跡から多量の木製挽物荒型が出土し、屋敷内で木器生産が行われていたことが窺われる。

**近世** 遺跡登録上では11か所の活動痕跡が確認されている。円田盆地の車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡では、近世前半の屋敷跡、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡では近世中頃～後半の墓場が確認されている。宮ヶ内上遺跡は製鉄遺跡とみられる。松川北岸の岩崎山金窟址では、江戸初期には仙台藩主伊達家の命により採掘されていた。伊達家家臣の高野家が拝領した平沢要害は遺構が現存しないが、「平沢要害屋敷絵図」には本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭的な構造が窺える。

現存する近世の建造物としては、青麻山東麓の我妻家住宅（江戸中期、国指定文化財）、刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、円田盆地の奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）、日吉神社本殿（江戸中期）などがある。日吉神社は高野家の領地替えの時に伊達郡より遷座され、刈田嶺神社は刈田郡総鎮守として白石城主片倉家の保護を受けた。また、街道に関わるものとして青麻山東麓の笹谷街道に曲竹一里塚があり、四方峠付近には古道の一部が保存されている。

このほか、近代遺構として遠刈田製鉄所高炉跡があり、明治時代後期の高炉の基礎部分が現存している。

## 第 2 章 平成 18～24 年度の遺跡調査概要

### 1. 埋蔵文化財保護調整の概要

蔵王町内における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は現在 192 か所を数え、分布調査等による新規発見遺跡も随時追加されている。これらを文化財保護法に基づき適切に保護するため、農地転用および各種開発を行なう際には、事業者に対して埋蔵文化財との関わりについての確認を求め、関わりが予想される場合には宮城県教育委員会と連携して埋蔵文化財保存協議を実施している。協議においては、開発予定地の地下の遺構の有無が不明な場合には「遺構確認調査」、遺構面に影響を与えない工事や施工範囲が狭小な場合、遺構が存在する可能性が低い場合には「工事立会」を行ない、過去に発掘調査済みあるいは遺構が存在しないことを確認済みの場合には「慎重工事」としている。

さらに、遺構確認調査で遺構の分布が確認された場

合には、必要に応じて事業者計画の変更等を求め、遺跡の現状保存に努めている。また、事業主旨および緊急性などから遺跡の破壊が避けられない場合には、事前に緊急発掘調査（本発掘調査）を行なって遺跡の記録保存を図ることとしている。

平成 18～24 年度の 7 ケ年度における埋蔵文化財保存協議の対象遺跡は、県営ほ場整備事業（円田 2 期地区）に関わるもの（町文化財調査報告書第 3・4・6・8・11・13～17 集に所収）を除いて延べ 70 遺跡に及ぶ（第 1 表）。個人住宅等の協議件数に大きな変動は見られないものの、県営ほ場整備事業などに伴う大規模調査で埋蔵文化財に関わる業務量は増加しており、平成 18 年度には文化財担当職員を 1 名から 2 名に増員するなどして調査体制の拡充を図ってきた。

### 2. 平成 18～24 年度の遺跡調査概要

**平成 18 年度** 協議対象は 13 遺跡で、対応の内訳は確認調査 10 件、工事立会 3 件である。このうち 5 件の調査で遺構を確認した。原遺跡では土坑・柱穴を確認し、工事による掘削が及ばないことから現状保存とした。鍛冶沢遺跡では縄文時代の竪穴住居跡など多数の遺構・遺物が確認され、工事による破壊が避けられないことから、平成 19・20 年度に宮城県教育委員会が発掘調査を実施した（宮城県教育委員会 2010）。小原遺跡では平安時代の竪穴状遺構が確認され、設計変更により一旦は保存が図られたが、平成 23 年 3 月に改めて増築計画が提示されたことから平成 24 年度に本発掘調査を実施した（町 12 集）。台遺跡では須恵器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

**平成 19 年度** 協議対象は延べ 9 遺跡で、対応の内訳は確認調査 8 件、工事立会 1 件である。このうち台遺跡で古墳時代の竪穴住居跡などを確認した。計画内容は河川堤防工事であり、事業の必要性は高く工法等の変更も難しいことから、工事実施前に本発掘調査を実施することで合意している。

**平成 20 年度** 協議対象は 4 遺跡で、対応の内訳は確認調査 3 件、工事立会 1 件である。いずれの調査でも遺構は確認されなかった。

**平成 21 年度** 協議対象は延べ 11 遺跡で、対応の内訳は確認調査 8 件、慎重工事 3 件である。このうち 3 件の調査で遺構を確認した。西浦 B 遺跡（西浦北 30-2 外）では縄文時代の土坑・溝跡・柱穴など多数の遺構・遺物が確認され、工事による破壊が避けられないことから、平成 21 年度に本発掘調査を実施した（町 10 集）。西浦 B 遺跡（西浦北 51-2）では少数の土坑・溝跡・柱穴を確認し、工事による掘削が及ばないことから現状保存とした。戸ノ内遺跡では、平安時代の竪穴住居跡などが確認され、工事による破壊が避けられないことから本発掘調査に切り替えて調査を実施した。堂の入遺跡では湿地層中に灰白色火山灰の堆積を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。

**平成 22 年度** 協議対象は延べ 10 遺跡で、対応の内訳は確認調査 6 件、工事立会 2 件、慎重工事 2 件である。このうち 2 件の調査で遺構を確認した。観音堂山遺跡では宮城県教育委員会による調査で平安時代の竪穴住居跡などが確認され、工事による破壊が避けられないことから本発掘調査に切り替えて調査が実施された（宮城県教育委員会 2011）。谷地遺跡では縄文時代の土坑・焼土遺構・土器埋設遺構など多数の遺構が確認された。調査結果から縄文時代中期前葉の拠点集落

第1表 平成18～24年度の埋蔵文化財保存協議にかかる確認調査・工事立会・慎重工事一覧（番号アミカケは第2章で報告）

番号	遺跡番号	遺跡名	対応内容	協議箇所	調査原因	調査期間	対象面積	調査面積	遺構	調査成果
1	05100	小高遺跡	確認調査	大字平沢字小高敷5-1、字東長伏内26-1	個人住宅建築	平成18年4月21日	325㎡	45.0㎡		東向緩斜面
2	05087	白山遺跡	工事立会	大字小村崎字戸ノ内25-1	個人住宅建築	平成18年6月5日	689㎡	-		南向斜面、削平
3	05111	原遺跡	確認調査	大字小村崎字戸ノ内32-2	コミュニティセンター建築	平成18年6月28日～29日	295㎡	81.6㎡	○	西向斜面、土坑8・柱穴10
4	05020	鍛冶沢遺跡	確認調査	大字曲竹字鍛冶沢地内	広域営農団地農道整備 仙南2期地区（白石川崎線）	平成18年6月28日～7月13日	6,000㎡	800㎡	○	丘陵、住居・溝・土坑多数、縄文土器・石器
5	05126	小原遺跡	確認調査	大字曲竹字田中47-1、48-1、49-1、字神前33	特別養護老人ホーム建設	平成18年7月18日～24日	10,000㎡	1,500㎡	○	(町12集) 南向斜面、竪穴状遺構1、土師器・須恵器・近世磁器
6	05069	十文字遺跡	確認調査	大字田中十文字南29-4	個人住宅建築	平成18年9月28日	627㎡	76.8㎡		段丘平坦面
7	05103	丈六遺跡	確認調査	大字平沢字山の入地内	町道永野山の入平沢線改良	平成18年12月11日	700㎡	12.0㎡		湿地
8	05193	窪田遺跡	確認調査	大字平沢字田中174、175、185、186-1、186-2、187-1、187-2、188、189、190	店舗建築	平成18年12月20日	135㎡	20.8㎡		微高地
9	05020	鍛冶沢遺跡	確認調査	大字曲竹字鍛冶沢地内	広域営農団地農道整備 仙南2期地区（白石川崎線）	平成18年12月19日～22日	6,000㎡	109.6㎡	○	東向緩斜面、土坑・柱穴多数、縄文土器・石器
10	05118	青竹遺跡	確認調査	宮字沢田89-1	無線中継基地局設置	平成18年12月22日	4㎡	6.4㎡		東向緩斜面
11	05008	宋磨堂遺跡	工事立会	大字塩沢字戸ノ内脇地内	污水塩沢幹線整備	平成19年1月26日～2月19日	112㎡	-		谷地
12	05009	台遺跡	確認調査	大字塩沢字神前地内	藪川局部改良	平成19年3月6日	2,000㎡	50.0㎡		A地区、湿地、土師器・須恵器
13	05062	東浦遺跡	工事立会	大字田中東上31-4	個人住宅建築	平成19年3月6日	150㎡	-		段丘平坦面
14	05062	東浦遺跡	確認調査	大字田中東上26-1～6	個人住宅建築	平成19年4月16日	660㎡	96.0㎡		谷地
15	05103	丈六遺跡	工事立会	大字平沢字山の入35-1	個人住宅建築	平成19年4月20日～23日	123㎡	-		南向斜面、削平
16	05110	後原遺跡	確認調査	大字小村崎字後原6	個人住宅建築	平成19年6月20日	370㎡	53.0㎡		南向緩斜面
17	05045	中沢A遺跡	確認調査	大字平沢字中沢87-6	個人住宅建築	平成19年9月3日	500㎡	36.0㎡		南西向斜面・谷地
18	05160	西浦B遺跡	確認調査	大字田中字西浦北50-3	個人住宅建築	平成19年9月3日	450㎡	24.0㎡		段丘平坦面
19	05093	町尻遺跡	確認調査	大字平沢字町尻地内	町道永野山の入平沢線改良	平成19年9月3日	700㎡	54.0㎡		北東向緩斜面・湿地
20	05009	台遺跡	確認調査	大字塩沢字北地内	藪川局部改良	平成19年9月4日	1,200㎡	80.0㎡	○	B地区、北向緩斜面・湿地、住居5、土師器・石製構造物・縄文土器
21	05103	丈六遺跡	確認調査	大字平沢字山の入地内	町道永野山の入平沢線改良	平成19年10月24日	700㎡	25.0㎡		南向緩斜面・湿地
22	07101	傾城山遺跡	確認調査	大字矢附字東光91	無線中継基地局設置	平成19年10月24日	360㎡	24.0㎡		丘陵尾根・盛土
23	05070	湯坂山遺跡	確認調査	大字田中字湯坂山23-1、23-2、23-3	個人住宅建築	平成20年5月16日	141㎡	20.0㎡		東向斜面、斜面堆積物
24	05044	大橋遺跡	確認調査	大字平沢字屋木戸内81-1	個人住宅建築	平成20年8月27日	686㎡	41.0㎡		南東向緩斜面、削平
25	05018	下別当遺跡	確認調査	宮字下別当96-7	個人住宅建築	平成20年8月27日	496㎡	68.0㎡		丘陵平坦面
26	05045	中沢A遺跡	工事立会	大字平沢字宮ケ内下5-3	個人住宅建築	平成21年2月24日	420㎡	-		谷地、盛土
27	05160	西浦B遺跡	確認調査	大字田中字西浦北30-2、30-7、34-1、38-4、38-9、44-1	店舗建設	平成21年6月15日～7月9日	12,690㎡	2,276㎡	○	(町10集) 段丘平坦面、溝・土坑・柱穴多数、縄文土器・石器
28	05197	戸ノ内遺跡	確認調査	大字小村崎字戸ノ内中94	個人住宅建築	平成21年6月16日	805㎡	85.5㎡	○	南向緩斜面、住居1・井戸1・土坑4・性格不明遺構2、土師器・須恵器・灰種燻器・弥生土器
29	05077	戸ノ内脇遺跡	確認調査	大字塩沢字戸ノ内脇25-8	個人住宅建築	平成21年9月11日	377㎡	57.0㎡		南東向緩斜面、削平
30	05160	西浦B遺跡	確認調査	大字田中字西浦北51-2	店舗建築	平成21年11月12日	450㎡	105.0㎡	○	段丘平坦面、溝3・土坑1・柱穴2
31	05143	上葉ノ木沢遺跡	慎重工事	大字小村崎字一ツ橋112、113、114-1	個人住宅建築	-	399㎡	-		湿地
32	05196	西屋敷遺跡	確認調査	大字小村崎字西屋敷57	個人宅地内 物置付作業場建築	平成21年12月1日	93㎡	20.0㎡		東向緩斜面
33	05160	西浦B遺跡（隣）	慎重工事	大字田中字西浦上5・6・7	貸店舗建築	-	6,000㎡	-		湿地
34	05106	堂の入遺跡	確認調査	大字田中字堂の入57、58-1、60-1、59-7	工場建設	平成22年1月6日	1,363㎡	100.0㎡		東向緩斜面・湿地、灰白色火山灰
35	05077	戸ノ内脇遺跡	確認調査	大字塩沢字戸ノ内脇25-1	宅地造成	平成22年1月18日	2,992㎡	80.0㎡		東向斜面、削平・湿地



番号	遺跡番号	遺跡名	対応内容	協議箇所	調査原因	調査期間	対象面積	調査面積	遺構	調査成果
36	05129	七日原遺跡	確認調査	遠刈田温泉字七日原 1-16	就労支援施設浄化槽設置	平成 22 年 2 月 3 日	171㎡	28.5㎡	東向緩斜面	
37	05077	戸ノ内脇遺跡	慎重工事	大字塩沢字戸ノ内脇 25-16	宅地擁壁設置		40㎡	-	東向斜面、湿地	
38	05020	鍛冶沢遺跡	確認調査	大字曲竹字鍛冶沢地内	農道青ノクキ線拡幅	平成 22 年 4 月 19 日～20 日	330㎡	195.0㎡	東向緩斜面、縄文土器・石器	
39	05077	戸ノ内脇遺跡	慎重工事	大字塩沢字戸ノ内脇 25-16、25-1	個人住宅建築	-	116㎡	-	東向斜面、湿地	
40	05202	観音堂山遺跡	確認調査	大字曲竹字観音堂山 10 他	広域営農団地農道整備 仙南 2 期地区 (白石川崎線)	平成 22 年 9 月 6 日～21 日	6,000㎡	2,100㎡	宮城県教育委員会調査 (県 227 集) 南向緩斜面、住居 1・溝 1・炭窯 1、縄文土器・土師器・須恵器	
41	05193	窪田遺跡	工事立会	大字平沢字田中 186-1 他	店舗駐車場拡張	平成 22 年 9 月 15 日	893㎡	-	微高地	
42	05037	花権館跡	確認調査	大字門田字堤 7-1	個人農地造成	平成 22 年 10 月 14 日	1,800㎡	205.0㎡	痩せ尾根、谷地、削平	
43	05067	曲木遺跡	確認調査	大字門田字坂下前 35-1	個人住宅建築	平成 22 年 10 月 14 日	826㎡	58.0㎡	段丘平坦面	
44	05014	諏訪館前遺跡	確認調査	大字平沢字八ヶ屋敷 2-1	個人農地改良	平成 23 年 2 月 8 日	610㎡	112.0㎡	北東向緩斜面	
45	05104	平沢遺跡 (隣)	工事立会	大字平沢字台屋敷地内	平沢用水路整備	平成 23 年 2 月 17 日	180㎡	-	湿地	
46	05021	谷地遺跡	確認調査	大字門田字谷地 76-2	消防庁倉庫建設用地造成	平成 23 年 2 月 22 日～3 月 1 日	2,120㎡	410.0㎡	段丘平坦面、溝・土坑・土器埋設遺構・焼土遺構・柱穴多数、縄文土器・石器	
47	05077	戸ノ内脇遺跡	慎重工事	大字塩沢字戸ノ内脇 25-11、25-12	宅地擁壁設置	-	110㎡	-	東向斜面、湿地	
48	05020	鍛冶沢遺跡	工事立会	大字曲竹字鍛冶沢地内	広域営農団地農道整備 仙南 2 期地区 (白石川崎線)	平成 23 年 5 月 11 日	970㎡	-	東向緩斜面	
49	05173	諏訪館横六墓群	確認調査	大字平沢字台屋敷 50-2、51-1、63、字諏訪館 28-9	個人住宅建築	平成 23 年 5 月 27 日	123㎡	35.0㎡	北東向斜面	
50	05187	欠山遺跡	工事立会	大字曲竹字欠山地内	広域営農団地農道整備 仙南 2 期地区 (白石川崎線)	平成 23 年 5 月 31 日	129㎡	-	東向斜面、削平	
51	05146	門田 B 遺跡	確認調査	大字門田字清上 123-4	個人住宅建築 (震災復興事業)	平成 23 年 6 月 8 日	1,400㎡	162.4㎡	南向緩斜面、土器埋設遺構 4・土坑 4、縄文土器・石器	
52	05058	馬場北遺跡	確認調査	宮字明神裏 82、83-1、83-2、83-3	公民館建築	平成 23 年 6 月 9 日	1,700㎡	104.0㎡	西向斜面、湿地	
53	05161	寺門前遺跡	確認調査	大字門田字寺門前 51-1、西浦北 77-2、81-2	社会福祉協議会施設建設	平成 23 年 6 月 29 日～7 月 2 日	5,571㎡	432.8㎡	段丘平坦面、溝跡・土坑・柱穴多数、縄文土器・石器	
54	05005	長峰遺跡 (隣)	工事立会	宮字欠 70-5	個人住宅建築 (震災復興事業)	平成 23 年 11 月 21 日	99㎡	-	東向緩斜面	
55	05134	淡島山遺跡	慎重工事	大字曲竹字畑沢山 2-2	広域営農団地農道整備 仙南 2 期地区 (白石川崎線)	-	1,600㎡	-	北向斜面、谷地	
56	05189	磯ヶ坂遺跡	工事立会	大字小村崎字狐塚 32、33	個人住宅建築 (震災復興事業)	平成 23 年 12 月 26 日	469㎡	-	南向斜面、削平	
57	05014	諏訪館前遺跡 (隣)	確認調査	大字平沢字上ノ台 58	清立寺駐車場造成	平成 24 年 1 月 17 日	800㎡	108.0㎡	東向斜面、土坑 1・柱穴 3、土師器・近世陶器	
58	05091	本宿前遺跡	確認調査	大字門田字石橋 47、57-1	個人住宅及び作業場建築 (震災復興事業)	平成 24 年 2 月 10 日	943㎡	70.2㎡	北東向緩斜面、削平	
59	05062	東浦遺跡	確認調査	大字門田字東上 12	個人住宅建築	平成 24 年 3 月 7 日	2,419㎡	159.5㎡	南東向緩斜面、削平、土師器	
60	05092	中組遺跡	確認調査	大字門田字町前 58-1	個人住宅建築 (震災復興事業)	平成 24 年 3 月 9 日	800㎡	35.3㎡	東向緩斜面、湿地	
61	05194	三の輪遺跡	確認調査	大字小村崎字三の輪 53-1	個人住宅建築 (震災復興事業)	平成 24 年 4 月 21 日	105㎡	43.4㎡	丘陵南斜面、盛土整地層・柱穴 7、近世陶磁器	
62	05041	伊原沢下遺跡	確認調査	大字平沢字宮ヶ内上 14-1	個人住宅建築	平成 24 年 7 月 3 日	500㎡	88.5㎡	北向緩斜面、溝跡 1	
63	05199	三本槻 B 遺跡	確認調査	大字平沢字三本槻 9	個人住宅建築 (震災復興事業)	平成 24 年 8 月 7 日	485㎡	27.0㎡	北向斜面、削平	
64	05082	土ヶ市遺跡	確認調査	大字門田字見継 35-1、35-6	個人住宅建築	平成 24 年 9 月 11 日	952㎡	22.4㎡	南向斜面	
65	05188	下永野 B 遺跡	確認調査	大字門田字東下 4-1	個人住宅建築	平成 24 年 9 月 25 日	180㎡	11.2㎡	南向緩斜面	
66	05124	諏訪館跡	確認調査	大字平沢字諏訪館地内	町道平沢根無藤線歩道設置	平成 24 年 10 月 5 日	300㎡	40.0㎡	東向緩斜面、削平	
67	05173	諏訪館横六墓群	確認調査	大字平沢字立目場 81	愛宕神社神楽殿再建 (震災復興事業)				東向斜面、削平	
68	05174	諏訪館前遺跡	確認調査	大字門田字西浦北 38-12	店舗駐車場造成				東向緩斜面、斜面堆積物	
69	05012	愛宕山遺跡	確認調査	大字平沢字立目場 81	愛宕神社神楽殿再建 (震災復興事業)	平成 24 年 10 月 18 日～19 日	42㎡	45.0㎡	丘陵頂部平坦面、土坑 9・柱穴 3、弥生土器・土師器	
70	05160	西浦 B 遺跡	慎重工事	大字門田字西浦北 38-12	店舗駐車場造成	-	1,380㎡	-	段丘平坦面	

※番号は遺跡地図の緑色丸数字に対応。 ※ (隣) =隣接地 ※上記のほか、県営は場整備事業 (円田 2 期地区) にかかる確認調査・事前調査・工事立会等を実施している (町 6・8・11・13～17 集)。

跡の中心部と推定され、遺跡の重要性が高いことから用地の変更について協議したが、計画内容は消防庁舎の建設用地造成工事であり、事業の必要性は高く用地の変更も難しいことから、平成23～24年度にかけて本発掘調査を実施し現在整理事業を進めている。鍛冶沢遺跡では表土から縄文土器・石器が出土したが、遺構は確認されなかった。

**平成23年度** 協議対象は13遺跡で、このうち5件が震災復興事業（個人住宅建築等）である。対応の内訳は確認調査8件、工事立会4件、慎重工事1件である。このうち3件の調査で遺構を確認した。円田入B遺跡では縄文時代の土坑・土器埋設遺構などを確認した。計画内容は個人住宅建築（震災復興事業）であったので地下の遺構保護のため盛土を行なった上で施工することを提案し、合意が得られたことから現状保存とした。寺門前遺跡では縄文時代の土坑・柱穴など多数の遺構が確認された。調査結果から隣接する谷地遺跡と連続する縄文時代中期前葉の遺構群と推定され、遺跡の重要性が高いことから用地の変更について協議し、合意が得られたことから現状保存とした。諏訪館前遺跡隣接地では少数の土坑・柱穴が確認された。計画内容は切土・盛土を伴う駐車場造成であったが、遺構の分布範囲は切土の及ばない範囲であったことから現状保存とした。東浦遺跡では表土から土師器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

**平成24年度** 協議対象は10遺跡で、このうち3件が震災復興事業（個人住宅建築・神楽殿再建）である。対応の内訳は確認調査9件、慎重工事1件である。このうち3件の調査で遺構を確認した。三の輪遺跡では盛土整地層と柱穴が確認された。計画内容は個人住宅建築（震災復興事業）であり、出土遺物からいずれも近世後半以降の遺構と判断されたので保存の対象としなかった。伊原沢下遺跡では溝跡1条が確認されたが、堆積土の状況から新しい掘り込みと判断されたので保存の対象としなかった。愛宕山遺跡では、土坑が確認された。計画内容は神楽殿再建（震災復興事業）であり、地域の伝統文化継承の拠点として重要であることから、基礎の施工で破壊される範囲に限定して本発掘調査に切り替えて調査を実施し、これ以外の部分については現状保存とした。

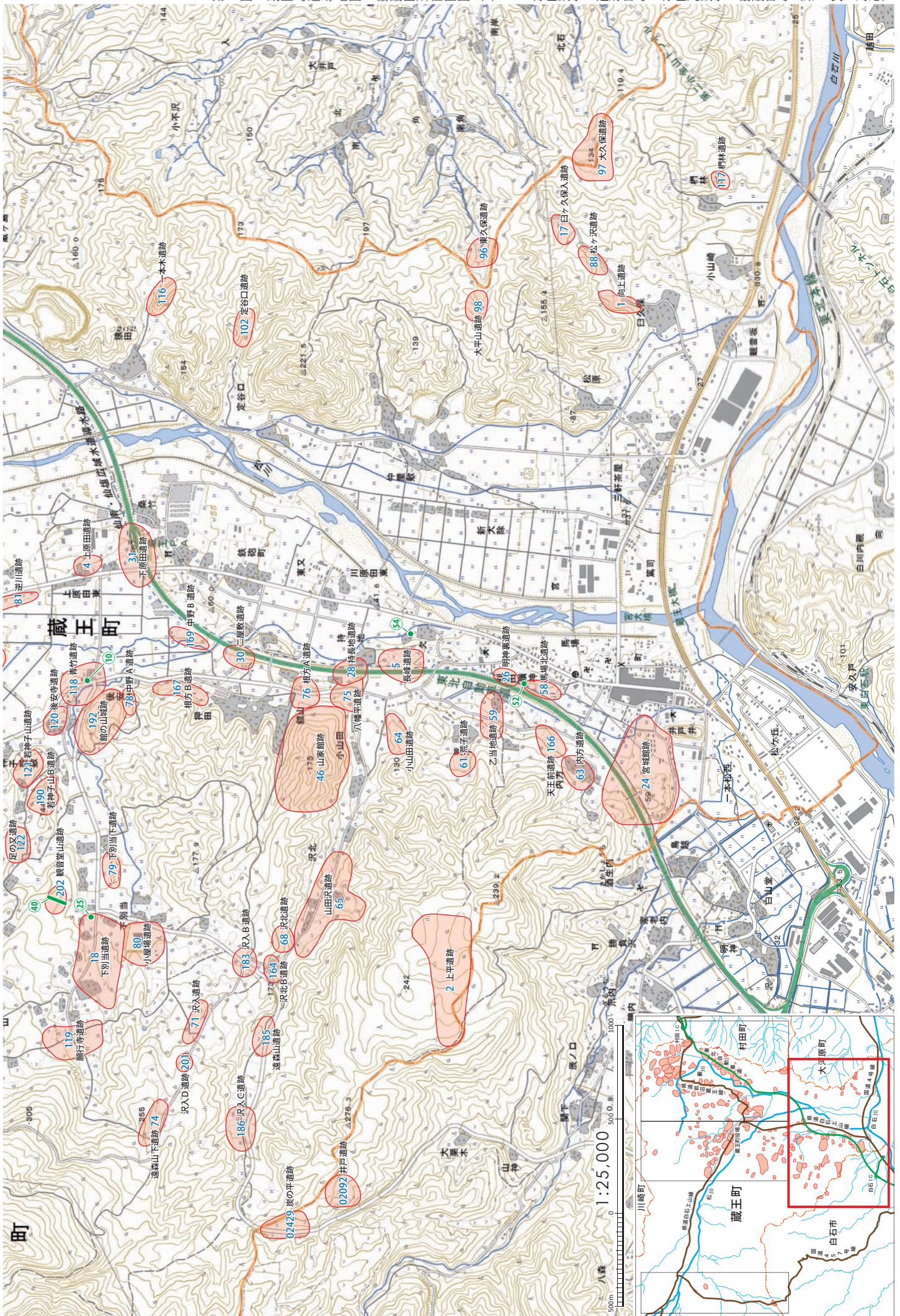
**県営ほ場整備事業に伴う調査** 円田盆地中・北部の水田地帯を対象とした経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業・円田2期地区）にかかる埋蔵文化財保存協議は、関係四者（事業主側：宮城県大河原地方振興事務所・蔵王町土地改良区、文化財保護側：宮

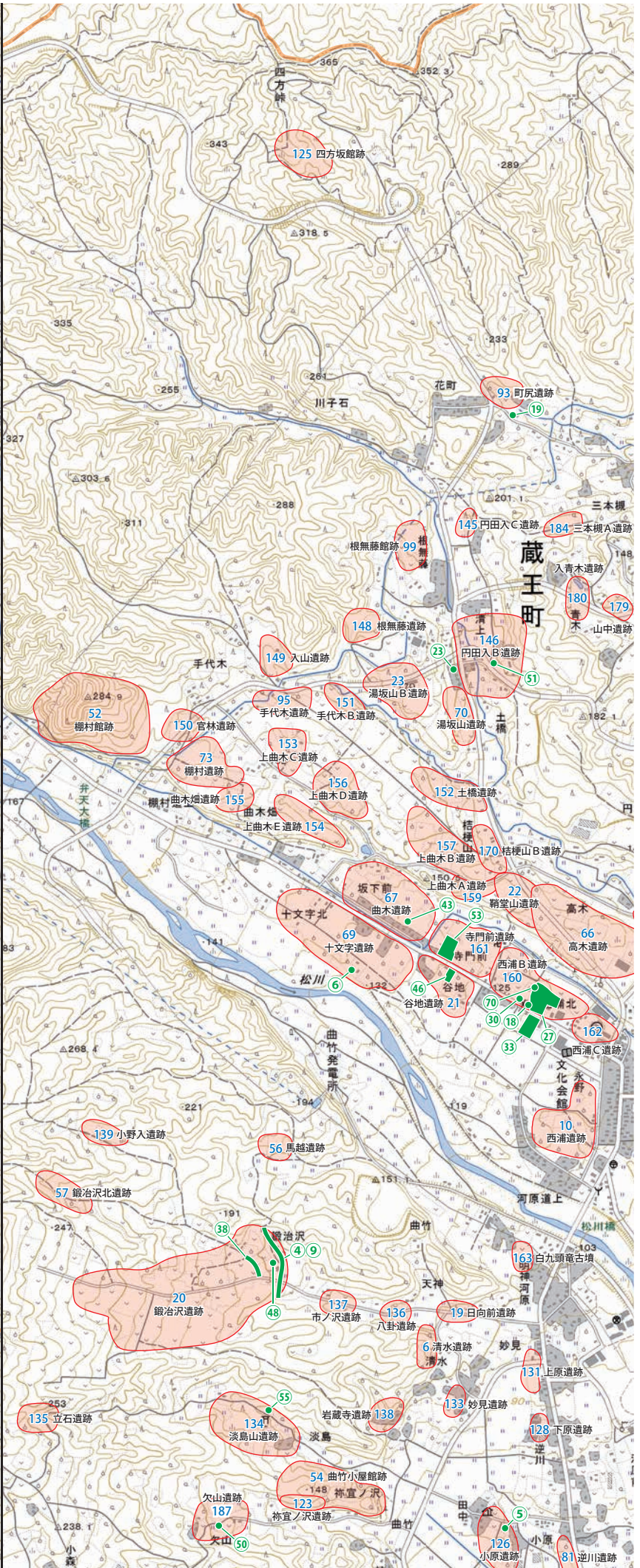
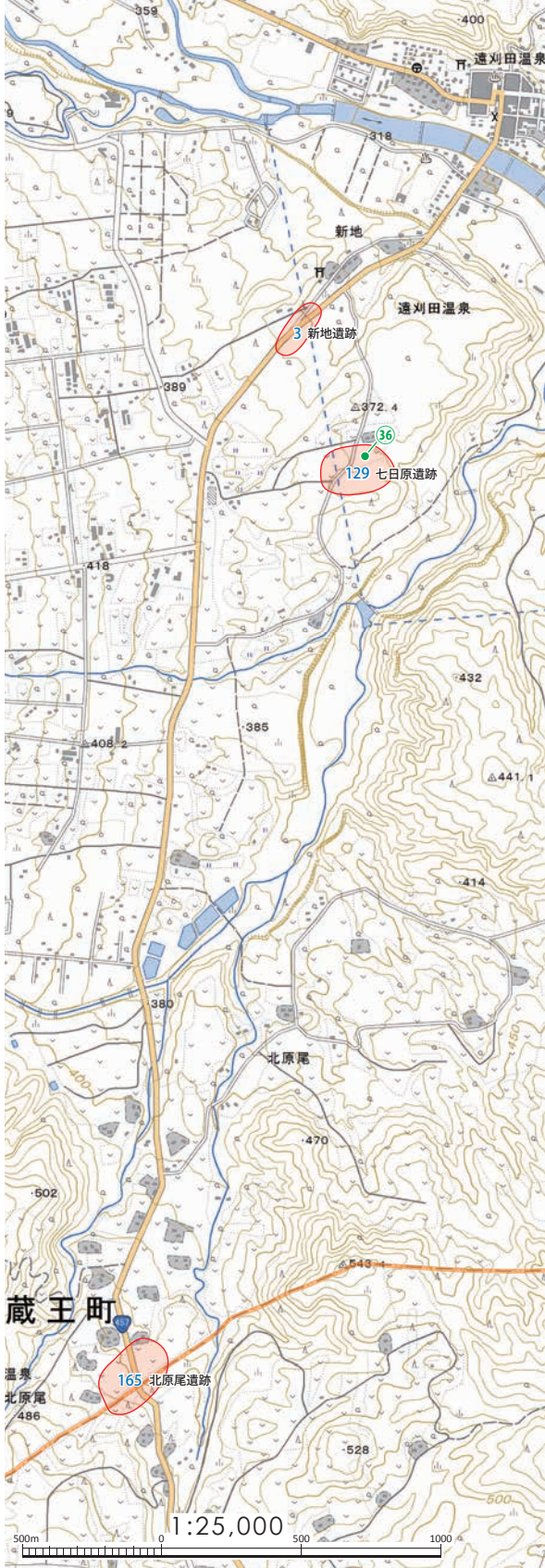
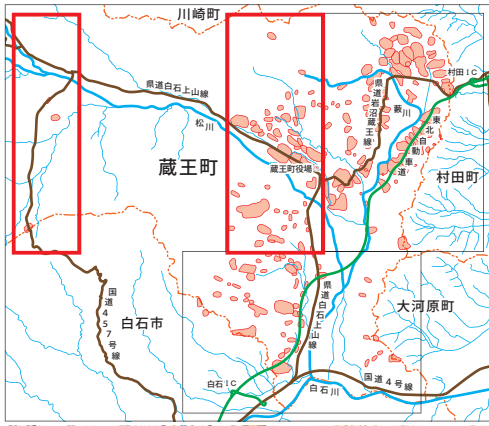
城県教育委員会・蔵王町教育委員会）によって平成8年度に開始された。平成12年度には町教育委員会が表面踏査による分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が大きく広がることが判明した。平成13年度には地方振興事務所より、水田・畑地部分は適宜盛土を行なって地下の遺構を保護し、幹線農道以外の作業用道路については未舗装の砂利道として実質的な遺構の破壊範囲をできるだけ減少させる見直し案が提示され、基本方針で合意に達した。

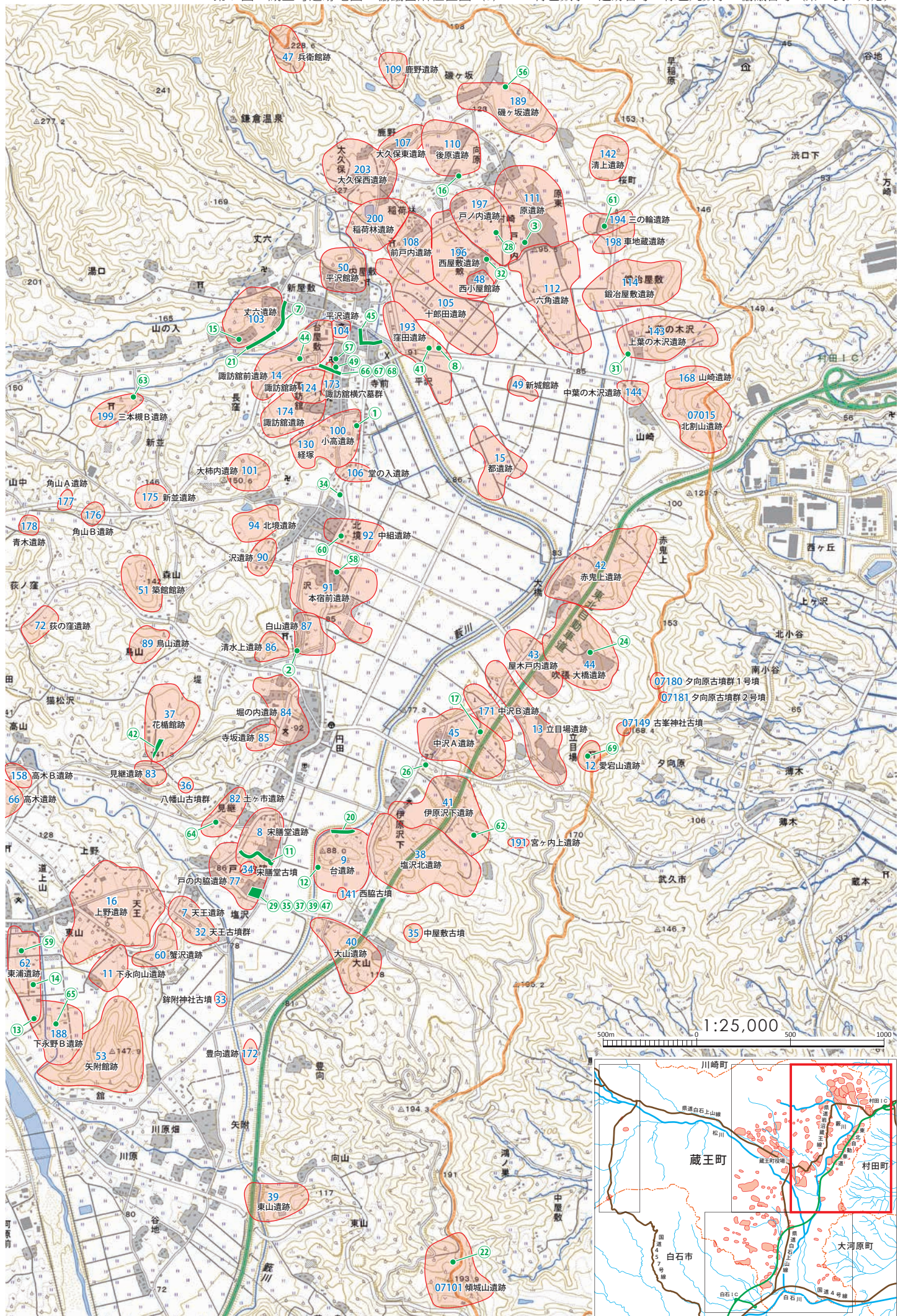
平成13・14年度には、各遺跡の遺構分布状況と遺構面深度の把握を目的とした確認調査を県教育委員会と町教育委員会が実施した。これを受けて、遺構が存在する範囲については基本的に盛土による現状保存を図り、計画田面が遺構面よりも低くなる切土範囲と、幹線農道・作業道・水路の建設に伴って遺構面が掘削される範囲については、緊急発掘調査（本発掘調査）を実施して記録保存を図ることが確認された。また、作業道のうち遺構面に掘削が及ばない範囲については、確認調査を実施した上で現状保存を図ることになった。平成14年度には地方振興事務所より各年度ごとの事業区域と施工計画が提示され、これを受けて町教育委員会が発掘調査計画を策定した。発掘調査は平成15年度より着手し、平成23年度までに16遺跡での野外調査を完了した。並行して進めてきたこれらの発掘調査の室内整理事業と発掘調査報告書作成の作業は、平成25年度までに完了する計画である。

**県営ほ場整備事業関連発掘調査一覧（本発掘調査のみ）**

- 平成15年度 都遺跡・新城館跡・窪田遺跡
  - 平成16年度 窪田遺跡
  - 平成17年度 中葉の木沢遺跡・上葉の木沢遺跡・鍛冶屋敷遺跡・車地藏遺跡・原遺跡
  - 平成18年度 六角遺跡
  - 平成19年度 戸ノ内遺跡・十郎田遺跡
  - 平成20年度 窪田遺跡・十郎田遺跡・前戸内遺跡・戸ノ内遺跡
  - 平成21年度 前戸内遺跡・西屋敷遺跡・磯ヶ坂遺跡
  - 平成23年度 六角遺跡・原遺跡
- 県営ほ場整備事業関連発掘調査報告書一覧**
- 平成17年（町3集） 都遺跡・新城館跡・窪田遺跡
  - 平成18年（町4集） 車地藏遺跡・鍛冶屋敷遺跡・原遺跡・上葉の木沢遺跡・中葉の木沢遺跡
  - 平成20年（町6集） 六角遺跡
  - 平成21年（町8集） 戸ノ内遺跡
  - 平成23年（町11集） 窪田遺跡
  - （町13・14集） 十郎田遺跡
  - 平成24年（町15集） 西屋敷遺跡
  - 平成25年（町16集） 前戸内遺跡
  - 平成26年（町17集） 磯ヶ坂遺跡・六角遺跡・原遺跡（印刷中）







第2表 蔵王町内遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	向上遺跡	散布地	古墳、古代
2	上平遺跡	散布地	縄文、古代
3	新地遺跡	散布地	古代
4	上原田遺跡	散布地	縄文早～後、古墳、古代
5	長峰遺跡	散布地	縄文前・中、弥生中、古代
6	清水遺跡	散布地	縄文・弥生中
7	天王遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中・後、古代
8	宋膳堂遺跡	散布地	弥生中・後、古墳、平安
9	台遺跡	散布地・水田	弥生中、古墳中・後、平安、中世・近世
10	西浦遺跡	集落・散布地	縄文早～後、弥生、古代
11	下永向山遺跡	散布地	縄文中、弥生中・後、古代
12	愛宕山遺跡	散布地	弥生中・後、古墳前・中
13	立目場遺跡	散布地	縄文、弥生中・後、古墳
14	諏訪館前遺跡	集落・散布地	縄文晩、弥生、古墳前・中、平安
15	都遺跡	集落	縄文後、弥生中・後、古墳前～後、飛鳥～平安、中世
16	上野遺跡	散布地	縄文中、弥生中、平安
17	白ヶ久保入遺跡	散布地	縄文前・中、古代
18	下別当遺跡	散布地	縄文中～晩
19	日向前遺跡	散布地	縄文早・晩、古代
20	鍛冶沢遺跡	散布地	縄文早・中～晩、弥生前・中、古代
21	谷地遺跡	散布地	縄文中～晩
22	鞆堂山遺跡	散布地	縄文中・後、弥生、古代
23	湯坂山B遺跡	集落	縄文中～晩、弥生
24	宮城館跡	城館・散布地	古墳中、中世
26	明神裏遺跡	散布地・古墳	旧石器、縄文早・前、弥生中、古墳、平安
27	西裏遺跡	散布地	縄文中、弥生中
28	持長地遺跡	集落	旧石器、縄文前～後、弥生、古墳、古代、中世
30	二層敷遺跡	集落	縄文早・中～晩、平安、中世
31	下原田遺跡	集落	縄文前～晩、弥生後、平安
32	天王古墳群	円墳	古墳
33	鐘附神社古墳	円墳?	古墳?
34	宋膳堂古墳	方墳	古墳
35	中屋敷古墳	円墳	古墳
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳
37	花橋館跡	城館	中世
38	塩北遺跡	集落	弥生中・後、古墳中・後、飛鳥、平安
39	東山遺跡	集落	縄文早、平安
40	大山遺跡	集落	縄文早、弥生中、古墳前
41	伊原沢下遺跡	集落	古墳
42	赤鬼上遺跡	集落	弥生中・後、平安、中世
43	屋木戸内遺跡	散布地	弥生中、古代
44	大橋遺跡	集落	縄文後、弥生中・後、古墳前、平安
45	中沢A遺跡	散布地	縄文早、弥生中・後、古墳中・後、古代～中世
46	山家館跡	城館	中世
47	兵衛館跡	城館	縄文、弥生、古代、中世
48	西小屋館跡	城館	平安、中世
49	新城館跡	散布地・城館	弥生、古墳後～古代、中世
50	平沢館跡	城館	中世
51	築館跡	城館	中世
52	棚村館跡	城館	中世
53	矢附館跡	城館	中世
54	曲竹小屋館跡	城館	中世
56	馬越遺跡	散布地	縄文中
57	鍛冶沢北遺跡	散布地	縄文早・中～晩、古代
58	馬場北遺跡	散布地	縄文早、平安
59	乙当地遺跡	散布地	旧石器、縄文早、平安
60	蟹沢遺跡	散布地	弥生中
61	荒子遺跡	散布地	古代
62	東浦遺跡	散布地	縄文中・後、弥生中、古墳、古代
63	内方遺跡	散布地	古代
64	小山田遺跡	散布地	縄文、古代、中世
65	山田沢遺跡	散布地	縄文後・晩
66	高木遺跡	散布地	縄文中
67	曲木遺跡	散布地	縄文中
68	沢北遺跡	散布地	縄文後・晩、弥生中
69	十文字遺跡	散布地	縄文中
70	湯坂山遺跡	散布地	縄文中～晩
71	沢入遺跡	散布地	縄文早・中・後、古代
72	萩の窪遺跡	散布地	縄文晩、弥生
73	棚村遺跡	散布地	縄文後
74	遠森山下遺跡	散布地	縄文晩、古代
75	八幡平遺跡	散布地	縄文前・中、古代
76	根方A遺跡	散布地	縄文後
77	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中、古墳、平安、中世
78	中野A遺跡	散布地	縄文後、古代
79	下別当遺跡	散布地	縄文後
80	小屋場遺跡	散布地	縄文後・晩
81	逆川遺跡	散布地	縄文早・前
82	土ヶ市遺跡	散布地	弥生、古代
83	見織遺跡	散布地	縄文
84	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文、弥生中・後、古墳前～後、奈良
85	寺坂遺跡	散布地	平安
86	清水上遺跡	散布地	弥生、平安
87	白山遺跡	集落・散布地	弥生、古墳中
88	松ヶ沢遺跡	散布地	縄文後、古代
89	鳥山遺跡	散布地	縄文中、古代
90	沢遺跡	散布地	古代
91	本宿前遺跡	集落・散布地	縄文早、弥生中、平安、中世
92	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中、弥生、平安、中世、近世
93	町尻遺跡	散布地	縄文
94	北境遺跡	散布地	縄文早、弥生後、古代
95	手代木遺跡	散布地	縄文早、弥生
96	東久保遺跡	散布地	古代
97	大久保遺跡	散布地	縄文中・後
98	大平山遺跡	散布地	縄文
99	根無藤館跡	城館	中世

番号	遺跡名	種別	時代
100	小高遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
101	大柿内遺跡	散布地	弥生
102	定谷口遺跡	散布地	縄文後、古代
103	丈六遺跡	散布地	古代
104	平沢遺跡	散布地	古代
105	十郎田遺跡	散布地	縄文、古墳中～後、飛鳥～平安、中世、近世
106	堂の入遺跡	散布地	弥生、古代、中世
107	大久保東遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
108	前戸内遺跡	散布地	旧石器、縄文後、弥生中・後、古墳中、奈良、平安、中世、近世
109	鹿野遺跡	散布地	古代
110	後原遺跡	散布地	縄文、古墳、奈良、平安
111	原遺跡	散布地	古代
112	六角遺跡	散布地	縄文早、弥生中・後、古墳前・後、奈良、平安、中世、近世
114	鍛冶屋敷遺跡	散布地	縄文中～晩、古代、近世
116	一本木遺跡	散布地	縄文中・後
117	棚村遺跡	散布地	古代
118	青竹遺跡	散布地	縄文後、弥生後、平安、中世、近世
119	願行寺遺跡	散布地・寺院	縄文早・中・後、弥生中、古墳、中世
120	後安寺遺跡	散布地	古代
121	若神子山遺跡	散布地	縄文後
122	足の又遺跡	散布地	縄文晩
123	称宜ノ沢遺跡	散布地	縄文後
124	諏訪館跡	城館	中世
125	四方坂館跡	城館	中世
126	小原遺跡	散布地	縄文晩、平安
128	下原遺跡	散布地	縄文中
129	七日原遺跡	散布地	縄文前
130	経塚	経塚	中世
131	上原遺跡	散布地	縄文後
133	妙見遺跡	散布地	縄文晩
134	淡島山遺跡	散布地	縄文後、古代
135	立石遺跡	散布地	縄文後
136	八卦遺跡	散布地	縄文後
137	市ノ沢遺跡	散布地	弥生、古代
138	岩蔵寺遺跡	散布地	縄文晩、古代
139	小野入遺跡	散布地	縄文早・中～晩、古代
141	西脇古墳	円墳	古墳
142	清上遺跡	散布地	古代
143	上葉の木沢遺跡	散布地	古代
144	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
145	円田入C遺跡	散布地	縄文
146	円田入B遺跡	散布地	縄文早・中
148	根無藤遺跡	散布地	縄文早・晩、古代
149	入山遺跡	散布地	縄文前、弥生、古代
150	官林遺跡	散布地	縄文早
151	手代木B遺跡	散布地	縄文早・後、古代
152	玉橋遺跡	散布地	縄文後、弥生
153	上曲木C遺跡	散布地	縄文早・中
154	上曲木E遺跡	散布地	縄文前・中
155	曲木畑遺跡	散布地	縄文
156	上曲木D遺跡	散布地	縄文前・中
157	上曲木B遺跡	散布地	縄文早～中、古代
158	高木B遺跡	散布地	縄文
159	上曲木A遺跡	散布地	縄文早、弥生、古代
160	西浦B遺跡	集落・散布地	縄文中～晩、弥生、平安、中世、近世
161	寺門前遺跡	散布地	縄文中・後
162	西浦C遺跡	散布地	縄文前～後、弥生、奈良、平安
163	白九頭竜古墳	古墳	古墳
164	沢北B遺跡	散布地	縄文後
165	北原尾遺跡	散布地	縄文早
166	天王前遺跡	散布地	縄文、古代
167	根方B遺跡	散布地	古代
168	山崎遺跡	散布地	縄文早
169	中野B遺跡	散布地	古代
170	桔梗山B遺跡	散布地	縄文
171	中沢B遺跡	散布地	弥生中、古墳、古代
172	豊向遺跡	散布地	古墳
173	諏訪館横穴墓群	横穴墓?	古墳
174	諏訪館遺跡	散布地	弥生、古墳
175	新並遺跡	散布地	縄文中
176	角山B遺跡	散布地	縄文
177	角山A遺跡	散布地	古代
178	青木遺跡	散布地	平安
179	山中遺跡	散布地	平安
180	入青木遺跡	散布地	縄文
183	沢入B遺跡	散布地	縄文後
184	三本榎A遺跡	散布地	縄文早
185	遠森山遺跡	散布地	縄文晩?
186	沢入C遺跡	散布地	縄文
187	欠山遺跡	散布地	縄文
188	下永野B遺跡	散布地	奈良、平安
189	磯ヶ坂遺跡	散布地	奈良、平安
190	若神子山B遺跡	散布地	縄文前・後
191	宮ヶ内上遺跡	製鉄?	近世
192	館の山城跡	城館	中世
193	窪田遺跡	集落・散布地	縄文、弥生後、古墳中・後、飛鳥～平安、中世
194	三の輪遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
195	長根道下遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
196	西屋敷遺跡	集落	縄文、奈良、平安、中世、近世
197	戸ノ内遺跡	集落	縄文、弥生、飛鳥～平安、中世
198	車地蔵遺跡	散布地	古代、中世、近世
199	三本榎B遺跡	散布地	縄文、平安
200	稲荷林遺跡	散布地	縄文早、古墳～平安
201	沢入D遺跡	散布地	縄文早・晩
202	観音堂山遺跡	散布地	縄文後、平安
203	大久保西遺跡	散布地	古墳、奈良、平安

※番号は遺跡地図の青色数字と対応。宮城県遺跡台帳登録番号のうち市町村番号05を省略した下三桁と共通。欠番の記載は省略した。

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺構確認調査

#### 1. 原遺跡

##### 調査要項 (第1表3)

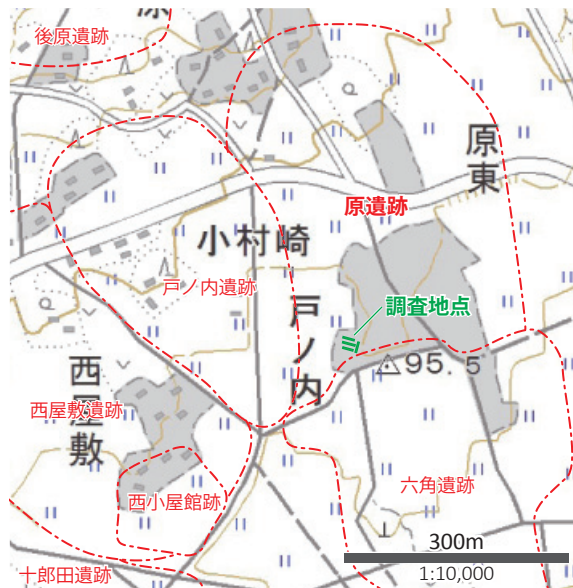
遺跡名：原遺跡 (遺跡登録番号 05111)  
 調査原因：コミュニティーセンター建築計画  
 調査箇所：蔵王町大字小村崎字戸ノ内 32-2  
 調査期間：平成 18 年 6 月 28 日～29 日  
 調査面積：81.6m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：佐藤洋一・鈴木雅

##### 遺跡の概要

古代の散布地として登録されている。平成 17 年度に県営ほ場整備事業 (円田 2 期地区) に伴う発掘調査を遺跡範囲南東部の丘陵裾部で実施しており、落とし穴群を確認している (町 4 集)。

##### 調査の成果

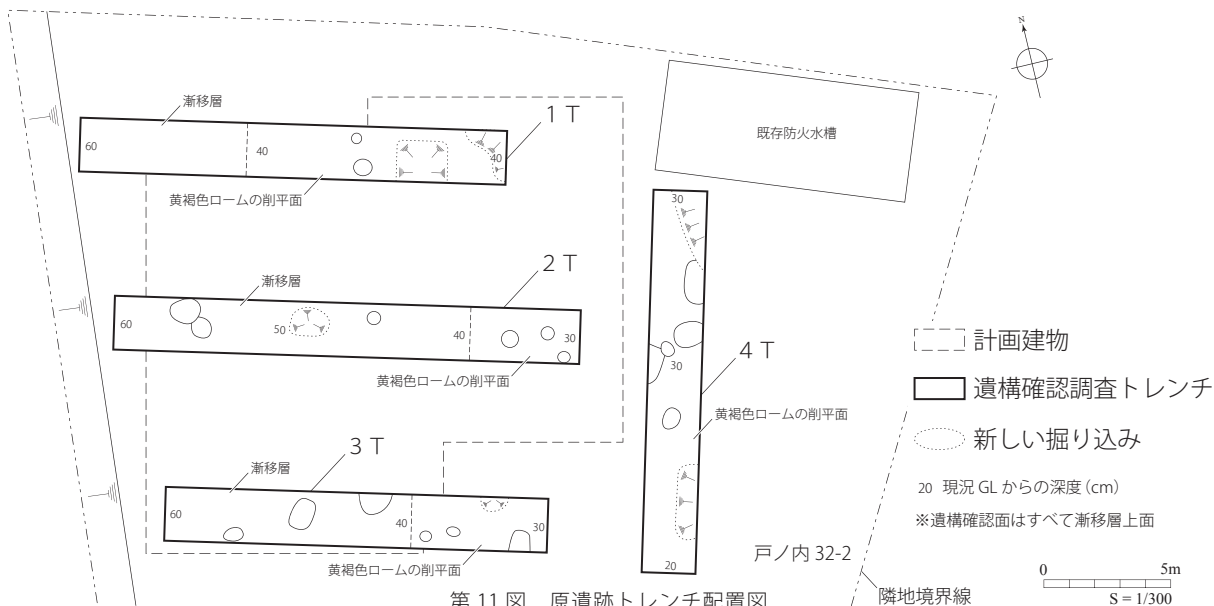
建築計画範囲を中心にトレンチ 4 か所を設定して確認調査を実施した。全体に 30～60cm 厚の新しい盛土層があり、旧地形は西向きに傾斜する丘陵裾部である。敷地西側では盛土下に上層から黒色シルト層、漸移層、ローム層の堆積が見られるが、東側ではローム層の削平面が確認された。遺構は 1～4T の漸移層上面・ローム層削平面で土坑・柱穴 19 基を確認した。このうち 2・3T 西部で確認した土坑は黒色シルト層上面から掘り込まれている。遺物は出土していない。



第 10 図 原遺跡調査地点位置図



写真 1 原遺跡トレンチ掘削状況 (東から)



第 11 図 原遺跡トレンチ配置図



写真2 原遺跡 1T (東から)



写真3 原遺跡 2T (西から)



写真4 原遺跡 4T (北から)



写真5 原遺跡 2T (北から)



写真6 原遺跡 3T (北から)



写真7 原遺跡 4T (西から)

## 2. 鍛冶沢遺跡

### 調査要項 (第1表4・9)

- 遺跡名：鍛冶沢遺跡 (遺跡登録番号 05020)
- 調査原因：広域農道整備事業計画 (仙南2期地区)
- 調査箇所：蔵王町大字曲竹字鍛冶沢地内
- 調査期間：平成18年6月28日～7月13日  
平成18年12月19日～22日
- 調査面積：909.6m<sup>2</sup>
- 調査主体：蔵王町教育委員会
- 調査指導・協力：宮城県教育委員会
- 調査員：千葉直樹・佐藤洋一・鈴木雅

### 遺跡の概要

縄文・弥生時代、古代の散布地として登録されている。明治37年に「東京人類学雑誌」で紹介される(佐藤1904)など古くから知られ、完形の中空土偶(仙台市博物館所蔵)が発見されたことでも著名である。遺物の表面散布は遺跡東部に顕著である。昭和44年には開田工事に伴って宮城県教育委員会が遺跡南東部で発掘調査を行ない、縄文時代晩期末頃の良好な遺物包含層が確認されている。平成元年には今回の広域農道計画に関連して宮城県教育委員会が分布調査と確認



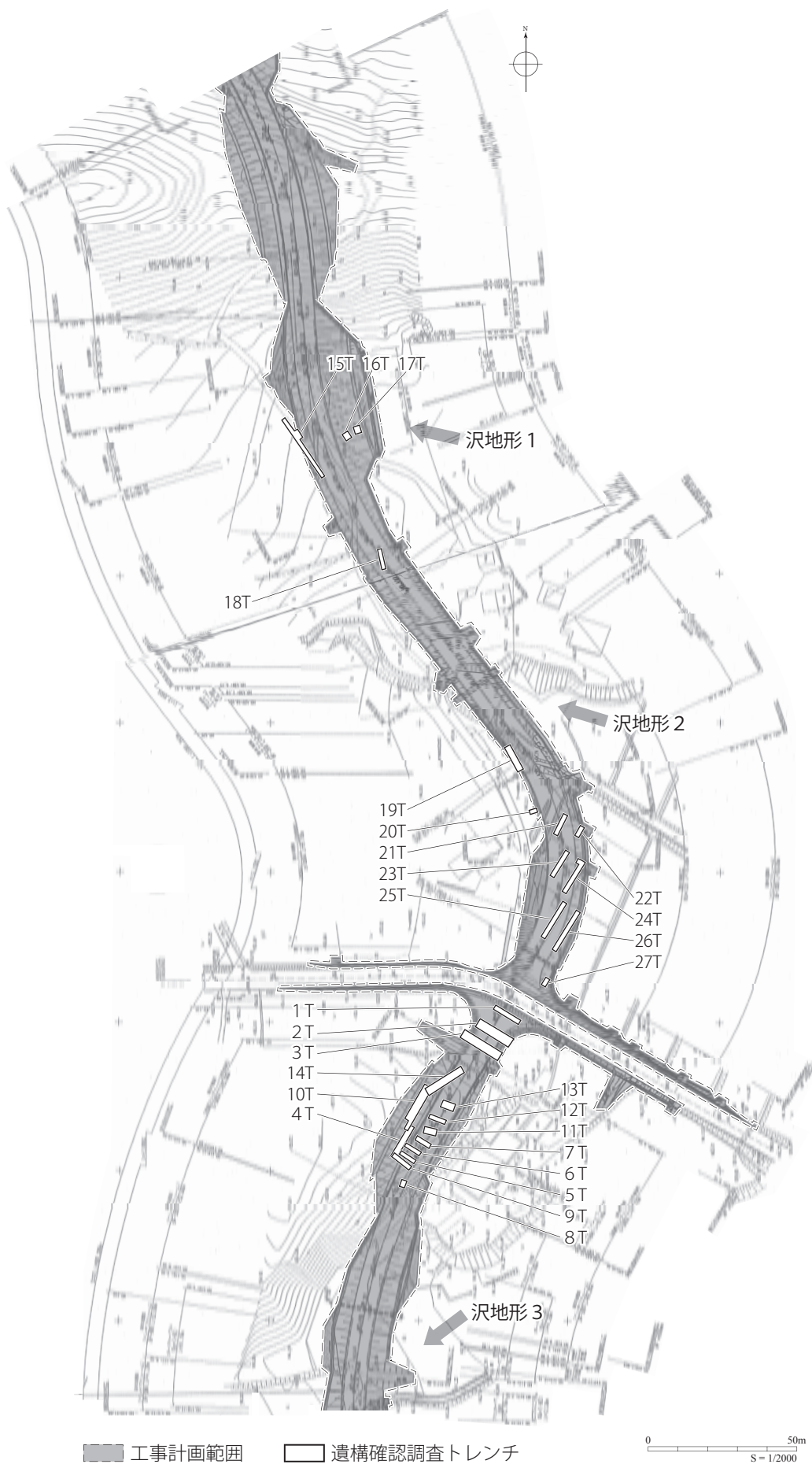
第12図 鍛冶沢遺跡調査地点位置図

調査を実施している(宮城県教育委員会1990)。

### 調査の成果

計画路線上を中心にトレンチ27か所を設定して確認調査を実施した。南側の丘陵斜面にあたる4～14Tでは、斜面上部のローム層上面で少数の土坑・溝跡を確認したが、斜面下部は急傾斜地で表層が崩壊している。東向き緩斜面となる1～3Tで





第13図 鍛冶沢遺跡トレンチ配置図 (1)

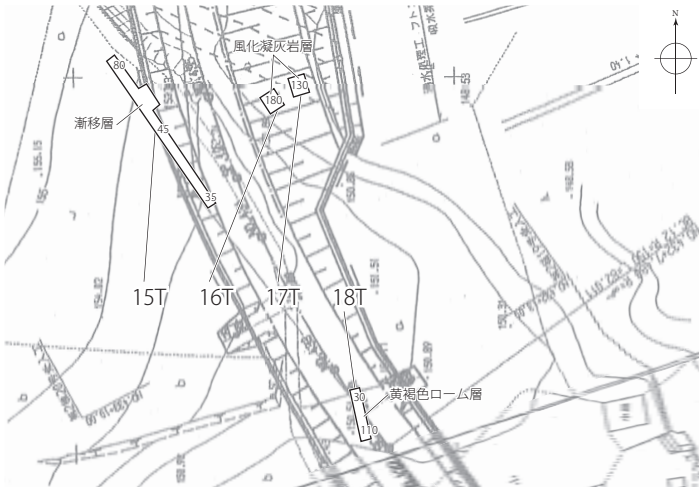


写真8 鍛冶沢遺跡調査前現況（東から）



写真9 鍛冶沢遺跡 2T（西から）

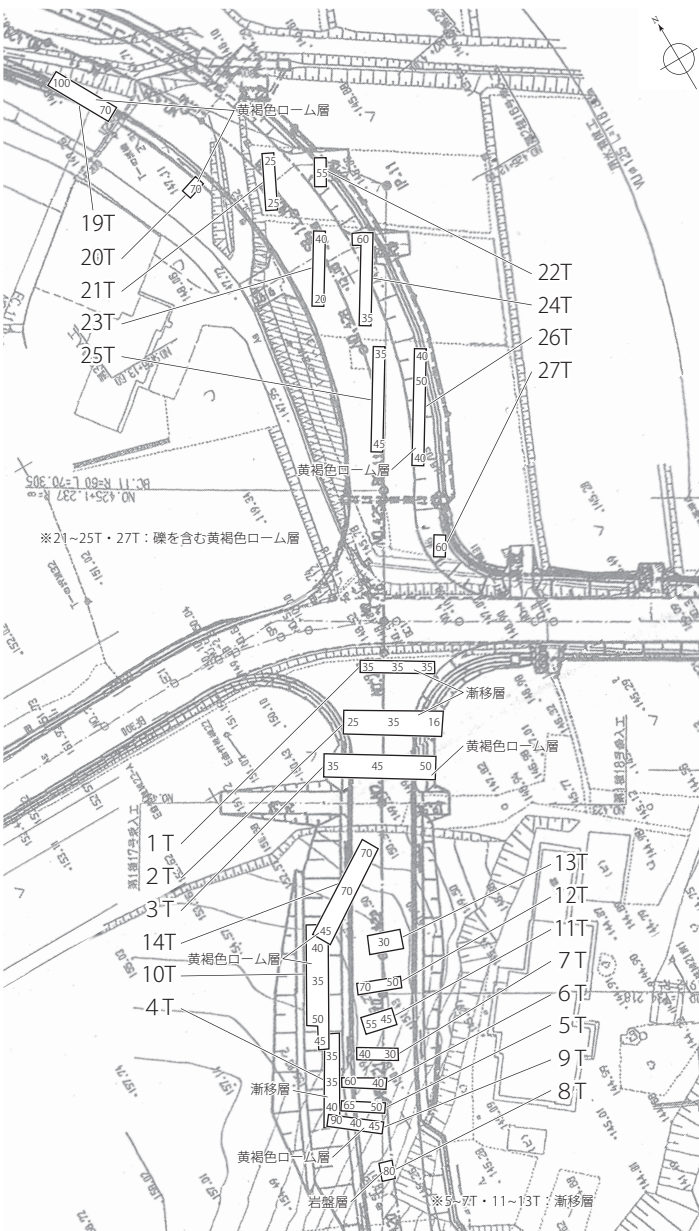


写真10 鍛冶沢遺跡 2T 竪穴住居跡（南から）



写真11 鍛冶沢遺跡 3T（東から）

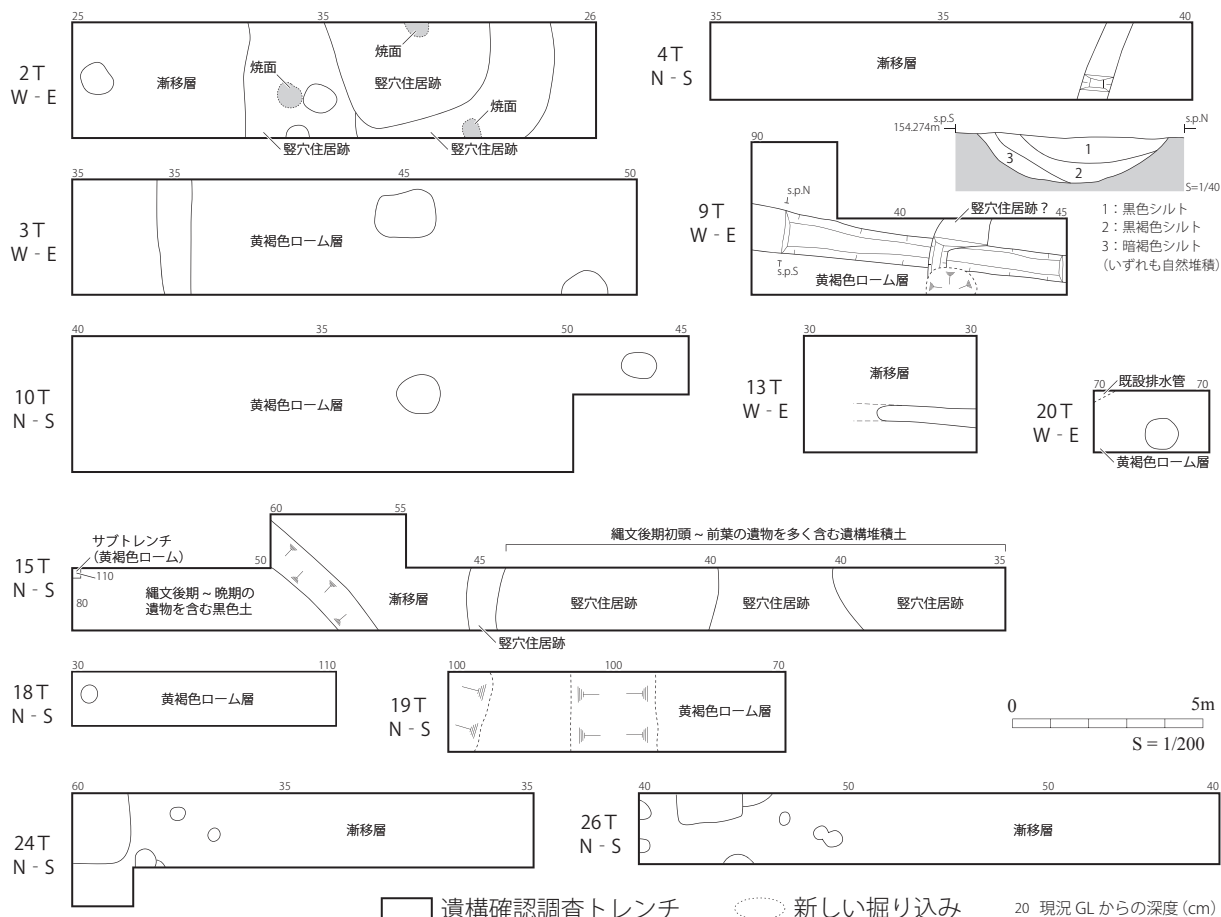


写真12 鍛冶沢遺跡 4T 溝跡（西から）



写真13 鍛冶沢遺跡 5～7T（北から）

第14図 鍛冶沢遺跡トレンチ配置図（2）



第15図 鍛冶沢遺跡遺構配置図



写真14 鍛冶沢遺跡9T溝跡(西から)



写真15 鍛冶沢遺跡10T(南から)



写真16 鍛冶沢遺跡15T(北から)



写真17 鍛冶沢遺跡15T住居跡群(北から)



写真18 鍛冶沢遺跡16T(南から)



写真19 鍛冶沢遺跡21～22T調査前現況(南から)



写真20 鍛冶沢遺跡24T(北から)



写真21 鍛冶沢遺跡24T土坑群(北から)

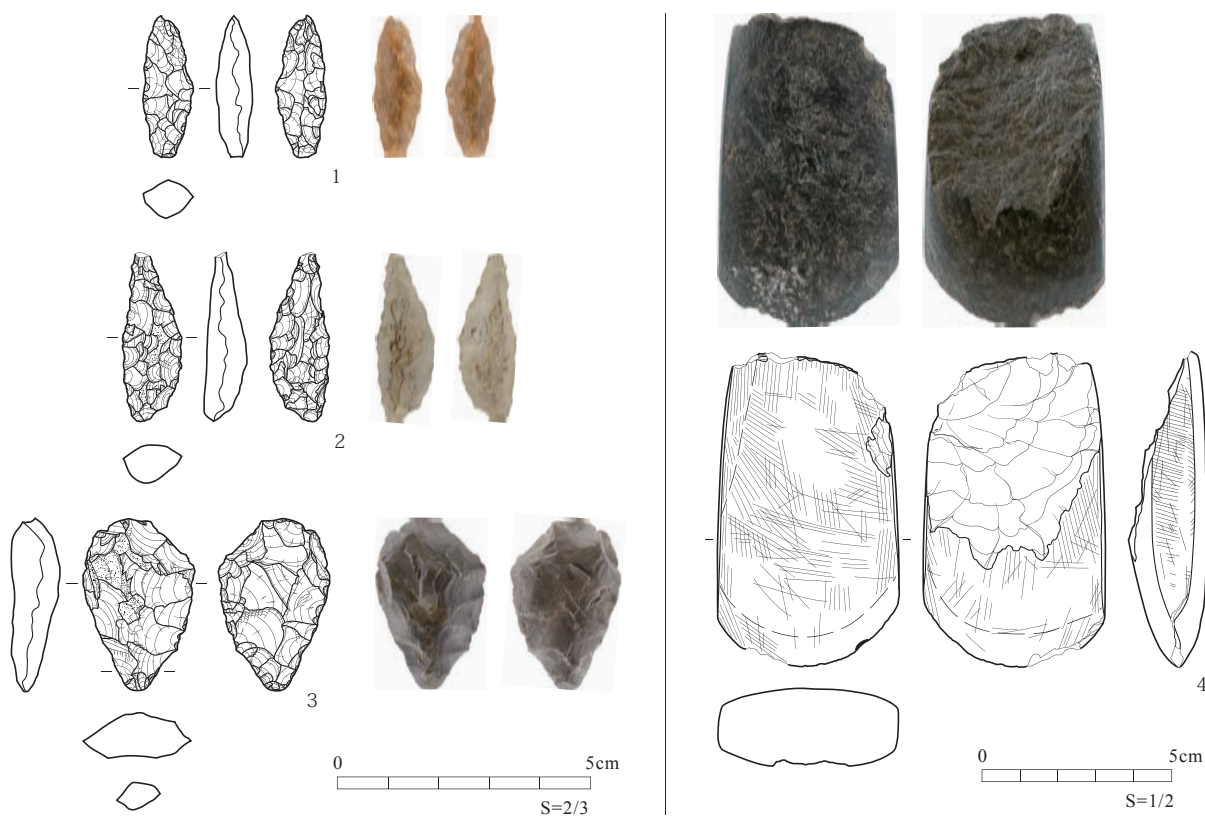


写真22 鍛冶沢遺跡26T土坑群(南東から)



No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	2T	遺構確認面	縄文土器	皿	瘤付、平行沈線文、雲形文 <sub>9</sub> 、縄文 内面沈線文 晩期中葉	0.4	口縁部	MY06-8
2	2T	遺構確認面	縄文土器	浅鉢	平行沈線文、ヘラ刻目、雲形文、磨消縄文 (LR) 晩期中葉	0.4	口縁部	MY06-6
3	2T	遺構確認面	縄文土器	鉢	口縁端部ヘラ刻目、平行沈線文、櫛歯状刻目、縄文 (LR) 晩期中葉～後葉	-	口縁部	MY06-7
4	14T	遺構確認面	縄文土器	浅鉢	平縁、工字文、縄文 (LR) 内面沈線文 晩期後葉～末	0.6	口縁部	MY06-20
5	2T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	口唇部山形突起 (頂部刻み)、三叉文、櫛歯状刻目 後期末	0.5	口縁部	MY06-9
6	2T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	貫通孔、円形盲孔、沈線文、鎖状隆線文 内面隆帯貼付 後期前葉	-	口縁部	MY06-11
7	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	沈線文、円形盲孔、縄文、磨滅著しい 後期前葉	0.9	口縁部	MY06-16
8	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR <sub>9</sub> ) → 沈線文、円形刺突文 後期前葉	0.8	口縁部	MY06-17
9	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	波状口縁、円形盲孔、沈線文、磨消縄文、撫糸文 <sub>9</sub> 後期前葉	-	口縁部	MY06-21
10	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	口唇部指頭による交互押捺、櫛歯文?	0.7	口縁部	MY06-22
11	2T	西端 SK 確認面	縄文土器	深鉢	結節回転文 (L) <sub>9</sub> 、擬縄文	0.6	口縁部	MY06-28
12	2T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	入組帯状文、磨消縄文 (RL) 炭化物付着	0.5	胴部	MY06-10
13	2T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)、炭化物付着	0.8	胴部	MY06-13
14	2T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	羽状縄文 (RL・LR)、炭化物付着	0.6	胴部	MY06-14
15	9T	表土	縄文土器	深鉢	櫛歯状条線による格子状文	0.8	胴部	MY06-15
16	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	沈線文 (逆U字状・楕円形)、縄文 (RL <sub>9</sub> ) 充填 大木9式	0.7	胴部	MY06-18
17	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)	1.0	胴部	MY06-19
18	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	櫛歯状沈線文 (縦位、一部横位)、炭化物付着 内外面被熱により一部剥離	-	胴部	MY06-23
19	2T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	羽状縄文 (RL・LR)、ナデ 底部網代痕→ナデ、ミガキ 内面炭化物付着 底径: 9.5cm	0.8	胴～底部	MY06-12
20	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)、底部無文 (ナデ)、炭化物付着 底径: (5.4) cm	0.5	底部	MY06-24
21	14T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	無文 (ミガキ)	0.7	底部	MY06-25
22	15T	表土	円盤状土製品		縁辺部打欠き、縄文 (LR) → 沈線文	0.7	完形	MY06-26

第16図 鍛冶沢遺跡出土遺物 (1)



No.	調査区	層位	種類	石材	器面調整・特徴	法量 (mm・g)				登録
						長	幅	厚	重	
1	4～14T	遺構確認面	尖頭器	玉髓	両面に周縁からの押圧剥離 先端部欠損(衝撃剥離)	28.1	10.0	7.1	1.8	MY06-2
2	4～14T	遺構確認面	尖頭器	珪質頁岩	両面に周縁からの押圧剥離 正面一部に自然面残置	33.6	11.6	8.0	2.7	MY06-3
3	4～14T	遺構確認面	石錐	珪質頁岩	両面に周縁からの剥離 正面一部に自然面残置 先端部磨滅・弱い光沢	34.3	22.0	8.9	6.1	MY06-4
4	2T	遺構確認面	磨製石斧	蛇紋岩	全面に入念な研磨 上部折損	83.0	48.2	20.1	114.0	MY06-5
5	21～27T 周辺・表探		磨石/敲石	安山岩	両面に摩滅痕 下端部・側縁に敲打痕 上端部欠損	112.5	61.0	49.2	524.5	MY06-1
6	15T	表土	磨石/敲石	安山岩	両面・側面に摩滅痕・溝状研磨痕 上下両端・側面下部に敲打痕 敲打による剥離痕	69.1	48.5	24.9	196.5	MY06-27

第17図 鍛冶沢遺跡出土遺物(2)

は、漸移層上面で竪穴住居跡・土坑・溝跡など多数の遺構を確認した。昭和44年頃の開田工事に伴って東向き緩斜面が段状に造成された範囲にあたる21～27Tでは、ローム層および下位の礫層まで削平されていることが判明したが、これをさらに掘り込んでいる大型の土坑・柱穴を多数確認した。沢地形2に面した北東向き緩斜面となる19～20Tでは、ローム層上面で土坑を確認した。南東向き緩斜面となる15・18Tでは、漸移層上面で竪穴住居跡・溝跡・柱穴を確認した。沢地形1に設定した16・17Tでは、湿地性堆積層の下位に風化凝灰岩層が堆積し、底面は凝灰岩層となっており、遺構・遺物は確認されなかった。

遺物は2・14Tの遺構確認面、9・15Tの表土などから縄文土器皿・鉢・深鉢・小型深鉢、土製円盤、尖頭器、石錐、二次加工ある剥片、剥片、磨製石斧、石棒、敲石などが出土した(第16・17図)。縄文土器は縄文時代後期～晩期中葉頃のもものが主体である。

### 3. 台遺跡

#### 調査要項 (第1表12・20)

遺跡名：台遺跡 (遺跡登録番号 05009)  
 調査原因：藪川局部改良事業計画  
 調査箇所：蔵王町大字塩沢字神前地内  
 調査期間：平成19年3月6日、9月4日  
 調査面積：130.0m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：佐藤洋一・鈴木雅

#### 遺跡の概要

弥生・古墳・平安時代、中世、近世の散布地・水田跡として登録されている。遺物の表面散布は遺跡北部の丘陵上に顕著である。昭和63年に県営ほ場整備事業(円田1期地区)に伴って宮城県教育委員会が遺跡南部の水田部で発掘調査を行ない、古墳時代中期以前・中期・後期、奈良・平安時代、中世、近世と7層に重複する水田跡を確認している。

#### 調査の成果

築堤計画範囲のうち遺跡南西部の低地(A地区)に4か所、遺跡北部の丘陵裾部(B地区)に7か所のトレンチを設定して確認調査を実施した。

A地区1・2Tでは上層から1層:現代の盛土(80cm)、2層:ほ場整備前の旧耕作土(60cm)、3層:黒色粘質シルト(40cm)、4層:スクモと黒褐色粘質シルトの互層(60cm)、5層:均質な黒色粘質シルト(30cm以上)の堆積が確認できた。3層以下は腐植質に富む



第18図 台遺跡調査地点位置図

湿地性堆積層で、3層上面で中世陶器片、3層中で須恵器大甕の口縁部破片、4層上面で土師器高坏の脚部などが出土した。3・4Tでは3層の下位にスクモ層(100cm以上)の堆積が確認された。

B地区1・2Tでは河川堆積物とみられる砂礫層が確認され、旧河道により侵食を受けていることが判明した。北東向き緩斜面となる3・4Tでは、竪穴住居跡5軒以上とみられる遺構プランを確認した。遺構プランどうしの重複が著しい。5～7Tでは谷地形で湿地性堆積層を確認した。遺物は3・4Tの遺構確認面から土師器杯・高坏・壺など、縄文土器深鉢、石製模造品などが出土した(第20・21図)。土師器杯は古墳時代中・後期、高坏は中期とみられるものがある。

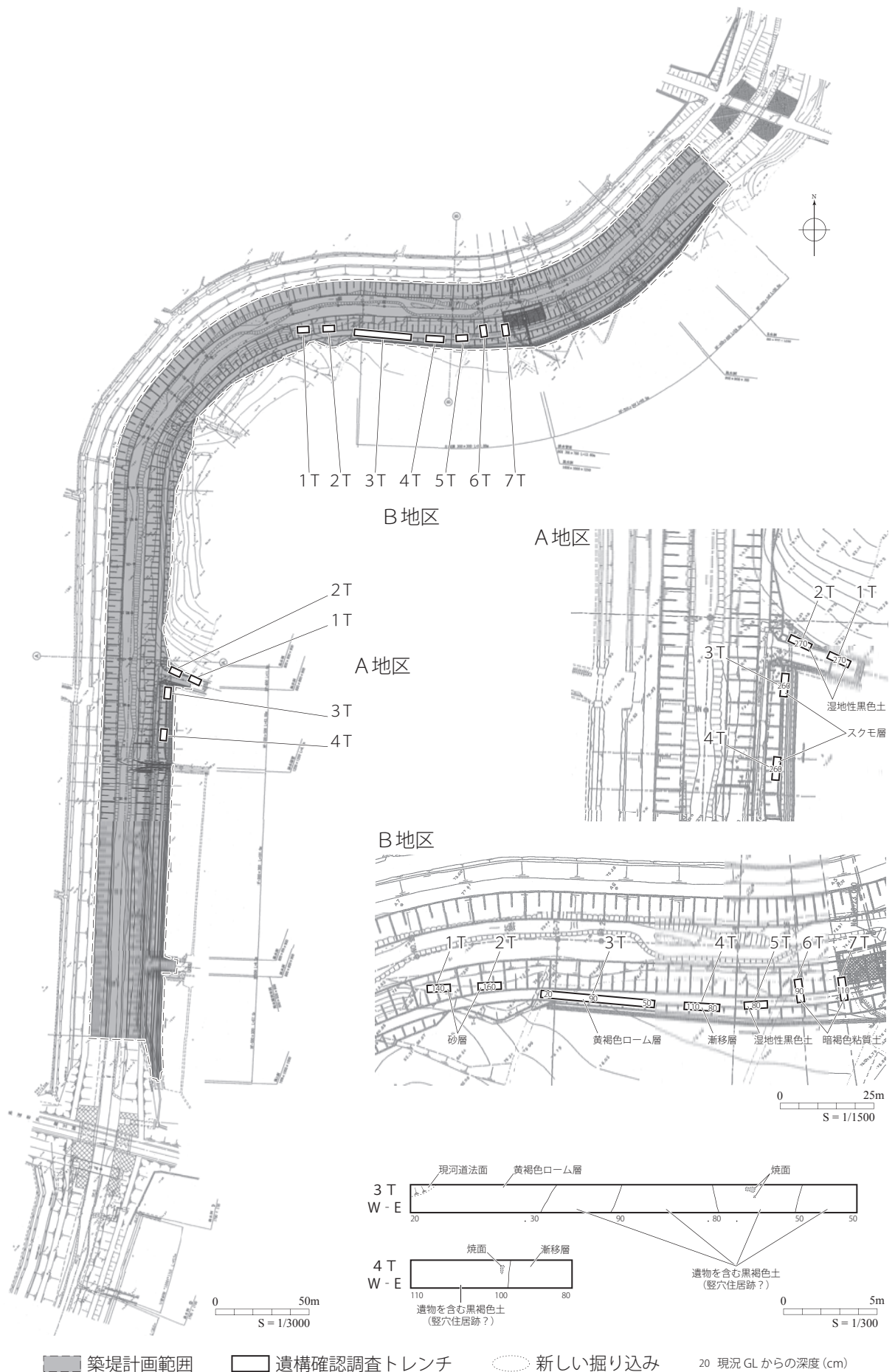
### 4. 西浦B遺跡

#### 調査要項 (第1表30)

遺跡名：西浦B遺跡 (遺跡登録番号 05160)  
 調査原因：店舗建築計画  
 調査箇所：蔵王町大字円田字西浦北51-2  
 調査期間：平成21年11月12日  
 調査面積：105.0m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：鈴木雅

**遺跡の概要** 縄文・弥生・平安時代、中世、近世の集落跡・散布地として登録されている。平成21年度に店舗建設計画に伴って遺跡中央部で発掘調査を行ない、縄文時代後期初頭～前葉前半の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、貯蔵穴などを確認している(町10集)。

**調査の成果** 建築計画範囲を中心にトレンチ4か所



第19図 台遺跡トレンチ配置図・遺構配置図



写真23 台遺跡調査前現況 (A地区・南から)



写真24 台遺跡A地区2T (北から)



写真25 台遺跡A地区2T (北から)



写真26 台遺跡調査前現況 (B地区・東から)



写真27 台遺跡B地区2T (東から)



写真28 台遺跡B地区3・4T (東から)



写真29 台遺跡B地区3T (東から)



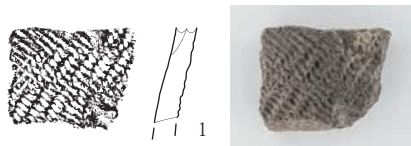
写真30 台遺跡B地区3T 竪穴住居跡 (西から)



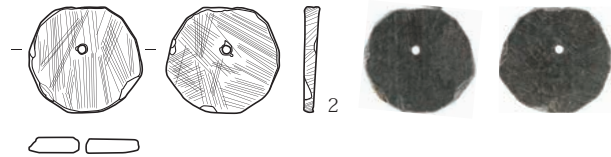
写真31 台遺跡B地区3T 竪穴住居跡 (北から)



写真32 台遺跡B地区4T (東から)



0 10cm  
S=1/3



0 5cm  
S=2/3

No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録		
1	B-3T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)	0.9	胴部	LS06・07-10		
No.	調査区	層位	種類	石材	器面調整・特徴	法量 (mm・g)			登録	
2	B-4T	遺構確認面	石製模造品	滑石	両面・側面に研磨→中央付近に穿孔1か所	長	幅	厚	重	登録
						21.0	22.5	3.3	2.7	LS06・07-12

第20図 台遺跡出土遺物 (1)





No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	B-4T	遺構確認面	土師器	坏	外面：(体) ヘラケズリ→ヘラミガキ、(口) ヨコナデ 内面：(体) ナデ・(口) ヨコナデ→ヘラナデ 内外面：(口~体付近) 赤彩 南小泉式 5c	-	-	(5.6)	口~体部	LS06・07-11
2	-	表採	土師器	坏	外面：(口) ヨコナデ→(口~体) ヘラミガキ 内面：(口) ヨコナデ→(口~体) ヘラミガキ 南小泉式 5c	-	-	(3.7)	口~体部	LS06・07-4
3	B-3T	遺構確認面	土師器	坏	外面：(口) ヨコナデ→(口~体) 縦方向ヘラミガキ 内面：(口) ヨコナデ→(口~体) ヘラミガキ 南小泉式 5c	10.3	-	(3.1)	口~頸部	LS06・07-8
4	B-3T	遺構確認面	土師器	高坏	外面：(体) ナデ→(口) ヨコナデ→(体) ヘラミガキ 内面：(体) ナデ→(口) ヨコナデ→(体) ヘラミガキ→(底) ヘラミガキ 南小泉式 5c	-	-	(5.8)	口~体部	LS06・07-9
5	-	表採	土師器	壺	外面：(口) ヨコナデ→ヘラミガキ 内面：(口) ヨコナデ→ヘラミガキ 南小泉式 5c	-	-	(4.5)	口縁部	LS06・07-5
6	-	表採	須恵器	甕	外面：ロクロナデ→沈線→刻目 内面：ロクロナデ ~7c	-	-	(1.9)	体部	LS06・07-6
7	A-1/2T	基本層Ⅲ層	須恵器	甕	外面：ロクロナデ→櫛描波状文、沈線 内面：ロクロナデ→ナデ 7c末~8c初	-	-	(8.8)	口~頸部	LS06・07-7
8	-	表採	土師器	坏	外面：(口) ヨコナデ 内面：(口~体) 横方向のヘラミガキ→黒色処理 7c	-	-	(3.9)	口縁部	LS06・07-3
9	-	表採	土師器	坏	外面：(口) ヨコナデ・(体下) 手持ちヘラケズリ 内面：ヘラミガキ→黒色処理、体下部焼けはじけ 7c	-	-	(6.1)	体部	LS06・07-2
10	-	表採	土師器	坏	外面：(口~体) ヘラミガキ 内面：(口~体) ヘラミガキ→黒色処理 7c	-	-	(1.9)	体部	LS06・07-1

第21図 台遺跡出土遺物(2)

を設定して確認調査を実施した。全体に80～100cm厚の現代の盛土層があり、旧地形は南向きの緩斜面である。1・2Tの漸移層上面で少数の土坑・溝跡・柱穴を確認した。遺物は出土していない。

## 5. 鍛冶沢遺跡

### 調査要項 (第1表38)

遺跡名：鍛冶沢遺跡 (遺跡登録番号 05020)  
 調査原因：農道青ノクキ線拡幅事業計画  
 調査箇所：蔵王町大字曲竹字鍛冶沢地内  
 調査期間：平成22年4月19日～20日  
 調査面積：195.0m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：鈴木雅



第22図 西浦B遺跡調査地点位置図



写真33 西浦B遺跡調査前現況 (東から)



写真34 西浦B遺跡1～3T (南西から)



写真35 西浦B遺跡1T (北から)



写真36 西浦B遺跡2T (南から)

**遺跡の概要** 既述 (第1節2) のとおりである。

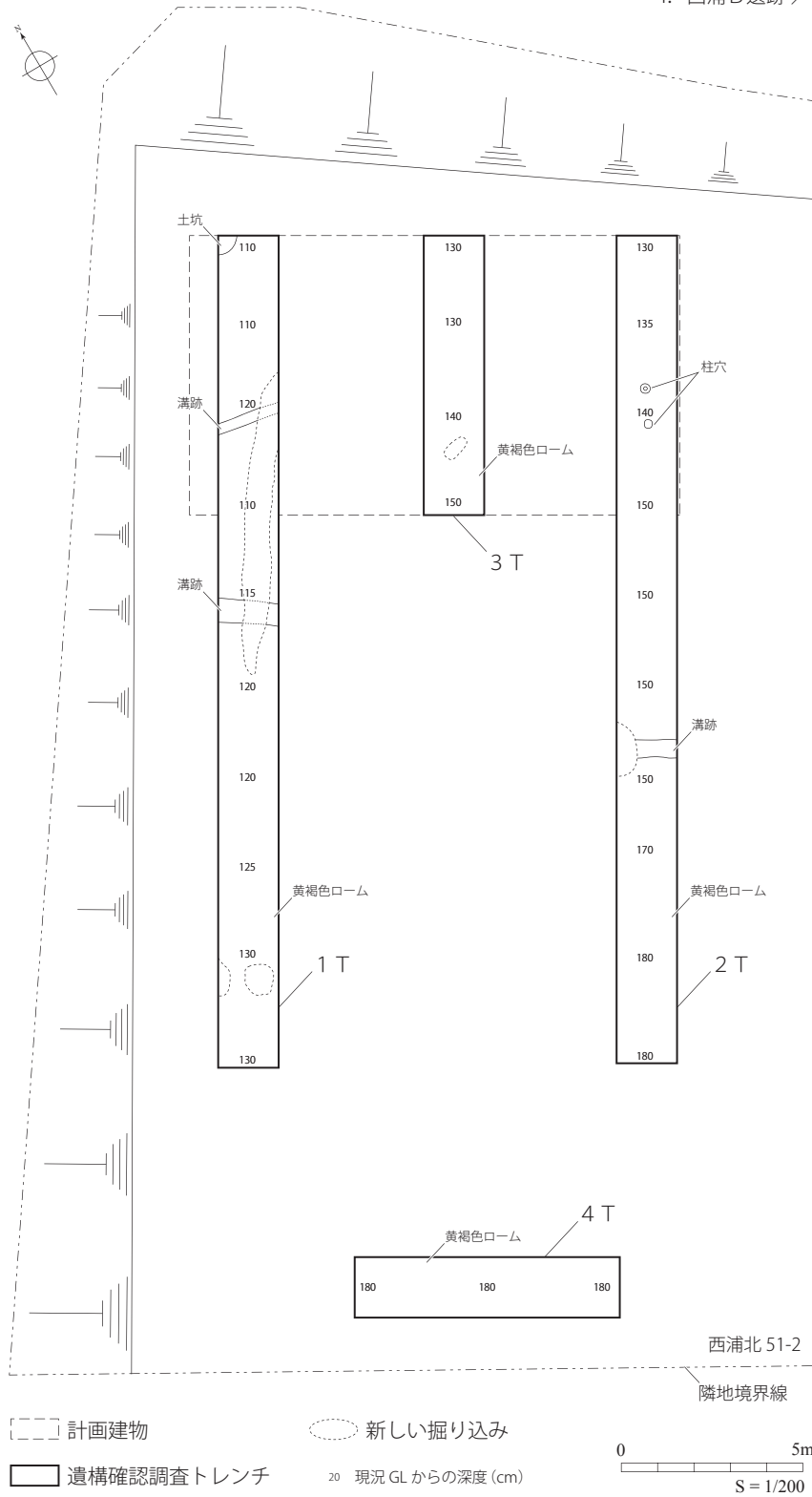
**調査の成果** 拡幅計画範囲を中心にトレンチ8か所を設定して確認調査を実施した。旧地形は谷地形に面した北東向き緩斜面で、1・2Tでは上層から黒色シルト、漸移層、ローム層の堆積がみられる。3～8Tではローム層および下位の白色粘土層の削り平面となっており、大小の礫を多く含む。1Tの漸移層上面で土坑状の円形プランを確認したが、堆積土の状況から新しい掘り込みと考えられる。遺物は1Tの耕作土中から縄文土器深鉢、ミニチュア土器、石核、石錐、二次加工ある剥片、磨石などが出土した (第27・28図)。縄文土器は縄文時代後期のものが主体である。

## 6. 谷地遺跡

### 調査要項 (第1表46)

遺跡名：谷地遺跡 (遺跡登録番号 05021)  
 調査原因：消防庁舎建設用地造成計画  
 調査箇所：蔵王町大字円田字谷地76-2  
 調査期間：平成23年2月22日～3月1日  
 調査面積：410.0m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査指導：宮城県教育委員会  
 調査員：佐藤洋一・鈴木雅

**遺跡の概要** 縄文時代の散布地として登録されている。遺物の表面散布は今回調査地点を含む遺跡北東部に顕著で、隣接する寺門前遺跡西部まで広がる一連の遺構分布が推定される。本遺跡ではこれまでに発掘調査は行なわれていないが、隣接する寺門前遺跡では平成23年度に確認調査を実施した (第1節8)。



第23図 西浦B遺跡遺構配置図



写真37 西浦B遺跡1T北側溝跡(東から)



写真38 西浦B遺跡1T南側溝跡(東から)



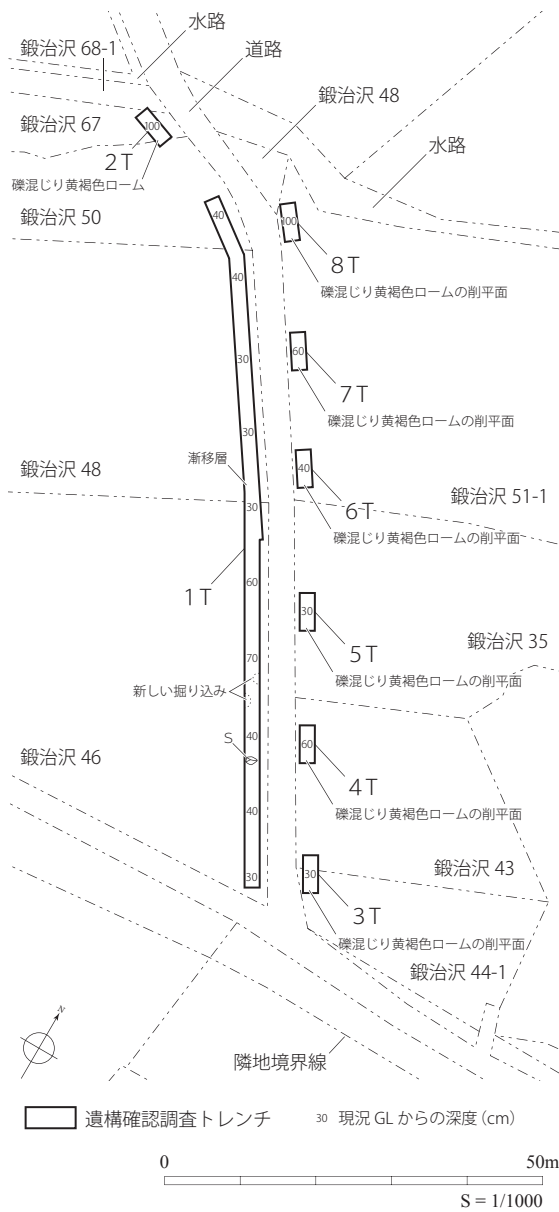
写真39 西浦B遺跡3T(南から)



第24図 鍛冶沢遺跡調査地点位置図



第26図 谷地遺跡調査地点位置図



第25図 鍛冶沢遺跡トレンチ配置図

**調査の成果** 造成計画範囲には多数の遺物が表面散布しており、地下に遺構が存在することは確実に考えられた。このため、遺構の分布密度や性格、遺物包含層の有無などの情報を得ることを目的として、造成計画地内にトレンチ6か所を設定して確認調査を実施した。確認した遺構の一部については掘り下げを行ない、旧地形および遺物包含層の堆積状況を確認するためにトレンチ内の任意の箇所にテストピットを設定して層序の確認を行なった。

旧地形は北東向き緩斜面で、上層から1層：現耕作土、2層：旧耕作土、3層：ロームブロック混じり暗褐色土、4層：暗褐色土、5層：ローム層の堆積を確認した。3層は15～40cm、4層は30～70cm程度の層厚があり、遺物を多く含む。

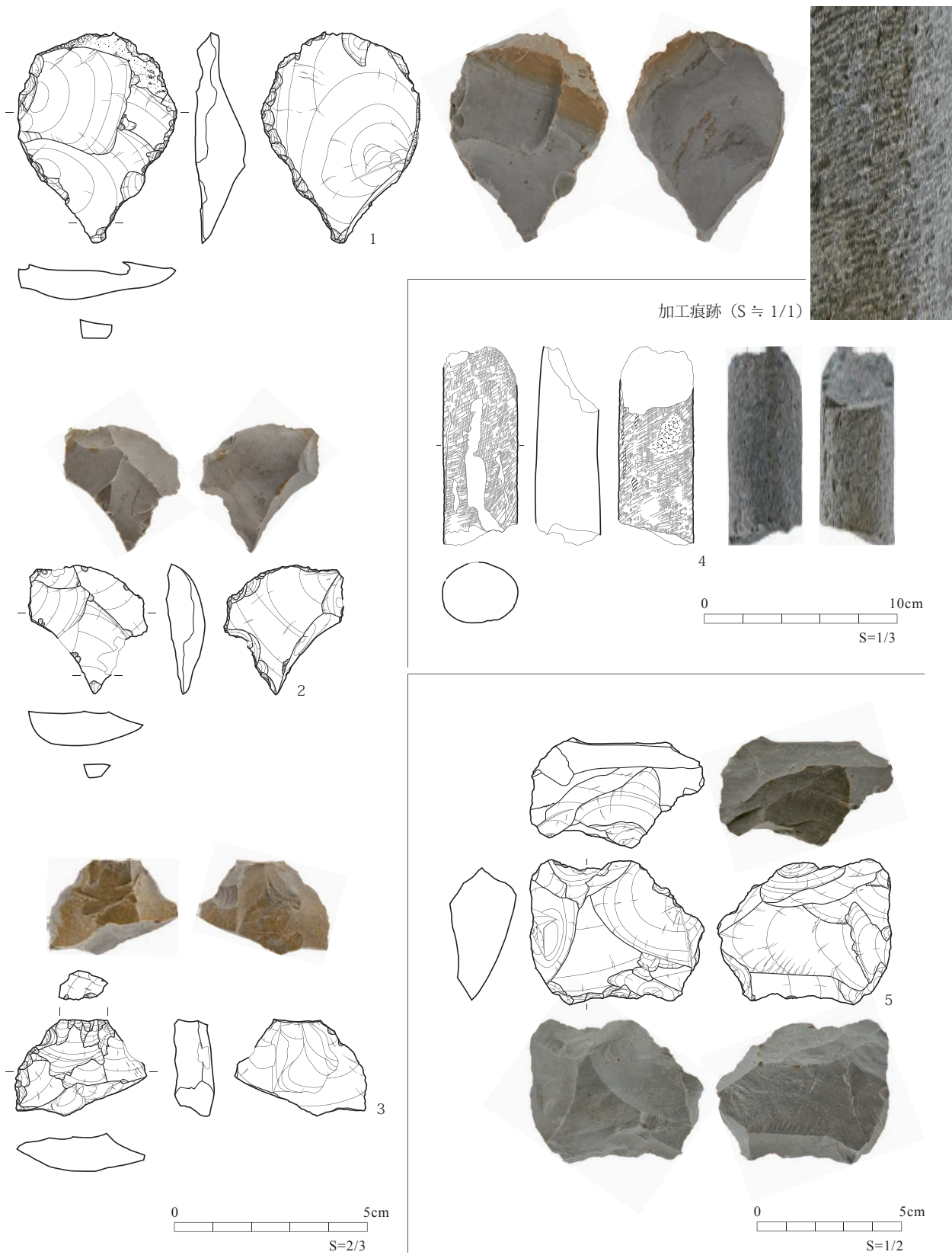
遺構は3・4層上面で確認し、すべてのトレンチに濃密に分布することが判明した。確認した遺構は土坑・溝跡・土器埋設遺構・焼土遺構・柱穴のほか、竪穴住居跡とみられる遺構プラン、遺物包含層がある。遺物はすべてのトレンチの遺構堆積土・遺構確認面・表土から縄文土器、石器（剥片石器・礫石器・石製品）が整理箱7箱分出土した（第31・32図）。縄文土器は縄文時代前期末～中期前葉のものが主体である。

なお、これらの出土遺物については平成23・24年度に実施した本発掘調査成果との関連性が強いことから、現在進めている本発掘調査の整理作業の成果と合わせて後日報告する計画である。



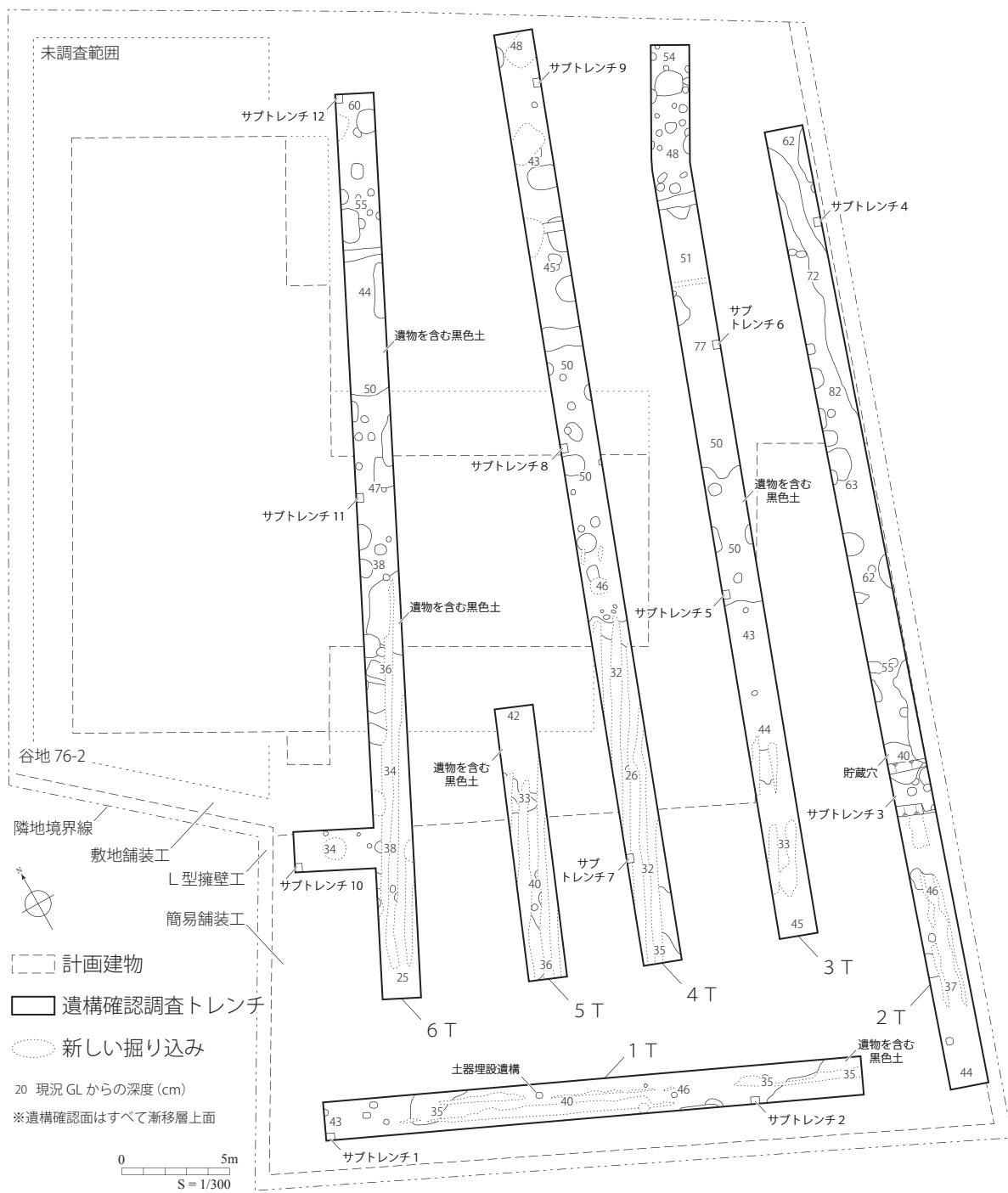
No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	撚糸文 (R) → 沈線文、円形盲孔、磨消 後期前葉	0.9	口縁部	MY10-2
2	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文 後期前葉	0.9	口縁部	MY10-1
3	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	磨消縄文 (LR) → 沈線文、円形刺突、炭化物付着 後期前葉	0.7	口縁部	MY10-3
4	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	磨消縄文 (LR)、蕨手文 後期前葉	0.7	胴部	MY10-9
5	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)、沈線文	1.1	胴部	MY10-8
6	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	磨消縄文 (LR <sub>2</sub> )、沈線文 後期前葉	0.8	胴部	MY10-10
7	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文	0.9	胴部	MY10-11
8	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	橋状把手 (剥離)、把手下端ボタン状貼付文、磨消縄文 (LR <sub>2</sub> ) → 楕円状多条沈線区画、曲線状多条沈線 後期前葉	-	頸部	MY10-5
9	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	磨消縄文 (LR <sub>2</sub> ) → 沈線文、炭化物付着 後期前葉	0.8	胴部	MY10-7
10	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	多条沈線文、磨消縄文 (LR)、炭化物付着 後期前葉	0.9	胴部	MY10-6
11	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢	無文 (ミガキ)、底部無文 (ミガキ) 底径: (5.6) cm	0.5	底部	MY10-14
12	A区	遺構確認面	縄文土器	深鉢 <sub>2</sub>	平縁、山形突起 <sub>2</sub> 、沈線文 内面沈線文、炭化物付着	-	口縁部	MY10-4
13	A区	遺構確認面	ミニチュア土器	深鉢	縄文 (LR)、ナデ、底部無文 (ナデ)	0.6	底部	MY10-15

第27図 鍛冶沢遺跡出土遺物 (1)



No.	調査区	層位	種類	石材	器面調整・特徴	法量 (mm・g)				登録
						長	幅	厚	重	
1	1T	遺構確認面	石錐	珩質頁岩	自然面打面の横長剥片素材 正面右側縁に背面からの連続的な急角度剥離で尖端部を作出	55.5	41.4	9.5	18.8	MY10-18
2	1T	遺構確認面	石錐	珩質頁岩	剥片素材 正面左側縁下部折断。 正面右側縁に背面からの連続的な急角度剥離で尖端部を作出	33.3	30.9	8.3	7.7	MY10-17
3	1T	遺構確認面	二次加工ある剥片	珩質頁岩	単剥離面打面の剥片素材 頭部調整 下半部折損 正面左側縁に腹面からの連続的な急角度剥離	25.2	34.2	8.9	7.4	MY10-19
4	1T	遺構確認面	石棒	安山岩	敲打→斜行する線状の敲打→長軸方向の研磨 両端は新しい欠損	103.5	39.3	33.7	210.0	MY10-20
5	1T	遺構確認面	石核	流紋岩	厚手の剥片素材 素材剥片の腹面を作業面として寸詰まりの小剥片を剥離 打面調整	60.4	50.0	21.2	60.5	MY10-16

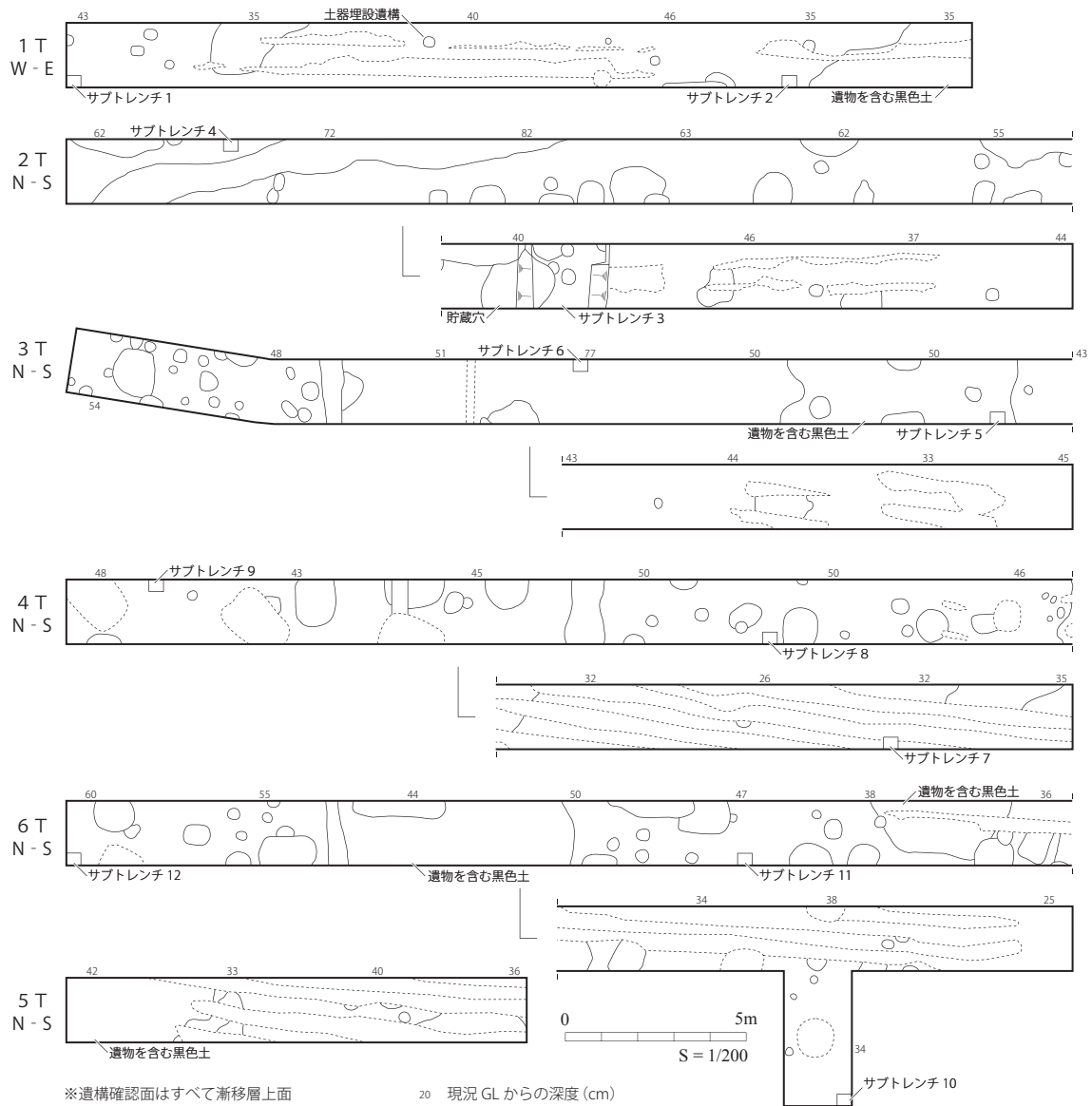
第 28 図 鍛冶沢遺跡出土遺物 (2)



第29図 谷地遺跡トレンチ配置図



写真40 谷地遺跡調査前現況（北から） 写真41 谷地遺跡調査前現況（南東から） 写真42 谷地遺跡調査前現況（南西から）



第30図 谷地遺跡遺構配置図



写真43 谷地遺跡トレンチ掘削状況 (南東から)



写真44 谷地遺跡トレンチ掘削状況 (北東から)



写真45 谷地遺跡 1T (東から)



写真46 谷地遺跡 1T (西から)





写真 47 谷地遺跡 2T (北から)



写真 48 谷地遺跡 3T (北から)



写真 49 谷地遺跡 4T (北から)



写真 50 谷地遺跡 5T (北から)



写真 51 谷地遺跡 6T (南から)



写真 52 谷地遺跡 1T (北から)



写真 53 谷地遺跡 1T 埋設土器 (北から)



写真 54 谷地遺跡 2T サブトレンチ 3 (北から)



写真 55 谷地遺跡 2T (西から)



写真 56 谷地遺跡 3T 埋設土器 (西から)



写真 57 谷地遺跡 3T (西から)



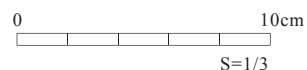
写真 58 谷地遺跡 5T (西から)



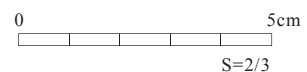
写真 59 谷地遺跡 6T (西から)



1～14：縄文土器（1・2・5・10・13：3T 遺確面、3：4T 遺確面、4・12：5T 遺確面、6・7・14：2T 遺確面、8：4T 深掘区、9：6T 遺確面、11：2T 深掘区）



15・17：スクレイパー／珪質頁岩、16：楔形石器／珪質頁岩（15：6T 遺確面、16：4T 遺確面、17：2T 深掘区）



第31図 谷地遺跡出土遺物（1）



1: 石核/頁岩、2: 磨石/安山岩、3: 石皿/安山岩、4: 棒状石製品/安山岩 (1: 1T 遺確面、2: 2T 遺確面、3: 表採、4: 排土)

第32図 谷地遺跡出土遺物 (2)

## 7. 円田入B遺跡

### 調査要項 (第1表 51)

遺跡名：円田入B遺跡 (遺跡登録番号 05146)  
 調査原因：個人住宅建築計画 (震災復興事業)  
 調査箇所：蔵王町大字円田字清上 123-4  
 調査期間：平成23年6月8日  
 調査面積：162.4m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：鈴木雅

**遺跡の概要** 縄文時代の散布地として登録されている。遺物の表面散布は遺跡西部に顕著である。これまでに発掘調査は行なわれていない。

**調査の成果** 事業主より遺構の確認状況を踏まえて建築位置を再検討したい旨の意向が示されていたことから、敷地内の遺構の分布状況を把握することを目的とし、6か所のトレンチを設定して確認調査を実施した。旧地形は南東向き緩斜面で、現況よりやや傾斜がきつい。遺構は1・4・5Tで土器埋設遺構4基・土坑4基を確認した。遺物は1・4・5Tの遺構堆積土・遺構確認面から縄文土器深鉢、剥片が出土した (第35・36図)。縄文土器は縄文時代後期のものとみられる。



第33図 円田入B遺跡調査地点位置図



写真60 円田入B遺跡調査前現況 (東から)



写真61 円田入B遺跡トレンチ掘削状況 (北西から)



写真63 円田入B遺跡4T (北から)



写真64 円田入B遺跡5T (北から)



写真62 円田入B遺跡4T南部 (北から)



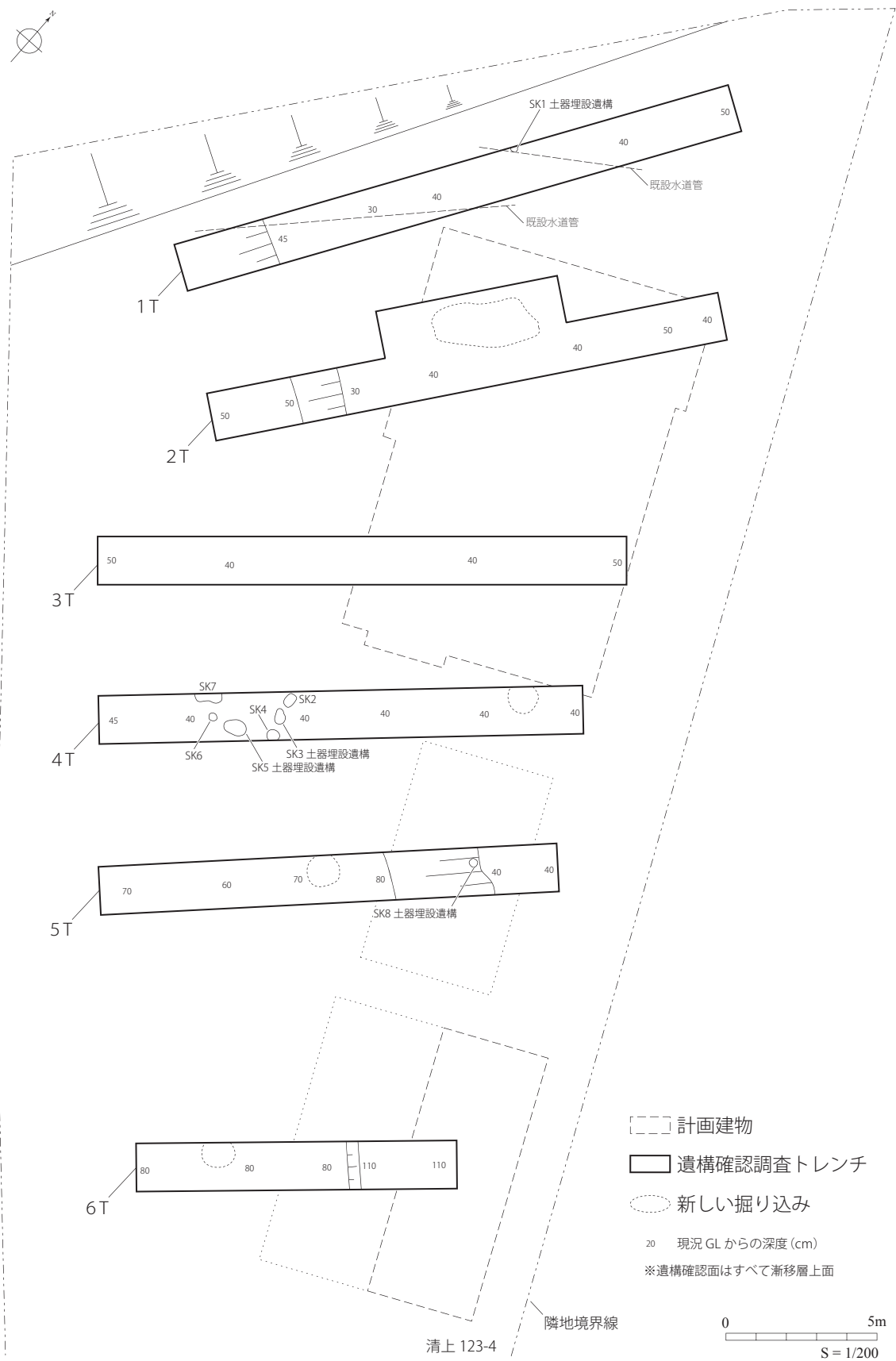
写真65 円田入B遺跡4T SK3埋設土器 (西から)



写真66 円田入B遺跡4T SK5埋設土器 (西から)



写真67 円田入B遺跡5T SK8埋設土器 (西から)

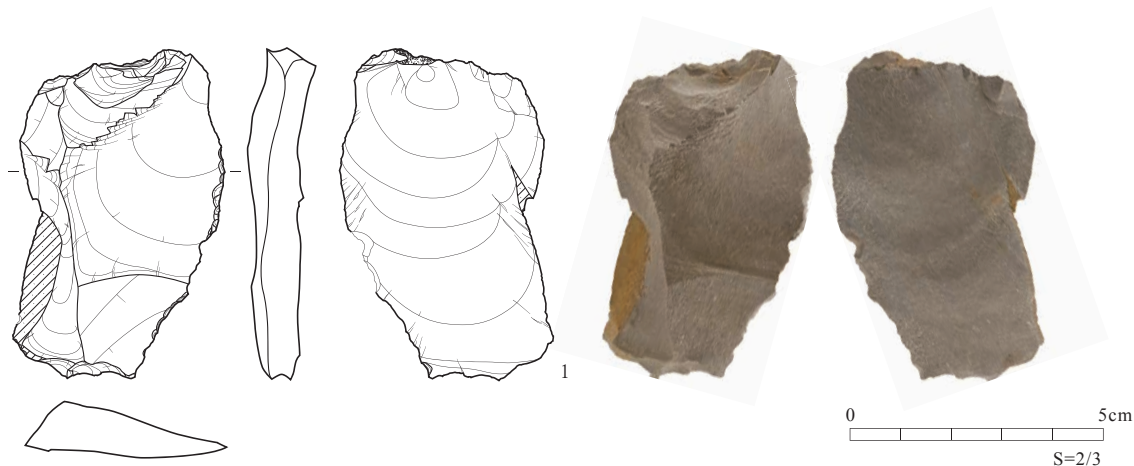


第34図 円田入B遺跡トレンチ配置図



No.	調査区	遺構	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	4T	SK3	確認面	縄文土器	深鉢	ナデ、縄文 (LR)	0.8	口縁部	EB11-3
2	4T	SK3	確認面	縄文土器	深鉢	沈線文、燃糸文 (R)	0.8	頸~胴部	EB11-2
3	1T	SK1	確認面	縄文土器	深鉢	沈線文、燃糸文 (R)	1.0	口縁~胴部	EB11-1
4	4T	SK3	確認面	縄文土器	深鉢	沈線文、燃糸文 (R)	0.8	胴部	EB11-4
5~7	4T	SK5	確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR) 胎土に砂粒を多く含む	1.0	口縁・胴部	EB11-7a~c
8	5T	-	遺構確認面	縄文土器	深鉢	沈線区画、縄文充填 (LR) 内外面炭化物付着	0.6	胴部	EB11-9
9	4T	SK3	確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR) 胎土に砂粒を多く含む	0.8	胴部	EB11-5
10	4T	SK3	確認面	縄文土器	浅鉢 <sub>a</sub>	縄文 (LR <sub>a</sub> )、底部無文 (ミガキ) 内外面炭化物付着	0.7	底部	EB11-6
11	5T	-	遺構確認面	円盤状土製品		縁辺部打欠き 燃糸文 (R)	-	完形	EB11-10

第35図 円田入B遺跡出土遺物 (1)



No.	調査区	遺構	層位	種類	石材	器面調整・特徴	法量 (mm・g)				登録
							長	幅	厚	重	
1	4T	SK4	確認面	微細剥離ある剥片	珪質頁岩	自然面打面の縦長剥片素材 正面右側縁に微細剥離	65.0	42.1	9.4	24.6	EB11-8

第36図 円田入B遺跡出土遺物 (2)

## 8. 寺門前遺跡

### 調査要項 (第1表53)

遺跡名：寺門前遺跡 (遺跡登録番号 05161)

調査原因：社会福祉協議会施設建設計画

調査箇所：蔵王町大字円田字寺門前 51-1 外

調査期間：平成23年6月29日～7月2日

調査面積：432.8m<sup>2</sup>

調査主体：蔵王町教育委員会

調査員：佐藤洋一・鈴木雅

**遺跡の概要** 縄文時代の散布地として登録されている。遺物の表面散布は遺跡東部に顕著である。今回調査地点を含む遺跡西部では遺物の表面散布はやや散漫となるが、隣接する谷地遺跡北東部から広がる一連の遺構分布が推定される。本遺跡ではこれまでに発掘調



第37図 寺門前遺跡調査地点位置図



写真68 寺門前遺跡調査前現況 (北から)



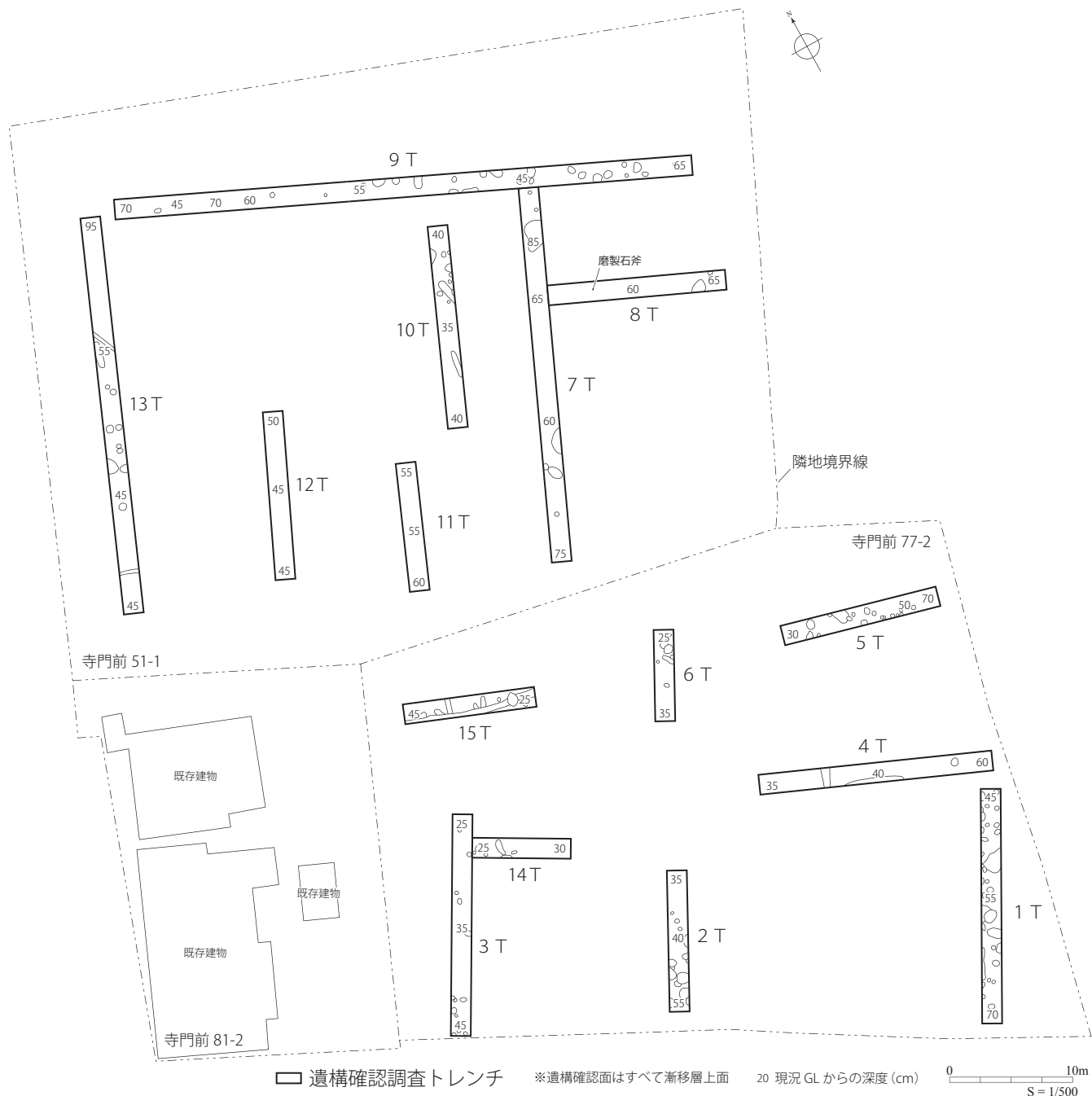
写真69 寺門前遺跡8T磨製石斧 (南から)



写真70 寺門前遺跡1T (北から)



写真71 寺門前遺跡2T (南から)



第38図 寺門前遺跡トレンチ配置図

査は行なわれていないが、隣接する谷地遺跡では平成22年度に遺構確認調査を実施している（第1節6）。

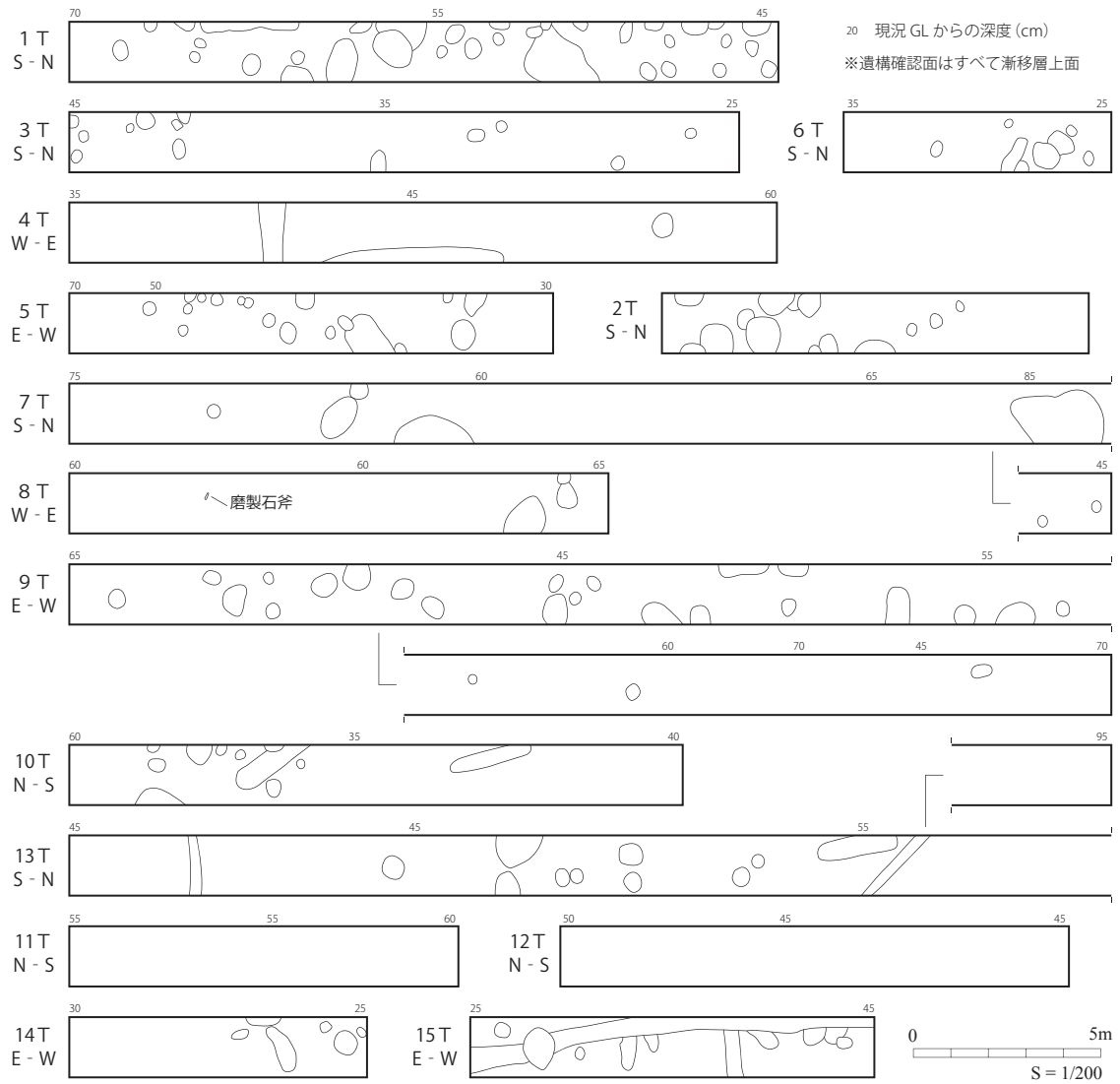
**調査の成果** 事業主より遺構の確認状況を踏まえて事業計画を再検討したい旨の意向が示されたことから、敷地内の遺構の分布状況を把握することを目的とし、トレンチ15か所を設定して確認調査を実施した。

敷地内の地形は舌状に延びる微高地の尾根にあたり、東向き緩斜面である。敷地北西側は後背湿地に面した北向き緩斜面となっている。旧地形は現況とほぼ対応しており、上層から1層：現耕作土、2層：黒色シルト、3層：漸移層、4層：ローム層の堆積を確認したが、敷地中央部の3・6・7・11・14・15Tで

は2～3層上部の堆積が見られない。

遺構は11・12Tを除く13か所のトレンチで土坑・溝跡・柱穴など多数を確認した。分布状況は敷地南側の1～6・14・15Tに顕著で、これらは隣接する谷地遺跡で確認した遺構群（第1節6）と一連の分布を形成している可能性がある。このほか、7～10T、13Tにもまとまった遺構の分布が見られ、今回調査範囲の外側に中心を持つ遺構分布の一部と見られる。遺物は1・4～9・13・14Tの確認面から縄文土器、石器（剥片石器・磨製石器・礫石器）、陶器が整理箱0.5箱分出土した（第40～43図）。縄文土器は縄文時代中期前葉のものが主体である。





第 39 図 寺門前遺跡遺構配置図



写真 72 寺門前遺跡 9T (東から)



写真 73 寺門前遺跡 10T (北から)



写真 74 寺門前遺跡 15T (西から)



写真 75 寺門前遺跡 1T (西から)



写真 76 寺門前遺跡 2T (西から)

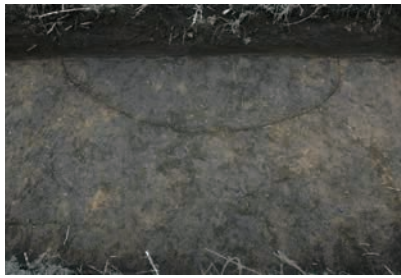


写真 77 寺門前遺跡 7T (西から)



写真 78 寺門前遺跡 7T (西から)



写真 79 寺門前遺跡 8T (南から)



写真 80 寺門前遺跡 10T (西から)



写真 81 寺門前遺跡 13T (西から)



写真 82 寺門前遺跡 14T (南から)



写真 83 寺門前遺跡 15T (南から)



No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	突起付口縁、S字状・弧状隆沈線文、沈線文 大木 8a 式	-	口縁部	TM11-1
2	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (RL)、半裁竹管による押し文・平行沈線文・刺突文 胎土に黒雲母含む 大木 7a 式	0.9	口縁部	TM11-2
3	4T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	折返し口縁、横位平行押し縄文 (LR)、胴部縄文 (LR) 大木 7b 式	0.8	口縁部	TM11-19
4	6T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	円形刺突文、隆帯、縄文 (LR) 大木 8a 式	0.9	口縁部	TM11-27
5	5T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	口縁に沿う小波状粘土紐貼付文、押捺を加えた隆帯、頸部縦位押し縄文 (RL) 大木 7b 式	-	口~胴部	TM11-24

第 40 図 寺門前遺跡出土遺物 (1)

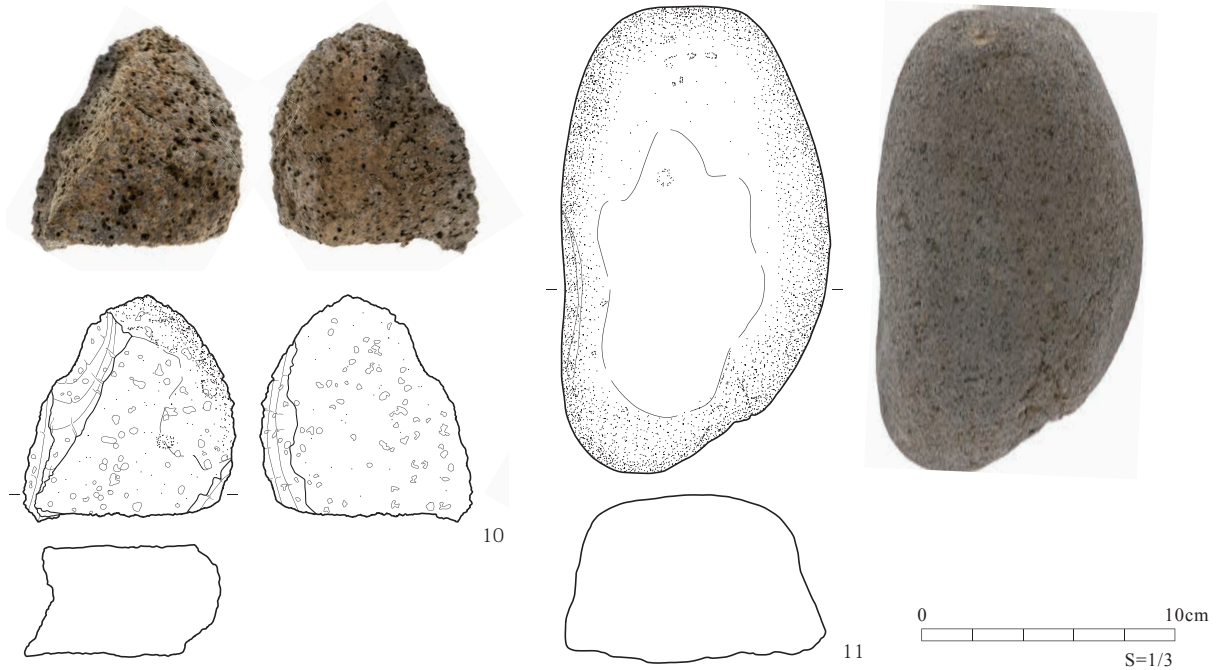


No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	区画隆線文、隆線に沿う押圧縄文 (LR)、炭化物付着 大木 7b 式	-	口縁部	TM11-13
2	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	小波状口縁、輪積み痕、炭化物付着 胎土に黒雲母含む	0.7	口縁部	TM11-5
3	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	輪積み痕顕著、指頭による縦方向のナデ2条	-	口縁部	TM11-4
4	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	平縁、波状粘土紐貼付文、縄文 (LR) 大木 8a 式	0.8	口縁部	TM11-8
5	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	隆帯→縄文 (LR) →横位平行沈線文 大木 7a 式	0.8	口縁部	TM11-11
6	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	口唇部山形粘土紐貼付文、無文 (ナデ) 内面粘土紐貼付文 内外面口縁部付近炭化物付着 大木 8a 式	0.7	口縁部	TM11-10
7	5T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	λ字状区画隆線文、無文 (ナデ)、頸部隆線文、炭化物付着 内面焼けほじけ 大木 7b 式	0.7	口~胴部	TM11-23
8	1T	遺構確認面	縄文土器	浅鉢	平縁+突起 (刻み入り)、ユビナデ、胴~底部ケズリ、底部網代痕→ナデ 口径:(30.0) cm、最大径:(32.4) cm、底径:(10.7) cm、器高:15.0cm 大木 7b 式	-	1/5	TM11-3
9	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	小波状口縁、横位平行押圧縄文 (LR)、炭化物付着 大木 7b 式	0.8	口縁部	TM11-12
10	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	横位平行押圧縄文 (撚糸 L)、C 字状押圧縄文、連弧状押圧縄文 大木 7b 式	0.9	口縁部	TM11-9

第41図 寺門前遺跡出土遺物 (2)

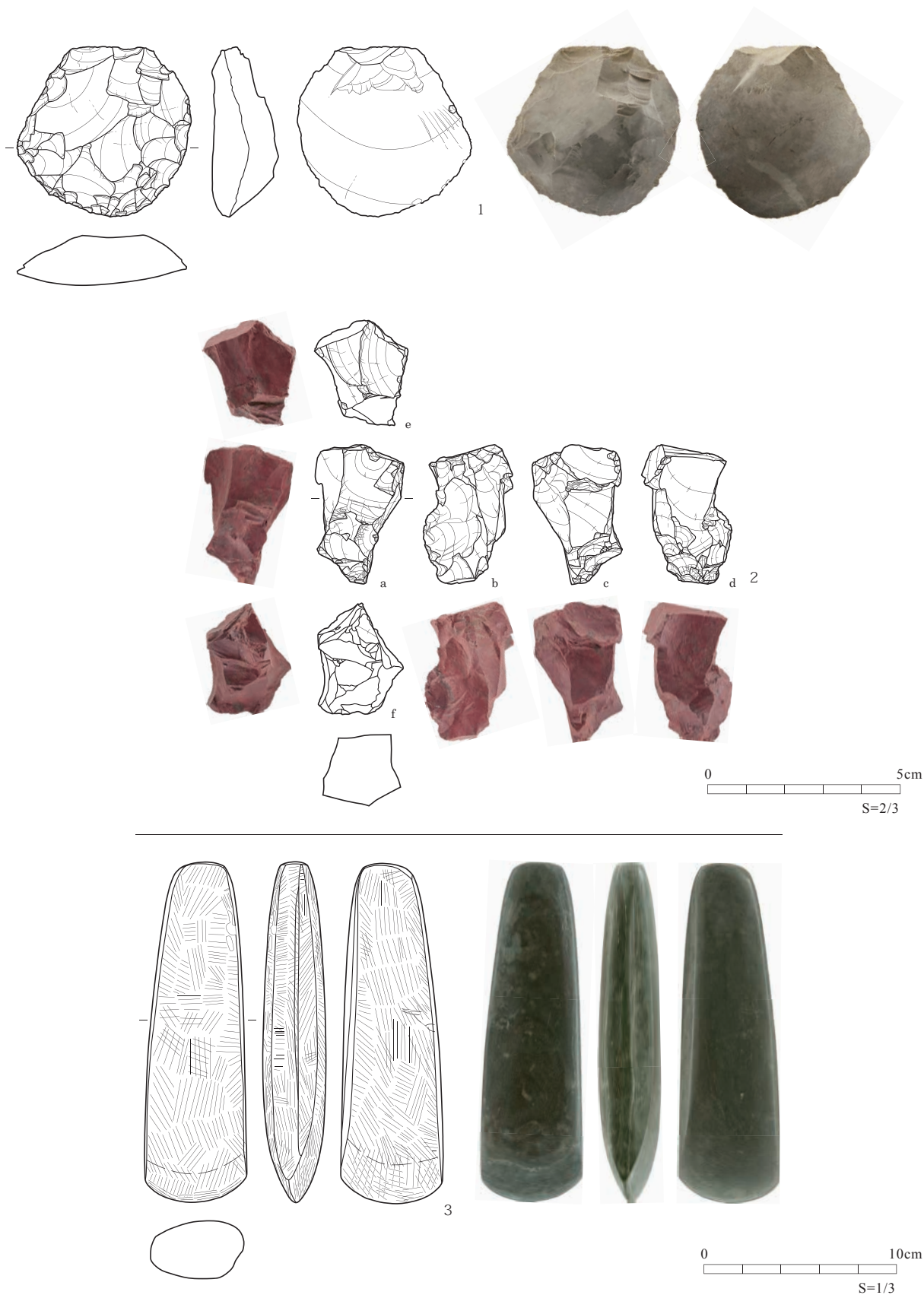


No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (RL) → 結節文 (R)	0.8	胴部	TM11-7
2	5T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)	0.8	胴部	TM11-26
3	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	刺突文、横位平行沈線文、縄文、磨滅	1.1	胴部	TM11-14
4	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	隆帯、縄文 (RL?)	0.9	胴部	TM11-15
5	4T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR) → 沈線文 内外面炭化物付着	0.7	胴部	TM11-21
6	4T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	沈線文、縄文 (LR)、炭化物付着	0.8	胴部	TM11-20
7	1T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	輪積み痕顕著、指頭による縦方向のナデ2条	-	胴部	TM11-6
8	5T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR)、結節文 (L) 2条	0.9	胴部	TM11-25
9	4T	遺構確認面	縄文土器	深鉢	縄文 (LR) 内面炭化物付着	0.6	底部	TM11-22



No.	調査区	層位	種類	石材	器面調整・特徴	法量 (mm・g)				登録
						長	幅	厚	重	
10	1T	遺構確認面	石皿	多孔質安山岩	両面磨滅 正面左・下側欠損	89.6	84.0	43.1	287.5	TM11-17
11	1T	遺構確認面	磨石	安山岩	表面中央部磨滅 裏面を除く全体に弱い磨滅	185.7	106.3	66.8	2270	TM11-16

第42図 寺門前遺跡出土遺物 (3)



No.	調査区	層位	種類	石材	器面調整・特徴	法量 (mm・g)				登録
						長	幅	厚	重	
1	1T	遺構確認面	スクレイパー	珪質頁岩	単剥離面打面の剥片素材 素材剥片の打面部を除く両側縁から下端部にかけて連続的な急角度剥離で弧状の刃部を作出 下端側刃部両面に光沢	44.1	45.5	14.4	29.2	TM11-18
2	14T	遺構確認面	石核	鉄石英	分割剥片素材の稜柱状石核 両設打面 (いずれも単剥離面打面) e・f面を打面として縦長の剥片を剥離 d面中央は分割面。	36.3	23.3	23.0	21.2	TM11-29
3	8T	遺構確認面	磨製石斧	緑泥片岩	全面に入念な研磨 刃部を横方向の研磨で仕上げる	177.8	53.2	32.2	538.5	TM11-28

第43図 寺門前遺跡出土遺物 (4)

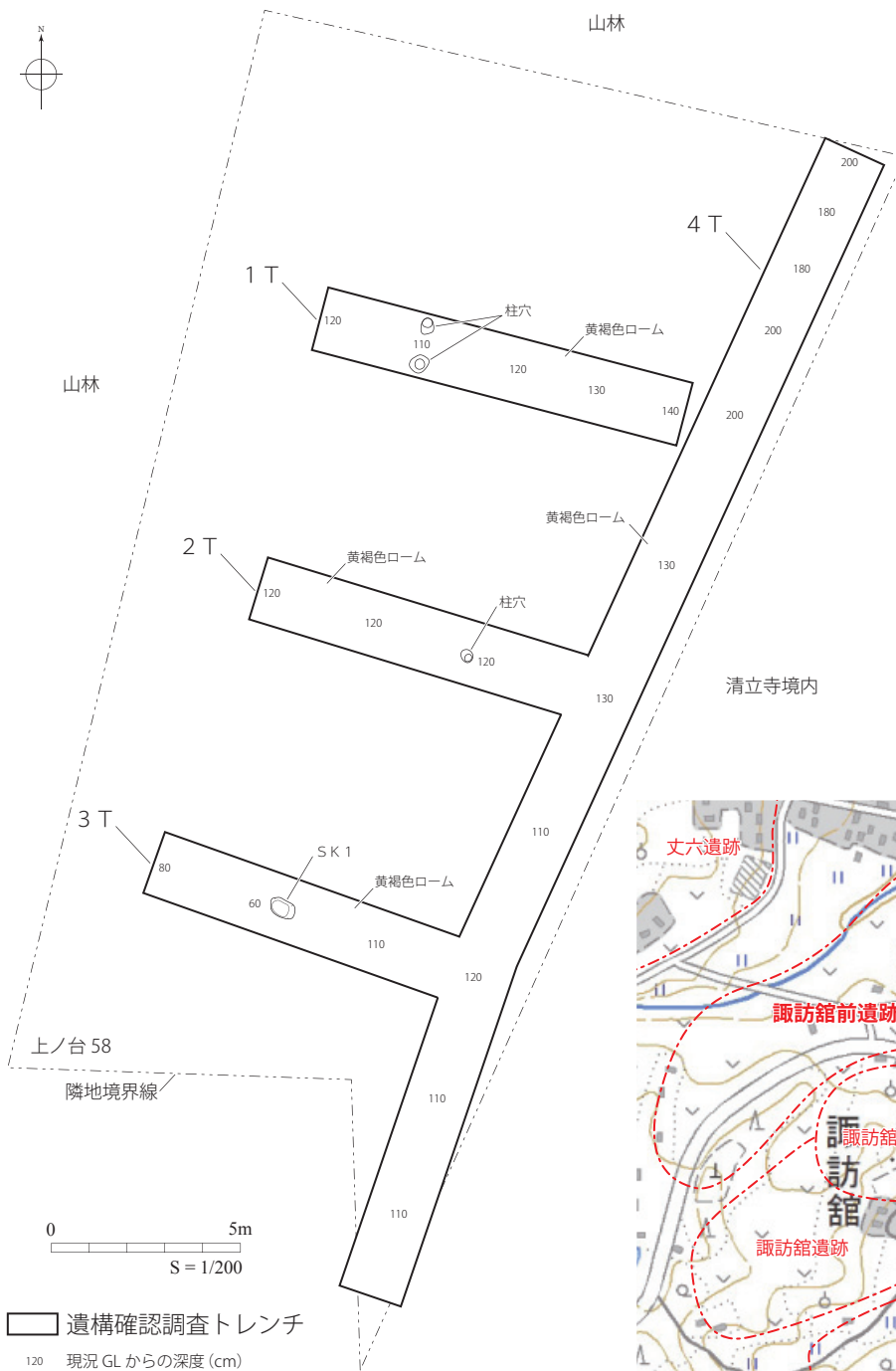
## 9. 諏訪館前遺跡隣接地

### 調査要項 (第1表 57)

遺跡名：諏訪館前遺跡 (遺跡登録番号 05014)  
 調査原因：清立寺駐車場造成計画  
 調査箇所：蔵王町大字平沢字上ノ台 58  
 調査期間：平成 24 年 1 月 17 日  
 調査面積：108.0m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：鈴木雅

**遺跡の概要** 縄文・弥生・古墳・平安時代の集落跡・散布地として登録されている。昭和 63 年度に平沢幼稚園建設計画に伴って蔵王町教育委員会が宮城県教育委員会の協力を得て遺跡北東部で発掘調査を行ない、竪穴住居跡 13 軒、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 12 基、窯跡 1 基を確認している。竪穴住居跡のうち 5 軒は古墳時代中期のものである。また、平成 3 年度 (個人住宅建築計画、町・県教委、宮城県教育委員会 1992)、平成 13 年度 (農道山の入寺前線改良工事計画、町教委、町 2 集) に遺跡東部で発掘調査を行ない、古墳時代中期の土坑などを確認している。

**調査の成果** 造成計画範囲にトレンチ 4 か所を設定して確認調査を実施した。旧地形は東向き斜面で、現況より傾斜がきつい。遺構は 1・2・3T で土坑 1 基、柱穴 3 か所を確認した。遺物は 3T の土坑堆積土から土師器杯・甕・小型品、4T の表土から陶器播鉢が出土した (第 47 図)。3T の土坑堆積土から出土した土師器には、古墳時代中期と見られるものがある。



第 44 図 諏訪館前遺跡隣接地トレンチ配置図



第 45 図 諏訪館前遺跡隣接地調査地点位置図



写真 84 諏訪館前遺跡調査前現況 (南から)



写真 85 諏訪館前遺跡調査前現況 (北から)



写真 86 諏訪館前遺跡 3T SK1 土坑 (北から)



写真 87 諏訪館前遺跡 2T (西から)



写真 88 諏訪館前遺跡 3T (西から)



写真 89 諏訪館前遺跡 4T (北から)

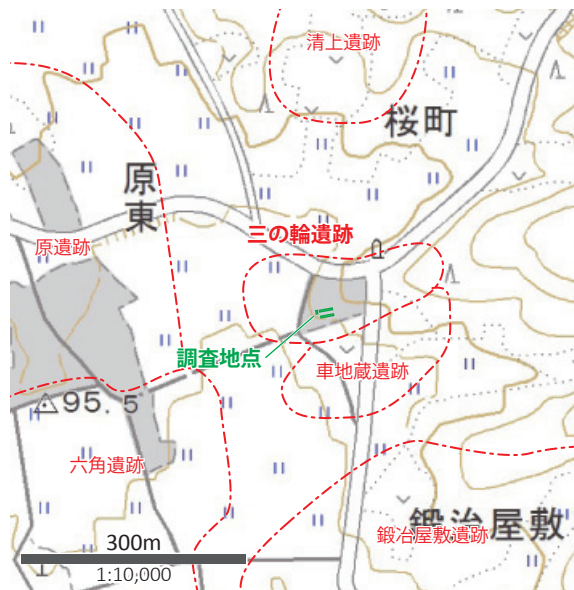
## 10. 三の輪遺跡

### 調査要項 (第1表 61)

- 遺跡名：三の輪遺跡 (遺跡登録番号 05194)
- 調査原因：個人住宅建築計画 (震災復興事業)
- 調査箇所：蔵王町大字小村崎字三の輪 53-1
- 調査期間：平成 24 年 4 月 21 日
- 調査面積：43.4m<sup>2</sup>
- 調査主体：蔵王町教育委員会
- 調査員：佐藤洋一・鈴木雅

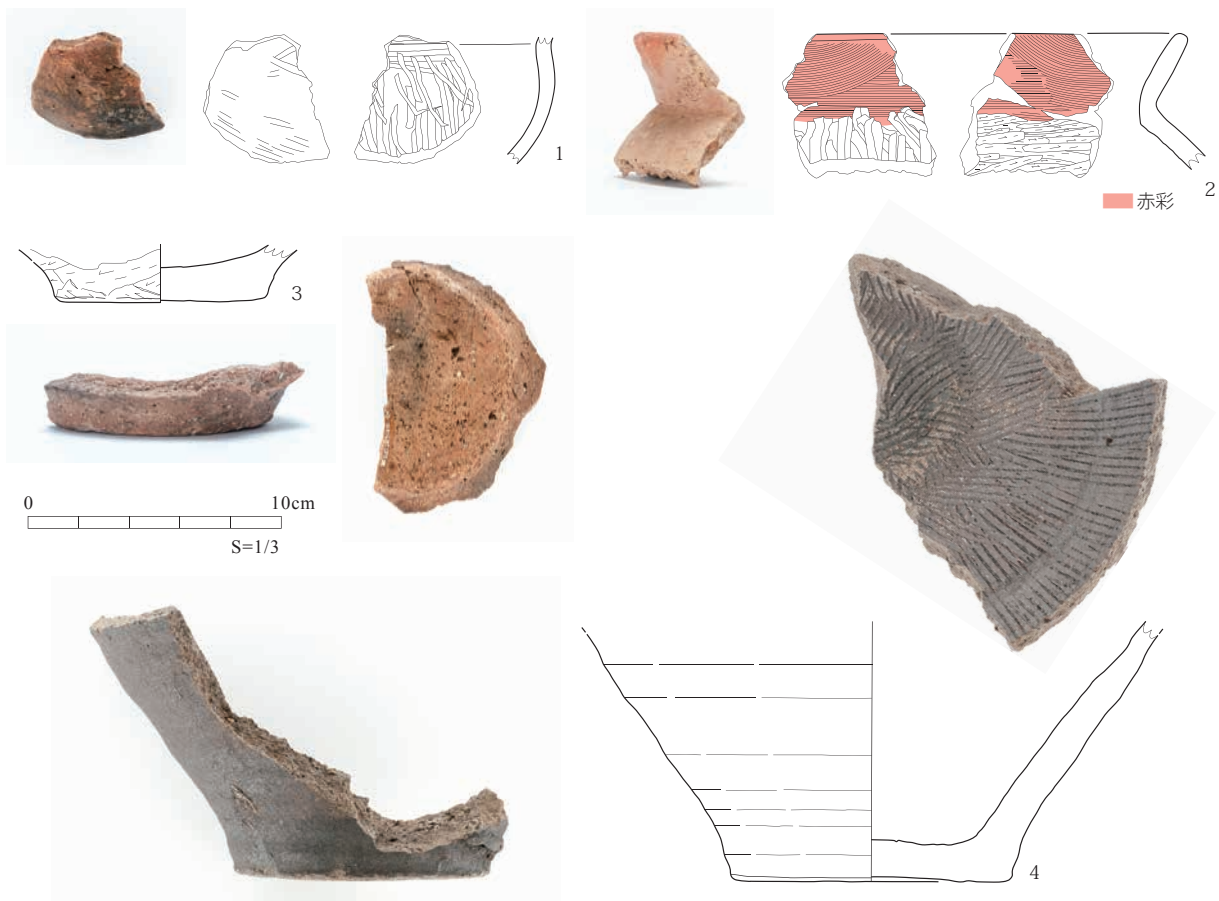
**遺跡の概要** 古墳・奈良・平安時代の散布地として登録されている。平成 14 年度に県営ほ場整備事業計画 (円田 2 期地区) に伴って宮城県教育委員会が遺跡西端部の水田で確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されていない (宮城県教育委員会 2003)。南側に隣接する車地蔵遺跡では平成 17 年度に県営ほ場整備事業計画に伴って蔵王町教育委員会が発掘調査を実施し、今回調査地点から南東に約 100m の地点で古代・中世の掘立柱建物跡、近世の屋敷地の一部とみられる溝跡・水場遺構などを確認している (町 4 集)。

**調査の成果** 敷地北側に高さ 1m 程度の切土面があり、旧地形は丘陵尾根に近い南向き斜面であったとみ



第 46 図 三の輪遺跡調査地点位置図

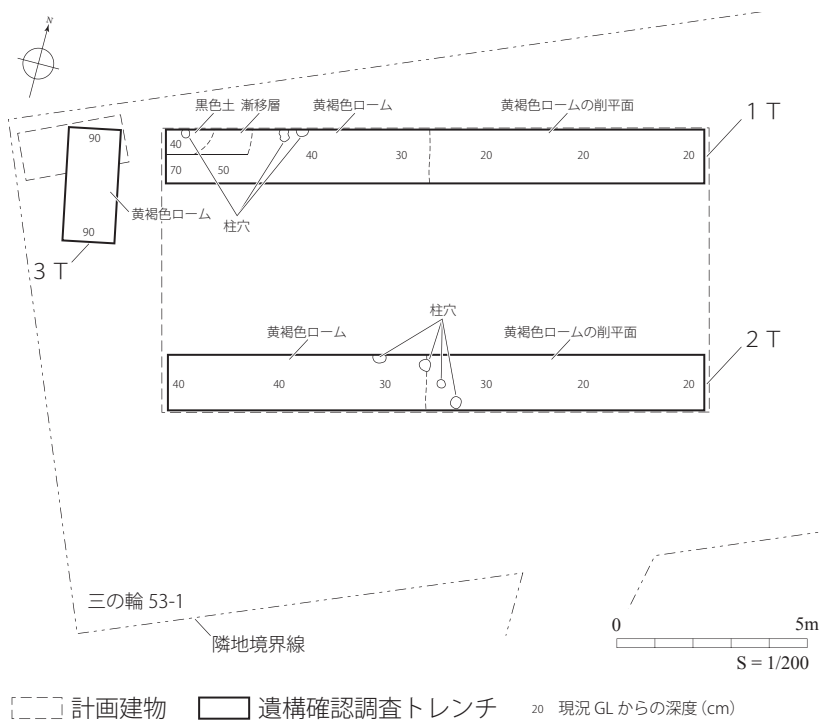
られる。建築計画範囲に 3 か所のトレンチを設定して調査を実施した。1・2T ではローム層の削平面が確認され、1・2T 西端部と 3T では丘陵先端部にあたる西向き斜面上層から黒色シルト層、漸移層、ローム層の堆積を確認した。黒色シルト層上面は近世以降の盛土整地層に覆われており、3T では厚さ 80cm に及ぶ。遺構は 1・2T の黒色シルト層上面およびローム層の



No.	調査区	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
							口径	底径	器高		
1	3T	SK1	堆積土	土師器	坏	外面：ヘラミガキ、二次被熱により一部黒色化 内面：(頸) 横方向ヘラミガキ→(体) 縦方向ヘラミガキ	-	-	(5.1)	体部	KD11-2
2	3T	SK1	堆積土	土師器	甗	外面：(胴) ヘラナデ→(口) ヨコナデ→(口~頸) 赤彩→(胴) ヘラミガキ 内面：(胴) ナデ→ヘラケズリ・(口) ヨコナデ→(口~頸) 赤彩	-	-	(5.8)	口~頸部	KD11-3
3	3T	SK1	堆積土	土師器	甗	外面：(胴下) ヘラケズリ・(底) ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	-	(8.2)	(2.3)	胴下~底部	KD11-4
4	4T	-	表土	中世陶器	播鉢	外面：刻目 内面：ロクロナデ、底部立ち上がり付近使用による磨滅	-	(11.2)	(10.3)	体~底部	KD11-1

第47図 諏訪館前遺跡隣接地出土遺物

削平面で柱穴跡7か所を確認した。遺物は1T西端部で確認した柱穴の柱材抜き取り痕跡から陶器甗・播鉢・火鉢、3Tの黒色シルト層から磁器小瓶・筒形碗、デイスait製石皿などが出土した(第49図)。陶磁器類は近世後半頃のものが多い。



第48図 三の輪遺跡トレンチ配置図





写真90 三の輪遺跡調査前現況（南から） 写真91 三の輪遺跡調査前現況（西から） 写真92 三の輪遺跡トレンチ掘削状況（北東から）



No.	調査区	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	3T	旧表土	磁器	小瓶	外面：染付、透明釉、錆唐草、縞 内面：一部透明釉 肥前 19c 前半～	1.6	5.3	(7.0)	2/3	UM12-4
2	3T	旧表土	磁器	小碗	半筒形 外面：灰釉 大堀相馬 18c 後半～ 19c 初頭	-	4.1	(2.8)	体～底部	UM12-5
3	1T	旧表土	陶器	片口鉢	内外面：ロクロナデ 灰釉→白濁（口縁のみ） 小野相馬 <sub>2</sub> 18c 前葉～中葉	-	-	(9.2)	口～体部	UM12-2
4	1T	旧表土	陶器	描鉢	外面：無釉 内面：格子状描目 器厚：0.9cm	-	-	-	胴部	UM12-3
5	1T	旧表土	瓦質土器	火鉢	外面：ロクロナデ→（底）回転糸切り→（底付近～底）ヘラケズリ 内面：ロクロナデ 脚部1ヶ所残存	-	(25.4)	(7.4)	体～底部	UM12-1

第49図 三の輪遺跡出土遺物



写真 93 三の輪遺跡 1T (西から)



写真 94 三の輪遺跡 2T (東から)

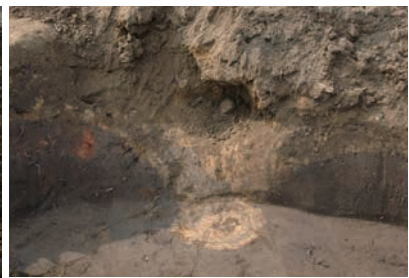


写真 95 三の輪遺跡 1T 柱穴 (南から)



写真 96 三の輪遺跡 2T 柱穴 (南から)

## 第2節 緊急発掘調査

### 1. 戸ノ内遺跡

#### 調査要項 (第1表 28)

遺跡名：戸ノ内遺跡 (遺跡登録番号 05197)  
 調査原因：個人住宅建築計画  
 調査箇所：蔵王町大字小村崎字戸ノ内中 94  
 調査期間：平成 21 年 6 月 16 日 (確認調査)  
 平成 21 年 6 月 16 日～25 日 (本調査)  
 調査面積：85.5m<sup>2</sup>  
 調査主体：蔵王町教育委員会  
 調査員：鈴木雅

#### 遺跡の概要

縄文・弥生・奈良・平安時代、中世の集落・散布地として登録されている。平成 19・20 年度に県営ほ場整備事業 (円田 2 期地区) に伴う発掘調査を遺跡範囲東部の丘陵裾部で実施しており、奈良・平安時代の集落跡、中世末～近世初頭の掘立柱建物跡などを確認している (町 8 集)。

#### 調査に至る経緯

個人住宅建築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が平成 21 年 5 月 19 日付けで建築主より蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出された。県教育委員会からは 5 月 29 日付けで確認調査を実施する必要があるとの回答書が出された。これを受けて町教育委員会が 6 月 16 日に確認調査を実施したところ、竪穴住居跡 1 軒などの遺構が確認された。これについて県教育委員会・町教育委員会・事業主で対応



第 50 図 戸ノ内遺跡調査地点位置図

を協議した結果、建築計画に含まれている柱状土壌改良工は地盤調査結果などから必要性があり、工事による遺構の破壊が避けられないことから、建築主の協力を得て町教育委員会が緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることで合意した。発掘調査は 6 月 16 日から 6 月 25 日までの 8 日間を要した。

#### 調査の成果

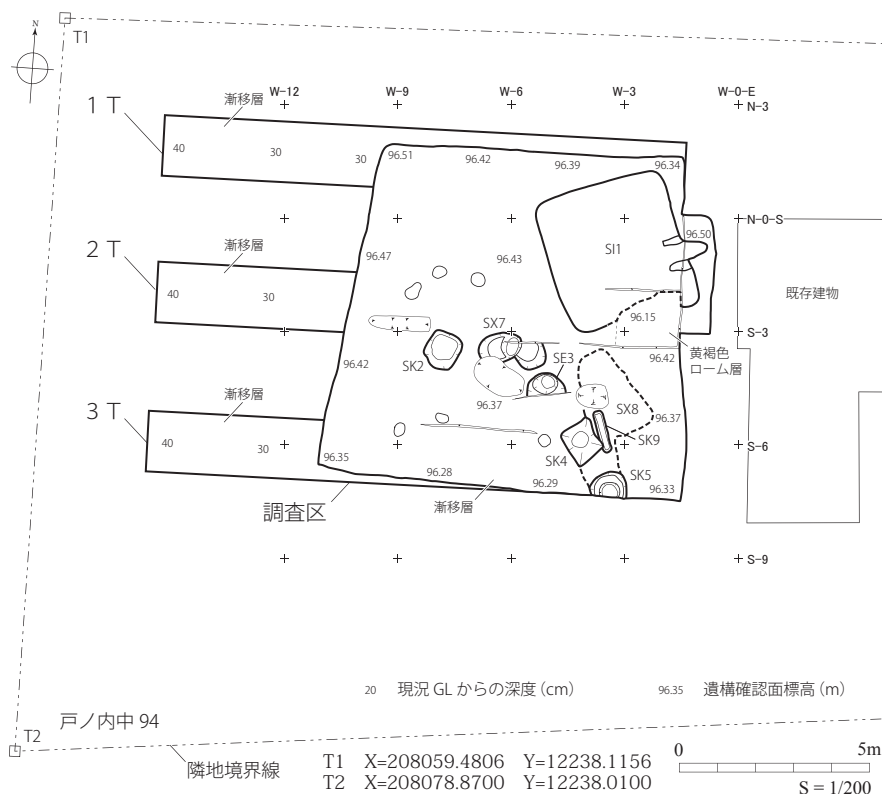
①調査区周辺の地形 本遺跡は北西－南東方向に延びる低平な舌状丘陵上に立地する。これまでの調査で、本遺跡の東西に隣接する西屋敷遺跡・原遺跡との間は小規模な沢地形で画されることが判明している。今回の調査地点は東側の沢地形に近い舌状丘陵の東側裾部

にあたる。遺構確認面は漸移層上面で、調査区内では概ね平坦である。

②発見された遺構と遺物 遺構は竪穴住居跡1軒、井戸跡1基、土坑4基、性格不明遺構2基、柱穴6か所を確認した。

【SI1 竪穴住居跡】(第51・52図) 平面形は長軸4.15m、短軸3.30mの隅丸方形を呈する。方位はカマド中軸線で磁北より東に70°傾く。壁面は地山を壁として床面からやや傾斜を持って立ち上がり、残存壁

高は最大12cmである。床面は住居掘方埋土で構築され、ほぼ平坦である。床面を覆う堆積土は6層に細分される。1層は黒褐色シルト、2層は黒色シルト、3層はロームブロックを含む黒褐色シルト、4層はロームブロックを多量に含むにぶい黄褐色シルト、5層はロームブロックを極めて多量に含むにぶい黄褐色シルト、6層は焼土ブロックを極めて多量に含む暗赤褐色シルト、7層はブロックを含む黒褐色シルトである。1・2層は自然堆積土、3層は壁際の崩落土、4・5層



第51図 戸ノ内遺跡遺構配置図



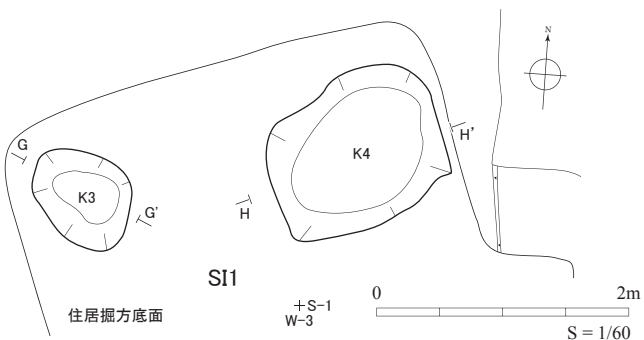
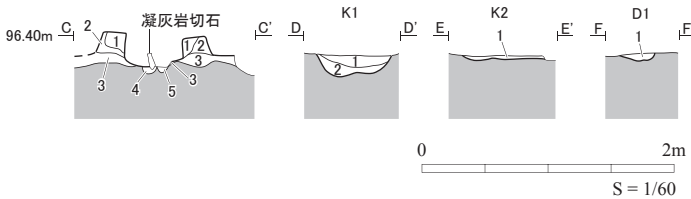
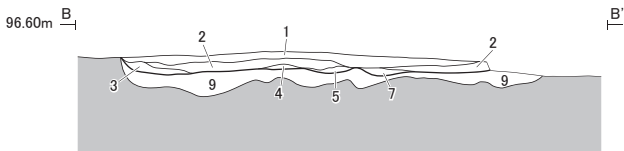
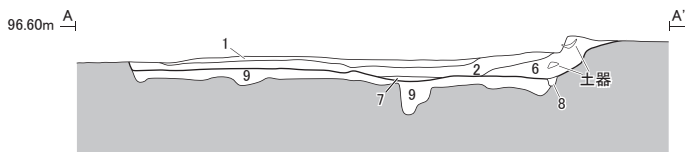
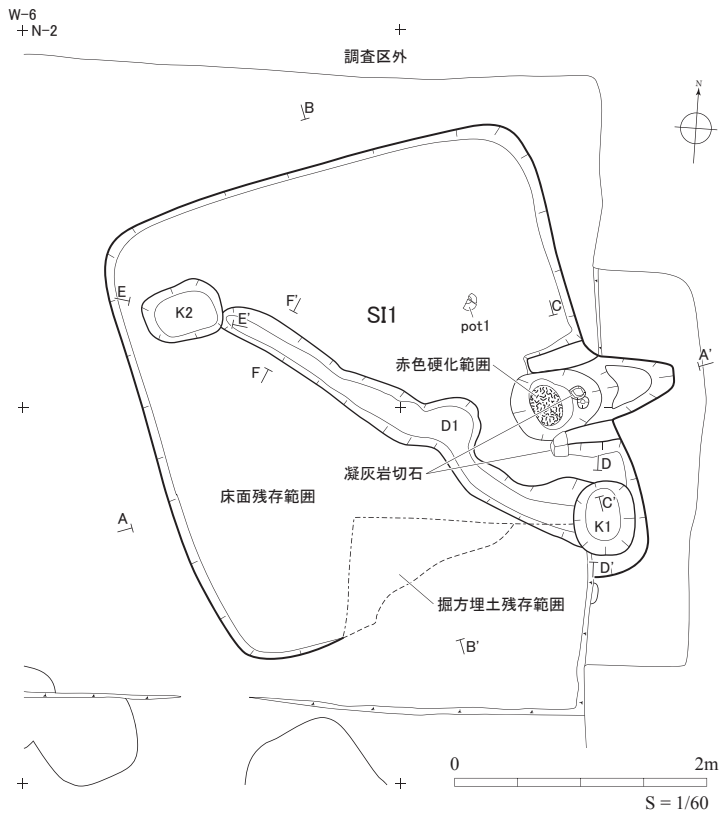
写真97 戸ノ内遺跡調査前現況(西から)



写真98 戸ノ内遺跡調査前現況(北東から)



写真99 戸ノ内遺跡遺構確認状況(西から)



SI1 竪穴住居跡 A-A'		B-B'	
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ローム粒・焼土粒/極少量
2	10YR2/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック・粒、焼土粒/極少量
3	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック
4	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック/多量 焼土粒/極少量 (人為)
5	10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	黄褐色ロームブロック/極めて多量 (人為)
6	10YR3/6 暗赤褐	シルト	黄褐色ロームブロック 焼土ブロック・粒/極めて多量 (竈崩)
7	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック (D1 堆)
8	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック (竈支脚材据・旧)
9	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック/多量 (住掘)

SI1 竪穴住居跡カマド横断面 C-C'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	2.5YR4/6 赤褐	シルト	2層が被熱により赤色化(竈側壁構)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	白色粘土・黄褐色ロームブロック/多量 (竈側壁構)
3	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック (住掘)
4	10YR2/2 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム小ブロック (新竈支脚材据穴)
5	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック (旧竈支脚材据穴、住居主断面8層対応)

SI1 竪穴住居跡 K1 D-D'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・黄褐色ローム粒/少量 焼土粒/極少量
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック/多量(人為)

SI1 竪穴住居跡 K2 E-E'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック/少量

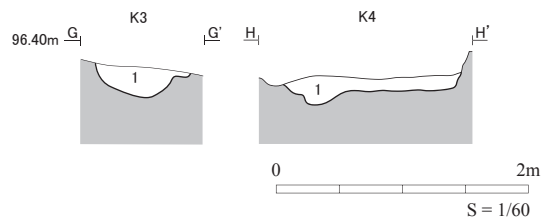
SI1 竪穴住居跡 D1 F-F'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック (住居主断面7層対応)

SI1 竪穴住居跡 K3 G-G'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック/多量 (人為)

SI1 竪穴住居跡 K4 H-H'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック 黄褐色ローム小ブロック/多量 暗褐色土ブロック/少量 (人為)



写真 98 戸ノ内 SI1 調査風景 (北東から)



第 52 図 戸ノ内遺跡 SI1 竪穴住居跡



写真 101 戸ノ内遺跡 SI1 竪穴住居跡床面 (西から)



写真 102 戸ノ内遺跡 SI1 竪穴住居跡確認状況 (西から)



写真 103 戸ノ内遺跡 SI1 竪穴住居跡カマド周辺 (南西から)



写真 104 戸ノ内遺跡 SI1 竪穴住居跡カマド縦断面 (南西から)



写真 105 戸ノ内 SI1 床面遺物出土状況 (東から)



写真 106 戸ノ内 SI1 カマド遺物出土状況 (西から)



写真 107 戸ノ内 SI1 カマド (西から)



写真 108 戸ノ内 SI1 D1 小溝断面 (北西から)



写真 109 戸ノ内 SI1 K1 土坑 (西から)



写真 110 戸ノ内 SI1 K1 土坑断面 (西から)



写真 111 戸ノ内 SI1 K2 土坑断面 (南東から)



写真 112 戸ノ内 SI1 K3 土坑断面 (南西から)



写真 113 戸ノ内 SI1 K4 土坑 (西から)

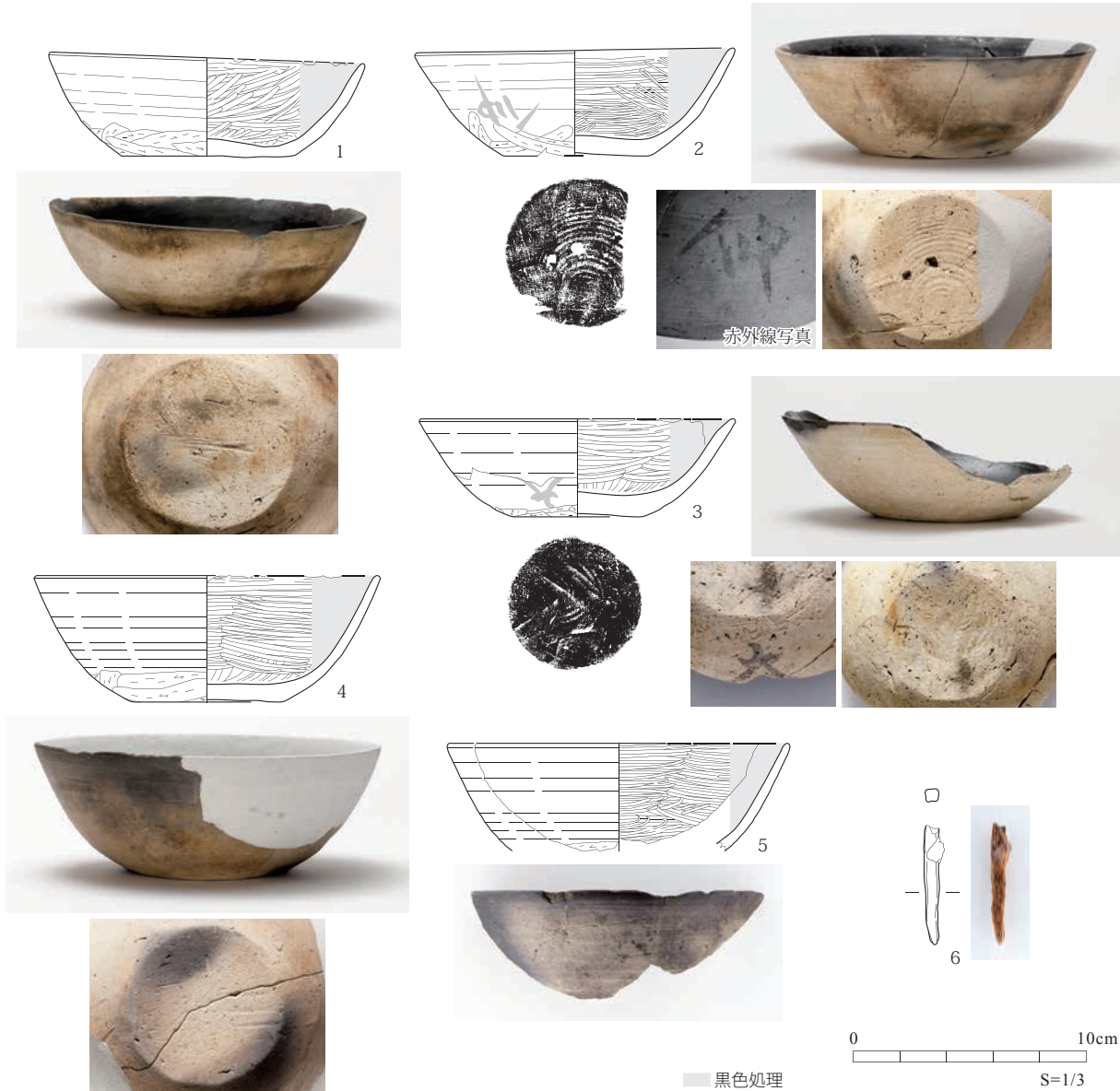
は人為的埋土、6層はカマド崩落土と考えられる。

主柱穴および周溝・壁材痕跡は確認されなかった。

カマドは住居東辺中央やや南寄りに付設する。燃烧部・煙道が残存する。燃烧部は幅101cm、奥行85cm、焚口幅56cm、燃烧部底面は幅50cm、奥行71cmで、床面よりごく浅く皿状に窪み、被熱による赤色硬化面が形成されている。側壁は長さ52~55cm、幅33~35cmで、残存高は右側壁で23cmである。奥壁は住居

東壁と一致する。側壁構築土は白色粘土・ロームブロックを多く含み、右側壁先端の焚口部に柱状の凝灰岩切石を据えている。また、燃烧部底面の中央奥壁寄りに柱状の凝灰岩切石を据えた支脚1か所、支脚の据え穴1か所を確認した。煙道は奥壁から53cm延びる。

このほかの床面の施設として、カマド右側の住居南東隅で土坑1基(K1)、住居北西隅で土坑1基(K2)、K1・K2土坑を連結するように住居対角線上に延びる小



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SI1	カマド崩落土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ、(底) 切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 内面口縁部・底部磨減	13.6	7.5	4.3	略完形	UC09-7
2	SI1	床面直上 Pot.1	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切り→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 井桁状ヘラミガキ→黒色処理 外面体部：倒位墨書「仲」	13.8	6.3	4.5	5/6	UC09-1
3	SI1	堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ、(底) 糸切り→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 外面体部：倒位墨書「大」	(13.6)	5.6	4.2	3/5	UC09-2
4	SI1	カマド焚口付近床直・D1 堆積土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ、(底) 切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	(14.8)	-	(4.6)	1/5	UC09-4
5	SI1	カマド崩落土	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 切り離し不明→手持ちヘラケズリ 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 内面体部に糊痕	(14.9)	6.6	5.5	3/5	UC09-5
No.	遺構名	層位	種類	材質	特徴				残存	登録
6	SI1	堆積土	釘	鉄	断面：方形 長：(5.2) cm、幅：0.6cm、厚：0.6cm、重：(5.0) g				一部	UC09-15

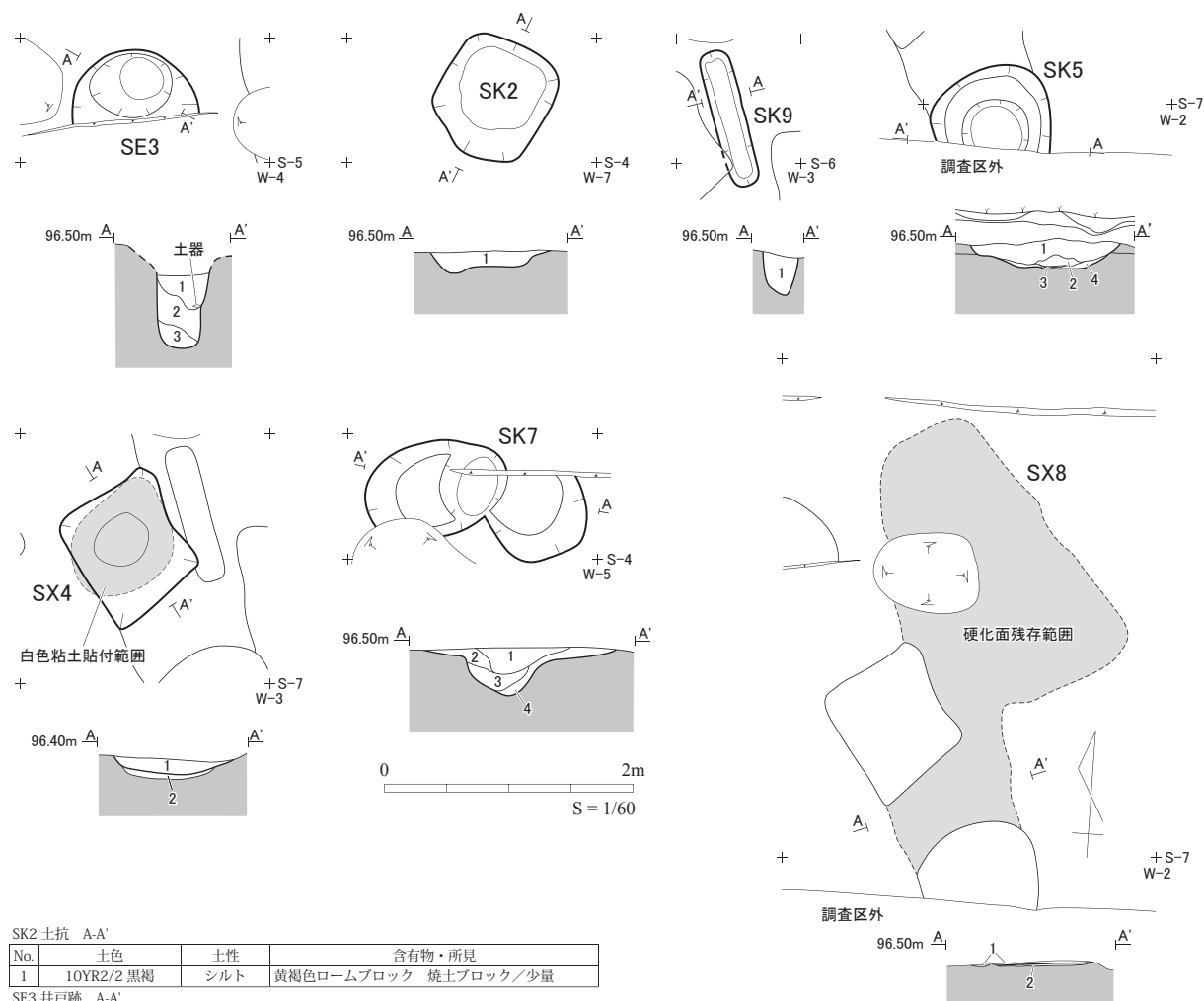
第53図 戸内遺跡SI1 竅穴住居跡出土遺物

溝 (D1) を確認した。K1 土坑は平面形が長軸 59cm、短軸 49cm の隅丸方形で、断面形は深さ 21cm の逆台形を呈する。K2 土坑は平面形が長軸 63cm、短軸 44cm の隅丸方形で、断面形は深さ 4cm の浅い皿形を呈する。D1 小溝は長さ 3.42m、上幅 10 ~ 32cm、で、横断面形は深さ 2 ~ 12cm の椀形を呈する。堆積土は K1 土坑の下部が人為的に埋め戻されており、これ以外は住居廃絶後の自然堆積土と考えられる。

床面機能時以前の施設として、住居掘方底面で土坑 2 基 (K3・K4) を確認した。K3 土坑は床面で確認した K2 土坑の直下に位置し、平面形が長軸 81cm、短軸 62cm の不整形、断面形は深さ 27cm の U 字形

を呈する。K4 土坑は住居北東部に位置し、平面形が長軸 141cm、短軸 118cm の隅丸方形、断面形は深さ 19cm の皿形を呈する。堆積土はいずれもロームブロックを多量に含む黒褐色シルトで、住居掘方埋土に類似する。

遺物は床面よりロクロ土師器坏 (第 53 図 2・4)、カマド崩落土よりロクロ土師器坏 (第 53 図 1・5)、住居内堆積土よりロクロ土師器坏 (第 53 図 3) ・鉄釘 (第 53 図 6) が出土した。ロクロ土師器坏はいずれもロクロ成形の後、外面底部付近に手持ちヘラケズリ調整、内面に黒色処理を施す。底部は糸切りによる切り離し後に手持ちヘラケズリによる再調整を施すも



SK2 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック 焼土ブロック/少量

SE3 井戸跡 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/1 黒	シルト	焼土粒/少量
2	10YR4/4 褐	シルト	焼土ブロック・焼土粒/極めて多量 (人為)
3	不明		

SX4 性格不明遺構 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	暗褐		
2	10YR4/4 褐	粘土	黒色土ブロック・白色粘土小ブロック (掘方)

SK5 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	黒	シルト	黄褐色ロームブロック/少量 白色粘土粒・焼土粒/極少量
2	褐灰	シルト	白色粘土ブロック/極めて多量 (人為)
3	褐灰	シルト	被熱により赤色化した白色粘土 (人為)
4	暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック/多量 白色粘土粒/少量 (人為)

SK7 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ロームブロック/少量 黄褐色ローム粒/極少量
2	10YR2/2 黒褐	シルト	焼土ブロック/多量 黄褐色ローム粒/極少量
3	10YR1.7/1 黒	シルト	黄褐色ローム粒/極少量
4	10YR2/3 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック 焼土粒/多量 炭化物粒/少量

SX8 性格不明遺構 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	2.5YR2/2 極暗赤褐	シルト	焼土粒・炭化物粒/多量
2	10YR1.7/1 黒	シルト	均質土 (人為)

SK9 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック/多量 (人為)

第 54 図 戸ノ内遺跡 SE3 井戸跡、SK2・SK4・SK5・SK9 土坑、SK7・SX8 性格不明遺構

のがある。第53図2は外面体部に倒位で墨書「仲」、第53図3は外面体部に倒位で墨書「大」がみられる。鉄釘(第53図6)は横断面形が方形を呈する。

【SE3 井戸跡】(第54・55図) 平面形は長軸103cm、短軸57cm以上の円形を呈する。断面形は深さ85cmのU字形で上部が漏斗形に開き、底面は皿状に窪む。井戸側は確認されなかった。堆積土は3層に細分され、1層は黒色シルト、2層は焼土ブロックを極めて多量に含む褐色砂質シルト、3層は湧水の影響で調査中に崩落したため不明である。1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。

遺物は堆積土2層上面よりロクロ土師器坏(第55図1・2)が出土した。いずれもロクロ整形の後、内面に黒色処理を施す。底部の切り離し方法は回転糸切りである。第55図1は底部の切り離し後に外底面から体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整を施す。第55図2は底部の切り離し後に再調整を施さないが、外面の体部下半に手持ちヘラケズリ調整を施す。

【SK2 土坑】(第54図) 平面形は長軸97cm、短軸88cmの不整形方形を呈する。断面形は深さ17cmの逆台形で、底部は平坦であるが北側の一部が深く皿状に窪む。堆積土はロームブロックを含む黒褐色シルト

で、人為的埋土と考えられる。遺物は出土していない。【SK5 土坑】(第54図) SX8性格不明遺構・SK9土坑より新しく、一部調査区外へ延びる。平面形は長軸120cm、短軸68cm以上の円形を呈するとみられる。断面形は深さ21cmの逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層に細分される。1層は黒色シルト、2層は白色粘土ブロックを極めて多量に含む褐灰色シルト、3層は被熱により赤色化した白色粘土を含む褐灰色シルト、4層はロームブロックを多く含む暗褐色シルトである。1層は自然堆積土、2～3層は人為的埋土と考えられる。遺物は出土していない。

【SK7 土坑】(第54・55図) 平面形は長軸176cm、短軸74cmの不整形である。深さ39cmで断面形は下部がU字形で上部が朝顔形に開く。堆積土は4層に細分される。1層は黒色シルト、2層は焼土ブロックを多量に含む黒褐色シルト、3層は黒色シルト、4層は焼土粒を多量に含む黒褐色シルトである。遺物は堆積土より土師器甕(第55図6)が出土した。内外面にナデ調整を施し、底部に木葉痕が見られる。

【SK9 土坑】(第54図) SK4土坑・SX8性格不明遺構より古い。平面形は長軸112cm、短軸26cmの隅丸長方形を呈する。断面形は深さ45cmの逆台形で、底



写真114 戸ノ内SE3井戸跡(南から) 写真115 戸ノ内SE3井戸跡断面(南から) 写真116 戸ノ内SE3遺物出土状況(南から)



写真117 戸ノ内SK2土坑断面(南から) 写真118 戸ノ内SK5土坑断面(南から) 写真119 戸ノ内SK7土坑断面(南から)



写真120 戸ノ内SK9土坑断面(北から) 写真121 戸ノ内SX4性格不明遺構断面(西から) 写真122 戸ノ内SX4底面・掘方埋土断面(西から)



面は平坦である。堆積土はロームブロックを多量に含む黒褐色シルトで、人為的埋土と考えられる。遺物は出土していない。

【SX4 性格不明遺構】(第54図) SK9土坑・SX8性格不明遺構より新しい。平面形は長軸97cm、短軸90cmの方形を呈する。断面形は深さ26cmの逆台形を呈する。堆積土は2層に細分される。1層は黒褐色シルト、2層は白色粘土を含む暗褐色シルトで、1層は自然堆積土、2層は人為的埋土と考えられる。2層上面はやや硬化しており、底面を構築した掘方埋土と

考えられる。遺物は堆積土1層より外面ケズリ調整、内面ナデ調整の土師器甕の破片が出土している。

【SX8 性格不明遺構】(第54図) SK9土坑より新しく、SK4・SK5土坑より古い。平面形は長軸332cm、短軸182cmの不整形である。断面形は深さ4cmの皿形を呈し、底面は平坦である。堆積土は2層に細分される。1層は焼土粒・炭化物粒を多量に含む暗赤褐色シルト、2層は黒色シルトの均質土で硬化が著しい。2層は貼り床状の硬化層、1層は床面機能時の堆積土と考えられる。遺物は出土していない。



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SE3	堆積土2層上面	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(底付近) 手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切り→無調整 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 内面磨減顕著	(13.7)	(6.6)	4.8	1/3	UC09-3
2	SE3	堆積土2層上面	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体下) 手持ちヘラケズリ、(底) 回転糸切り→無調整 内面：(底) 放射状ヘラミガキ→(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理 内面体部焼けほじけ、外面体上半部黒色付着物、外面体下半部二次被熱による変色	13.9	5.5	4.4	略完形	UC09-8
3	遺構外	遺構確認面	ロクロ土師器	坏	外面：ロクロナデ→(体) 手持ちヘラケズリ 内面：(体) 横方向ヘラミガキ→黒色処理	(13.5)	-	4.0	一部	UC09-6
4	遺構外	遺構確認面	土師器	甕	内外面：(胴) ヘラナデ→(口) ヨコナデ→(胴) ナデ	-	-	(12.4)	一部	UC09-9
5	遺構外	遺構確認面	土師器	甕	内外面：(口) ヨコナデ、(胴) ヘラナデ	-	-	-	口縁部	UC09-10
6	SK7	堆積土	土師器	甕	外面：(胴) ナデ、(底) 木葉痕 内面：(胴) ナデ	-	-	-	底部	UC09-13
7	遺構外	遺構確認面	須恵器	坏	外面：(底) ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	-	-	-	一部	UC09-11
8	遺構外	遺構確認面	縄文土器	深鉢	外面：縄文 (RL)	-	-	-	一部	UC09-12
9	表採	-	縄文土器	深鉢	外面：沈線文、擦糸文 (L)	-	-	-	一部	UC09-14

第55図 戸ノ内遺跡SE3井戸跡、SK7土坑、遺構外出土遺物



写真 123 戸ノ内遺跡 SX8 性格不明遺構断面 (南から)

【遺構外出土遺物】(第 55 図) 遺構確認面よりロクロ土師器坏(第 55 図 3)、土師器甕(第 55 図 4・5)、須恵器坏(第 55 図 7)、縄文土器深鉢(第 55 図 8)、灰釉陶器皿?が出土した。また縄文土器深鉢(第 55 図 9)が表面採集された。ロクロ土師器坏(第 55 図 3)はロクロ整形の後、外面体部に手持ちヘラケズリ調整、内面に黒色処理を施す。土師器甕(第 55 図 4・5)は内外面とも胴部にヘラナデ調整、口縁部にヨコナデ調整を施す。須恵器坏(第 55 図 7)は外底面に回転ヘラケズリ調整を施す。縄文土器深鉢(第 55 図 8)は外面に縄文(RL)を施す。第 55 図 9 は外面に沈線文、撚糸文(L)を施す。

③遺物の特徴と編年的位置づけ ややまとまった出土状況が見られた SI1 竪穴住居跡および SE3 井戸跡出土遺物について検討を加える。

SI1 竪穴住居跡では、床面直上からロクロ土師器坏(第 53 図 2・4)、カマド崩落土からロクロ土師器坏(第 53 図 1・5)、堆積土からロクロ土師器坏(第 53 図 3)と鉄釘(第 53 図 6)が出土した。ロクロ土師器坏はいずれもロクロ成形の後、内面に黒色処理を施す。底部の切り離し方法が分かるものはいずれも糸切りで、切り離し後は外底面から体下部に手持ちヘラケズリによる再調整を施す。

SE3 井戸跡では、堆積土 2 層上面からロクロ土師器坏(第 55 図 1・2)が出土した。いずれもロクロ整形の後、内面に黒色処理を施す。底部の切り離し方法はいずれも回転糸切りである。底部の切り離し後は外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施し、外底面は再調整を施さない。

これらのロクロ土師器は表杉ノ入式(氏家 1957・1967)の範疇に含まれる。ほぼ平安時代全般に対応するとされた表杉ノ入式期は、多賀城跡出土土器などをもとに須恵器・赤焼土器を含む坏類の形態と製作技法から細分が行なわれ、時期が降るほど口径に占める底径の比率(底径口径比)が小さくなる傾向や、ロク



写真 124 戸ノ内遺跡 SI1 竪穴住居跡・SE3 井戸跡出土土器  
口台からの切り離し後に再調整が行なわれなくなる傾向が明らかにされた(白鳥 1980 など)。

SI1 竪穴住居跡出土のロクロ土師器坏は、底部の切り離しがわかるものでは全て糸切りで、切り離し後に手持ちヘラケズリによる再調整を施す。底径口径比は 0.41 ~ 0.55 である。SE3 井戸跡出土のロクロ土師器坏は、回転糸切りによる切り離し後に再調整を施さないが、外面の体下部に手持ちヘラケズリ調整を施す。底径口径比は 0.40 ~ 0.48 である。

このような特徴を持つ土器群は、蔵王町東山遺跡出土土器(宮城県教育委員会 1981)、多賀城市市川橋遺跡 SX1351D 期 3 層出土土器・SD1522 出土土器(多賀城市埋蔵文化財センター 2003)、蔵王町十郎田遺跡第 5 群土器(町 13 集)、蔵王町前戸内遺跡第 2 群土器(町 16 集)に類例がみられ、年代は 9 世紀前葉~中葉頃に位置づけられている。

以上のことから、SI1 竪穴住居跡・SE3 井戸跡出土土器の年代は 9 世紀前葉~中葉頃と考えられる。なお、製作技法と底径口径比から見ると SI1 竪穴住居跡出土のものよりも SE3 井戸跡出土のものが後出的な様相を示すが、資料数が多くないことから現段階では上記の年代幅の中に収まるものとして捉えておきたい。

④遺構の特徴と性格 確認した遺構は竪穴住居跡 1 軒、井戸跡 1 基、土坑 4 基、性格不明遺構 2 基である。このうち SI1 竪穴住居跡と SE3 井戸跡については、出土遺物の年代から 9 世紀前葉~中葉頃に機能したものと考えられる。

SI1 竪穴住居跡は一般的な規模の住居で支柱穴はなく、東壁にカマドを付設する。床面にはカマド右側の住居南東隅に貯蔵穴とみられる土坑 1 基と、対角の住居北西隅に浅い土坑 1 基があり、これを連結するように住居対角線上に小溝が掘られている。蔵王町十郎田遺跡 SI209・SI217・SI218・SI221 竪穴住居跡(町 13 集、8 世紀末~9 世紀初頭)では、住居床面から屋外へ延びる外延溝が確認され、排水の機能が想定さ

れるが、本遺跡 SI1 竪穴住居跡の小溝は住居内で完結していることから、排水とは異なる機能を持つ可能性が考えられる。

SE3 井戸跡は比較的小規模な素掘りの井戸と考えられる。廃絶後に中ほどまで人為的に埋め戻され、その上面でロクロ土師器坏2点が出土した。蔵王町西屋敷遺跡 SE45 井戸跡（町 15 集、9 世紀中頃）では、廃絶後の人為的埋土下部から重ねて伏せられた完形のロクロ土師器・須恵器坏と、その直上から大型の礫石器（石皿）が、井戸底面からつけ木2点と桃核が出土し、井戸廃絶時における祭祀行為と考えられる。本遺跡 SE3 井戸跡についても遺物の出土状況に共通性があり、祭祀行為が行われた可能性が考えられる。

これ以外の遺構については機能時期・性格ともに不明な点が多いが、SX8 性格不明遺構は貼り床状の硬化面を持ち、SX4 性格不明遺構は底面に粘土が貼られている。これらは重複してつくられており、同時に機能した可能性がある。今回の調査区周辺には過去に土間

と囲炉裏のある住居が建てられていたとの土地所有者の証言から、これらは比較的新しい住居に関連する遺構の可能性が考えられる。

⑤まとめ 平安時代前葉（9 世紀前葉～中葉）の竪穴住居跡 1 軒、井戸跡 1 基を確認した。住居跡からは「仲」などの墨書土器が出土している。本遺跡では今回調査地点の北西約 100m の地点でも同時期の住居跡 1 軒を確認しており、「善」の墨書土器も出土している（町 8 集）。住居の方位や構造、カマド付設位置などに共通性があり、比較的近接した時期の集落が丘陵部に展開していると推定される。また、本遺跡の南西約 600m に位置する前戸内遺跡（町 16 集、9 世紀前葉～中葉）では、掘立柱建物跡などが配置された有力者居宅を含む集落跡が確認され、多数の墨書土器が出土している。本遺跡においても複数の墨書土器を保有することなどから、前戸内遺跡の集落と関係の深い集落が形成されていた可能性が考えられる。

## 2. 愛宕山遺跡

### 調査要項（第 1 表 69）

遺跡名：愛宕山遺跡（遺跡登録番号 05012）

調査原因：愛宕神社神楽殿再建計画（震災復興事業）

調査箇所：蔵王町大字平沢字立目場 81

調査期間：平成 24 年 10 月 18 日（確認調査）

平成 24 年 10 月 18 日～ 19 日（本調査）

調査面積：45.0m<sup>2</sup>

調査主体：蔵王町教育委員会

調査員：佐藤洋一・鈴木雅

### 遺跡の概要

円田盆地と村田盆地を画する愛宕山丘陵の尾根上に立地し、弥生・古墳時代の散布地として登録されている。本遺跡中央部の標高は約 169m で、平地との比高差は西側の円田盆地から約 90m、東側の村田盆地から約 140m を測る高所に立地している。周辺には同一尾根線の上に古峯神社古墳、夕向原古墳群が分布する。本遺跡では平成 8 年に藤沢敦氏らによる測量調査が行なわれ、古墳の可能性が検討されたが、古墳に関わる地形は確認されていない（藤沢 2000）。

### 調査に至る経緯

町指定文化財「榊流東根神楽」の奉納神社である愛宕神社では、例年 7 月に神楽の奉納神事が執り行われてきたが、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災で神楽殿が全壊した。このため、同位置での再



第 56 図 愛宕山遺跡調査地点位置図

建が計画されたが、神社境内は愛宕山遺跡の範囲に含まれていたことから、愛宕神社神楽殿再建計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が平成 24 年 9 月 21 日付けで愛宕神社氏子総代より蔵王町教育委員会経由で宮城県教育委員会へ提出された。県教育委員会からは 10 月 10 日付けで確認調査を実施する必要があるとの回答書が出された。これを受けて町教育委員会が 10 月 18 日に確認調査を実施したところ、複数の土坑状の掘り込みなどが確認された。これについて県教育委員会・町教育委員会・事業主で対応を協議した結果、計画建物は地域の伝統文化を継承する上で必



第57図 愛宕山遺跡調査区配置図（藤沢2000「愛宕山遺跡測量図」に加筆）



写真125 愛宕山遺跡作業風景（西から）



写真126 愛宕山遺跡作業風景（東から）



写真127 愛宕山遺跡調査前現況（南から）



写真128 愛宕山遺跡調査前現況（東から）



写真129 愛宕山遺跡遺構精査状況（西から）



写真130 愛宕山遺跡遺構確認状況（西から）



写真131 愛宕山遺跡 SK5 土坑断面（北から）



写真132 愛宕山遺跡 SK1 土坑（西から） 写真133 愛宕山遺跡 SK1 土坑断面（西から） 写真134 愛宕山 SK1 土坑遺物出土状況（西から）



写真135 愛宕山遺跡 SK3 土坑（北から）

写真136 愛宕山遺跡 SK3・SK6 土坑断面（東から）

要不可欠であり、建物基礎による遺構の破壊も限定的であることから、建築主の協力を得て町教育委員会が緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることで合意した。なお、本計画には復興事業の取り扱いが適用され、緊急発掘調査における遺構精査範囲は工事で直接的に遺構が破壊される範囲に留めることとされた。発掘調査は10月18日から19日までの2日間を要した。

### 調査の成果

①調査区周辺の地形 東西約40m、南北約20mほどの平坦面が愛宕神社の境内地となっており、調査区はその西部に位置する。平坦面の北・南辺に土塁状の高まりが見られ、境内地の造成に伴うものとみられる。調査区の表土除去を行なったところ、東部ではローム層の削平面、西部では漸移層が露出し、調査区内では最大で厚さ40cm程度の切土を伴う造成が行われていることを確認した。

②発見された遺構と遺物 遺構は土坑7基を確認した。

【SK1 土坑】（第58・59図） 調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形は長軸54cm以上、短軸41cmの長楕円形で、横断面形は深さ18cmのU字形を呈する。堆積土は2層に細分される。1層は暗褐色シルト、2層はローム・炭化物粒を含む暗褐色シルトで、いずれも自然堆積土と考えられる。遺物は堆積土中から土師器甕（第59図8）が出土した。球胴状を呈し、胴部外面にハケメ調整を施す。

【SK2 土坑】（第58図） 一部を精査した。平面形は長軸56cm、短軸52cmの不整楕円形で、横断面形は

深さ46cmの逆台形を呈する。堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SK3 土坑】（第58図） 一部を精査した。SK6土坑より古い。平面形は長軸196cm、短軸151cmの不整楕円形を呈する。断面形は深さ84cmで壁面が内傾する袋状を呈し、底面は平坦で中央部が浅く窪む。堆積土は9層に細分される。ロームブロック・粒を多く含む褐色・暗褐色・シルト、褐色・暗褐色・黒褐色粘質シルトで、1～3層は人為的埋土、4～7層は崩落土、8・9層は自然堆積土と考えられる。遺物はSK3またはSK6土坑の堆積土から土師器甕、弥生土器の小片が出土した。土師器甕は外面にハケメ調整がみられる。

【SK4 土坑】（第58図） 平面形は長軸52cm、短軸39cmの楕円形で、断面形は深さ35cmのU字形を呈する。堆積土はローム・炭化物粒を含む暗褐色シルトで、自然堆積土と考えられる。遺物は弥生土器の小片が出土した。

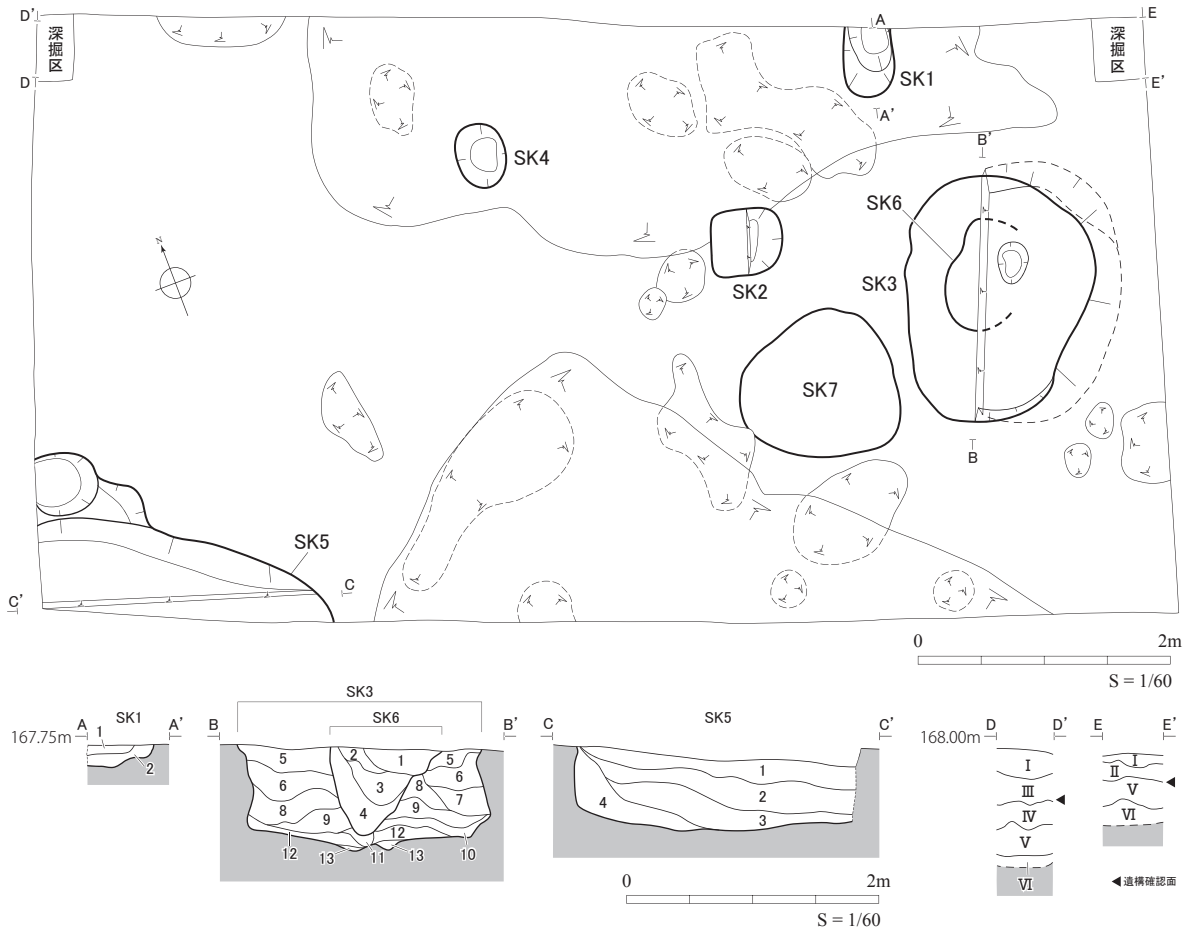
【SK5 土坑】（第58・59図） 調査区南西隅で一部のみ確認した。平面形は長軸232cm以上、短軸74cm以上を測る。断面形は深さ51cmの箱形を呈する。堆積土は4層に細分される。シルト・ロームブロックを含む褐色・暗褐色シルトで、1～3層は人為的埋土、4層は自然堆積土と考えられる。遺物は堆積土から土師器環（第59図1）、甕（第59図7）、弥生土器の小片が出土した。土師器環は内外面にヘラミガキ調整と赤彩を施す。甕は外面にハケメ調整を施す。

【SK6 土坑】（第58図） 一部を精査した。SK3土坑よ

り新しい。SK3土坑の断面観察で確認したため全体の形状は不明だが、平面形は長軸89cm、短軸27cm以上の楕円形で、深さ53cmの楕円状を呈する。堆積土は4層に細分される。シルト・ロームブロックを多く含む黒褐色・暗褐色シルトで、いずれも人為的埋土と考えられる。遺物はSK3土坑で述べた通りである。

【SK7土坑】(第58図) 未精査である。平面形は長軸125cm、短軸118cmの楕円形を呈する。確認面の堆積土はロームブロックを含む暗褐色シルトである。

【その他の出土遺物】(第59・60図) 遺構確認面・表土・攪乱層から土師器坏(第59図2・3)・高坏(第59図4~6)、弥生土器甕(第60図1・3・4・6)・壺(第60図5)・中型品(第60図2)、珪質頁岩製剥片、一銭硬貨(大正十年)が出土した。土師器坏(第59図2・3)は内外面にヘラミガキ調整を施す。高坏はいずれも中空棒状の脚部を持つ。第59図4は脚裾部が外反しながら開くもので、外面にヘラミガキ調整と赤彩を施す。第59図5・6は脚下部が屈曲して外方に延び



SK1 土坑 A-A'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/3 黒褐	シルト	炭化物・焼土粒/少量
2	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ローム・炭化物粒

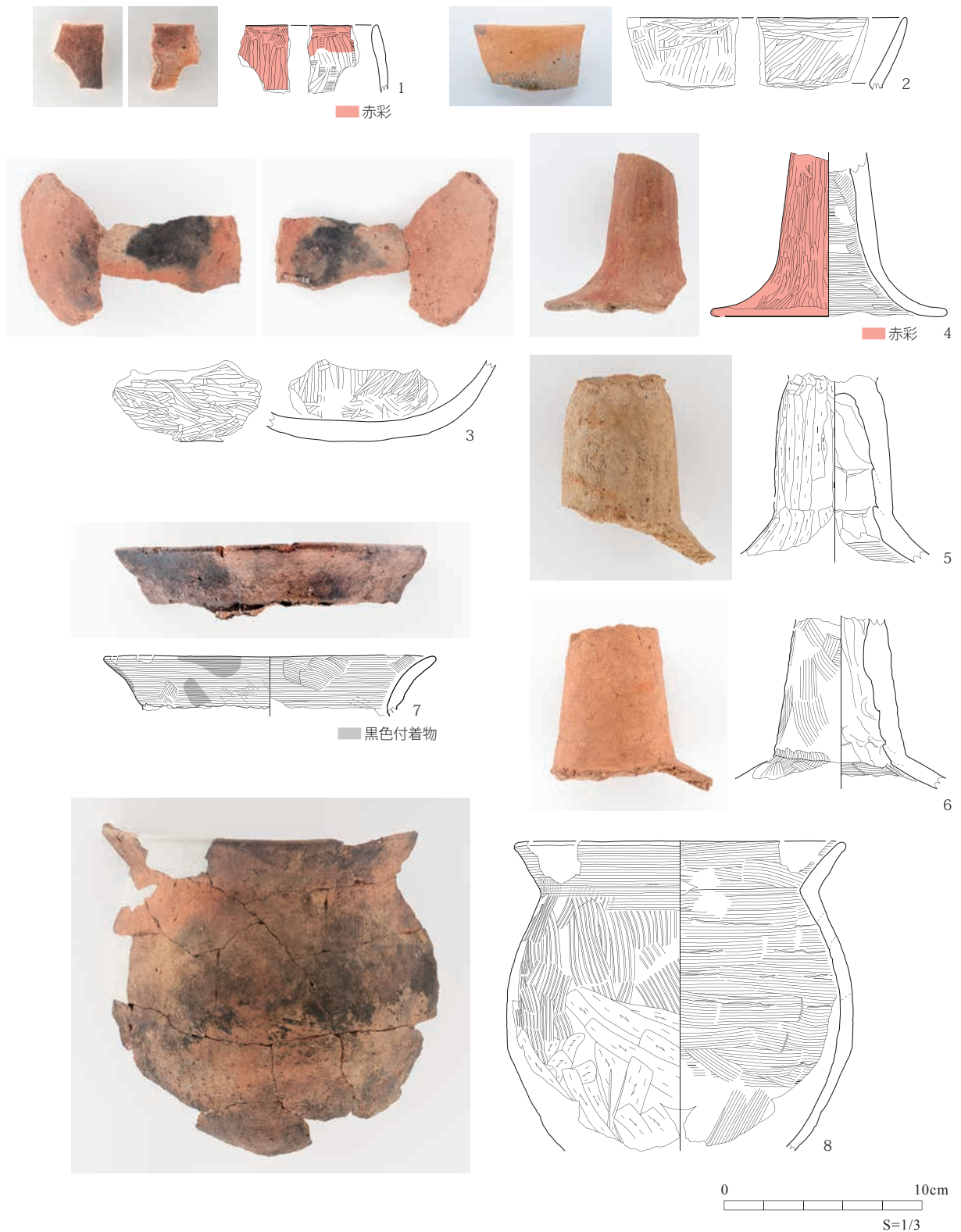
SK2 土坑			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/3 暗褐	シルト	黄褐色ローム・炭化物粒

SK5 土坑 C-C'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR3/4 暗褐	シルト	10YR3/3 暗褐色シルト粒/多量(人為)
2	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒/多量(人為)
3	10YR4/6 褐	シルト	黄褐色ロームブロック(人為)
4	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ロームブロック/少量

基本層序 D-D'E'E'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR3/4 暗褐	シルト	(表土層) 黄褐色ローム粒/微量
2	7.5YR4/6 褐	シルト	(盛土層) 10YR3/4 暗褐色シルト粒/多量
3	7.5YR3/4 暗褐	シルト	(漸移層上部) 10YR3/4 暗褐色シルトブロック/多量
4	10YR4/6 褐	シルト	(漸移層下部) 黄褐色ロームブロック/多量
5	10YR4/6 褐	シルト	(ローム層) 黄褐色ロームブロック/主体
6	7.5YR5/8 明褐	シルト	(ローム層) 黄褐色ローム/主体

SK3・SK6 土坑 B-B'			
No.	土色	土性	含有物・所見
1	10YR2/2 黒褐	シルト	10YR2/3 黒褐色シルト・黄褐色ロームブロック/多量 炭化物粒/微量(SK6堆・人為)
2	10YR2/3 黒褐	シルト	10YR3/4 暗褐色シルトブロック/多量 炭化物粒/微量(SK6堆・人為)
3	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒/多量 黄褐色ロームブロック/少量(SK6堆・人為)
4	10YR2/3 黒褐	シルト	黄褐色ロームブロック・粒/多量 炭化物粒/微量(SK6堆・人為)
5	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒/多量 黄褐色ロームブロック/少量(SK3堆・人為)
6	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色ローム粒/極めて多量 黄褐色ロームブロック/多量(SK3堆・人為)
7	10YR3/4 暗褐	シルト	黄褐色ローム粒/極めて多量 黄褐色ロームブロック/多量(SK3堆・人為)
8	10YR4/6 褐	シルト	黄褐色ロームブロック/極めて多量(SK3堆・崩)
9	10YR4/6 褐	シルト	黄褐色ロームブロック/主体(SK3堆・崩)
10	10YR4/6 褐	シルト	10YR4/3にふい黄褐色シルト粒/極めて多量(SK3堆・崩)
11	10YR4/4 褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック/多量(SK3堆・崩)
12	10YR2/3 黒褐	粘質シルト	黄褐色ローム粒/多量(SK3堆)
13	10YR3/4 暗褐	粘質シルト	黄褐色ロームブロック/多量(SK3堆)

第58図 愛宕山遺跡遺構配置図



No.	遺構名	層位	種類	器種	器面調整・特徴	法量 (cm)			残存	登録
						口径	底径	器高		
1	SK5	堆積土	土師器	坏	外面：ヨコナデ→ミガキ 内面：ヨコナデ→ヘラミガキ 内外面に赤彩 塩釜式 4c	-	-	(3.4)	口~体部	AT12-3
2	遺構外	遺構確認面	土師器	坏	外面：ミガキ、被熱により焼けはじけ 内面：ミガキ 塩釜式 4c	-	-	(3.6)	口~体部	AT12-9
3	遺構外	遺構確認面	土師器	坏	内外面：ヘラミガキ 南小泉式 5c <sub>カ</sub>	-	-	(4.2)	体~底部	AT12-11
4	遺構外	遺構確認面	土師器	高坏	外面：ヘラミガキ、赤彩、磨滅 内面：ナデ、(裾部) ヨコナデ、一部焼けはじけ 塩釜式 4c	-	(12.0)	(8.4)		AT12-14
5	遺構外	遺構確認面	土師器	高坏	外面：(柱状部) ナデ→ケズリ、(裾部) ケズリ→ヘラミガキ 内面：(柱状部) ユビナデ、(裾部) ヨコナデ 南小泉式 5c	-	-	(9.6)	脚部	AT12-13
6	遺構外	遺構確認面	土師器	高坏	外面：ナデ、ヘラナデ 内面：(柱状) 積み痕・シボリメ、(裾部) ヨコナデ 南小泉式 5c	-	-	(8.8)	脚部	AT12-12
7	SK5	堆積土	土師器	甗	外面：ハケメ→ヨコナデ、ヘラナデ 内面：ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ 外面黒色付着物	(16.9)	-	(7.0)	口~頸部	AT12-2
8	SK1	堆積土	土師器	甗	外面：(胴) ハケメ→(口) ヨコナデ、(胴下) ヘラケズリ 内面：ヘラナデ、輪積み痕顕著 外面炭化物付着	(16.8)	-	(15.7)	1/3	AT12-1

第59図 愛宕山遺跡出土遺物 (1)

るもので、外面の調整はヘラケズリ調整とヘラナデ調整である。弥生土器甕のうち第60図3・4は同一個体とみられ、胴部の外面に縄文(RL)と赤彩を施す。第60図1は口縁部外面に隆帯を持ち、隆帯上に斜位の刻目の後で縄文(RL)を施文する。第60図6は胴部外面に縄文(RL)を施文する。壺(第60図5)は複合口縁壺の頸部破片で、口縁部に縄文(RL→LR)を施文する。中型品(第60図2)は平行沈線による連弧文・横線文を施文する。

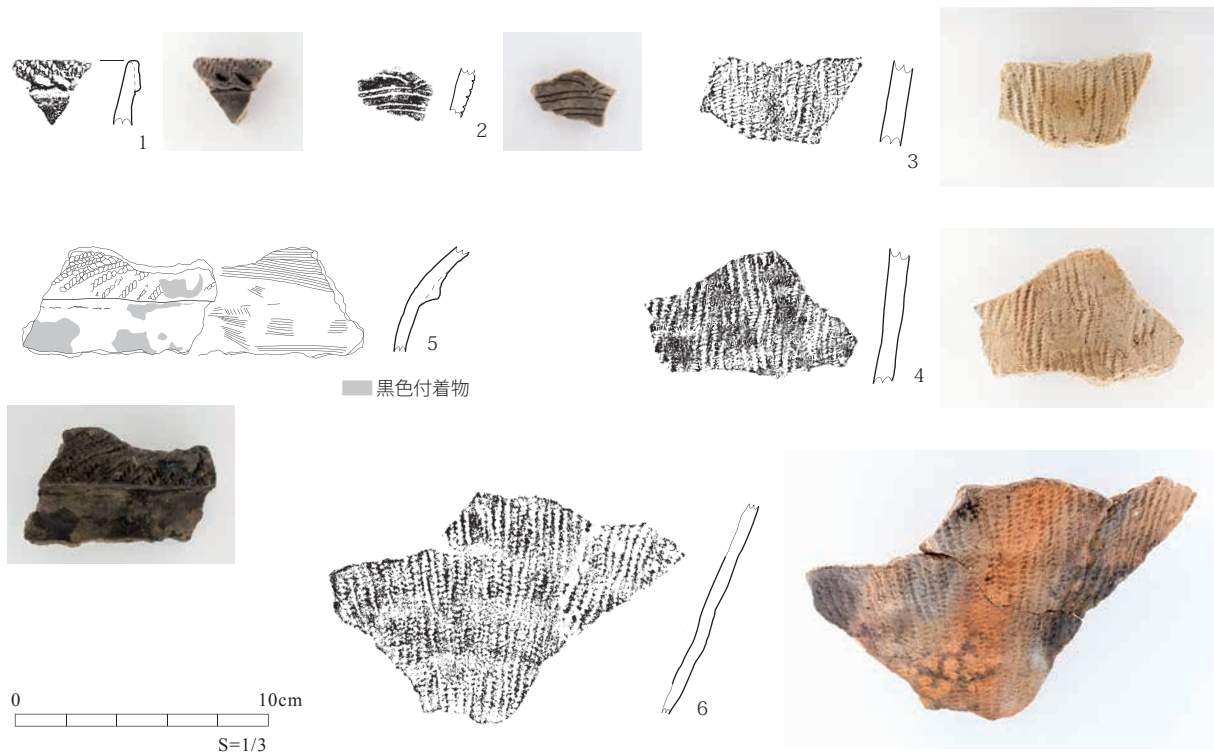
③遺物の特徴と編年的位置づけ 出土遺物は土師器坏(第59図1~3)・高坏(第59図4~6)・甕(第59図7・8)、弥生土器甕(第60図1・3・4・6)・壺(第60図5)、中型品(第60図2)などがある。このうち、遺構から出土したものには土師器坏(SK5:第59図1)、甕(SK1:第59図8、SK5:第59図7)などがあるが、大部分は遺構確認面および攪乱層からの出土である。

土師器・弥生土器とも大半が破片資料のため特徴が明らかなものは少ないが、土師器は古墳時代前期の塩

釜式(第59図1・2・4)、中期の南小泉式(第59図3・5・6)、弥生土器は弥生時代中期の十三塚式(第60図2)、後期の天王山式または踏瀬大山~十王台式期(第60図1・5)に概ね比定できると考えられる。

④遺構の特徴と性格 確認した遺構は土坑7基である。このうちSK1・SK5土坑は出土遺物の年代から古墳時代に機能したものと考えられるが、部分的な調査のため性格は不明である。SK3土坑は壁面が内傾する袋状土坑で、底面中央に浅い窪みがみられる。こうした形態の土坑は縄文時代に多く見られ貯蔵穴としての機能が考えられているものと類似しており、同様の機能が想定される。遺物はSK3・SK6土坑の掘り下げで弥生土器・土師器の破片が出土しており、弥生時代以降に機能したものと考えられる。

④まとめ 弥生時代以降の袋状土坑、古墳時代の土坑などを確認した。袋状土坑はその形態から貯蔵穴の可能性が想定され、居住に伴う生活痕跡と考えられる。古墳の存在を示す遺構は確認されなかった。



No.	遺構	層位	種類	器種	器面調整・特徴	器厚 (cm)	残存	登録
1	攪乱	-	弥生土器	甕	隆帯→斜位刻目文→縄文(RL)、隆帯下側ナデツケ 天王山式~弥生後期後半	0.6	口縁部	AT12-7
2	遺構外	遺構確認面	弥生土器	中型品	平行沈線による連弧文・横線文 十三塚式	0.6	一部	AT12-15
3	攪乱	-	弥生土器	甕	縄文(RL) 登録No6と同一個体。	0.8	胴部	AT12-5
4	攪乱	-	弥生土器	甕	縄文(RL)、赤彩 登録No5と同一個体。	0.8	胴部	AT12-6
5	遺構外	遺構確認面	弥生土器	壺	縄文(RL→LR) 天王山式~弥生後期後半	0.5	口~頸部	AT12-10
6	攪乱	-	弥生土器	甕	縄文(RL) 内外面被熱による焼けはじけ	0.6	胴部	AT12-8

第60図 愛宕山遺跡出土遺物(2)



## 第3章 総括

1. 本書では、平成18～24年度にかけて実施した埋蔵文化財保存協議の概要と、これに伴って実施した発掘調査のうち、①各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（8遺跡9件）、②小規模開発事業に伴う遺跡の記録保存を目的として実施した緊急発掘調査（2遺跡2件）について報告した。
2. 遺構確認調査では、下記のことが明らかになった。
  - (1) 原遺跡
 

コミュニティーセンター建築計画地内で土坑・柱穴を確認した。遺物は出土していない。
  - (2) 鍛冶沢遺跡
    - ①広域農道計画路線内で竪穴住居跡・土坑・溝跡など多数の遺構を確認した。遺構の分布は濃密である。遺物は縄文土器、土製円盤、剥片石器、磨製石斧、石棒、敲石などが出土した。縄文土器は縄文時代後期～晩期中葉頃のものが主体である。
    - ②農道青ノキ線幅拓計画範囲内では遺構は確認されなかったが、耕作土中から縄文土器、ミニチュア土器、剥片石器、磨石などが出土した。縄文土器は縄文時代後期のものが主体である。
  - (3) 台遺跡
 

藪川左岸の築堤計画地内で竪穴住居跡とみられる遺構プランを確認した。遺構プランは重複が著しい。遺物は土師器、縄文土器、石製模造品などが出土した。土師器は古墳時代中・後期のものがある。
  - (4) 西浦B遺跡
 

店舗建築計画地内で土坑・溝跡・柱穴を確認した。遺物は出土していない。
  - (5) 谷地遺跡
 

消防庁舎建設用地造成計画地内で多数の土坑・溝跡・土器埋設遺構・焼土遺構・柱穴のほか、竪穴住居跡とみられる遺構プラン、広範囲に分布する遺物包含層を確認した。遺構の分布は極めて濃密である。遺物は縄文土器、剥片石器、礫石器、石製品が整理箱7箱分出土した。縄文土器は縄文時代前期末～中期前葉のものが主体である。
  - (6) 円田入B遺跡
 

個人住宅建築計画地内で土器埋設遺構・土坑を確認した。遺物は縄文土器、剥片が出土した。縄文土器は縄文時代後期のものとみられる。
  - (7) 寺門前遺跡
 

社会福祉施設建設計画地内で土坑・溝跡・柱穴など多数の遺構を確認した。遺構の分布は濃密で、敷地南側と北側にまとまりが見られた。遺物は縄文土器、剥片石器、磨製石斧、礫石器、陶器が出土した。縄文土器は縄文時代中期前葉のものが主体である。
  - (8) 諏訪館前遺跡隣接地
 

駐車場造成計画地内で土坑・柱穴を確認した。遺物は土師器、陶器播鉢が出土した。土師器は古墳時代中期のものと見られる。
  - (9) 三の輪遺跡
 

個人住宅建築計画地内で近世後半頃の盛土整地層と柱穴を確認した。遺物は近世陶磁器、石皿が出土した。近世陶磁器は近世後半頃のものが主体である。
3. 緊急発掘調査では、下記のことが明らかになった。
  - (1) 戸ノ内遺跡
    - ①平安時代前葉（9世紀前葉～中葉）の竪穴住居跡1軒、井戸跡1基などを確認した。遺物は竪穴住居跡、井戸跡などからロクロ土師器、須恵器、縄文土器、鉄釘などが出土した。ロクロ土師器には「仲」などの墨書土器がある。
    - ②本遺跡にごく近い前戸内遺跡では、同時期の有力者居宅を含む集落跡を確認しており、多数の墨書土器が出土している。今回確認した遺構は同時期の集落の一部と考えられ、前戸内遺跡の集落と関係が推定される。
  - (2) 愛宕山遺跡
    - ①弥生時代以降の袋状土坑1基、古墳時代の土坑2基などを確認した。遺物は土坑などから土師器、弥生土器が出土した。土師器は古墳時代前・中期、弥生土器は弥生時代中・後期のものがある。
    - ②袋状土坑はその形態から貯蔵穴とみられ、居住に伴う生活痕跡と考えられる。

## 引用・参考文献

- 伊東信雄 1955 「各地域の弥生式土器—東北—」『日本考古学講座 4』杉原莊介編 河出書房
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史 14 東北大学史学会
- 氏家和典 1967 「陸奥国分寺跡出土の丸底環をめぐって」『山形県の考古と歴史 柏倉亮吉教授還暦記念論文集』山教史学会
- 風間観静 1983 「仙台藩の街道」『宮城の研究 5 近世編Ⅲ』渡辺信夫編 清文堂
- 刈田郡教育会 1928 『刈田郡誌』宮城県刈田郡教育会編
- 蔵王町史編纂委員会 1987 『蔵王町史 資料編Ⅰ』
- 蔵王町史編纂委員会 1989 『蔵王町史 資料編Ⅱ』
- 蔵王町史編纂委員会 1993 『蔵王町史 民俗生活編』
- 蔵王町史編纂委員会 1994 『蔵王町史 通史編』
- 佐藤伝蔵 1904 「日本石器時代地名表」東京人類学雑誌 第5版 223
- 白鳥良一 1980 「多賀城跡出土土器の変遷」研究紀要 VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 多賀城市埋蔵文化財調査センター 2003 『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ—』多賀城市文化財調査報告書 70
- 林謙作 1962 「東北地方早期縄文文化の展望」考古学研究 9-2 考古学研究会
- 藤沢敦 2000 「阿武隈川下流域の前方後円墳（その1）」宮城考古学 2 宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 1981 「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 81
- 宮城県教育委員会 1990 「鍛冶沢遺跡」『大貫館山館跡ほか』宮城県文化財調査報告書 137
- 宮城県教育委員会 1992 「諏訪館前遺跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書 146
- 宮城県教育委員会 2003 「十郎田遺跡ほか」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 195
- 宮城県教育委員会 2010 『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書 222
- 宮城県教育委員会 2011 『観音堂山遺跡』宮城県文化財調査報告書 227

## 蔵王町文化財調査報告書

- 蔵王町文化財調査報告書 (1990) 『堀ノ内遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 1 (1997) 『堀の内遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 2 (2002) 『諏訪館前遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 3 (2005) 『都遺跡ほか（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）』
- 蔵王町文化財調査報告書 4 (2006) 『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
- 蔵王町文化財調査報告書 5 (2007) 『中沢 A 遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 6 (2008) 『六角遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 8 (2009) 『戸ノ内遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 9 (2009) 『青竹遺跡』
- 蔵王町文化財調査報告書 10 (2011) 『西浦 B 遺跡—商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 11 (2011) 『窪田遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 12 (2011) 『小原遺跡—特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 13 (2011) 『十郎田遺跡 1—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 14 (2011) 『十郎田遺跡 2—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—  
SE66 井戸跡出土木製遺物編 附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』
- 蔵王町文化財調査報告書 15 (2012) 『西屋敷遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 16 (2013) 『前戸内遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』
- 蔵王町文化財調査報告書 17 (2014) 『磯ヶ坂遺跡—経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査—』

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ざおうちょうないせきはつくつちょうさほうこくしょ 1							
書名	蔵王町内遺跡発掘調査報告書 1							
副書名	各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査（平成 18～24 年度）							
巻・次								
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 18 集							
編著者名	鈴木 雅 ・ 鈴木 和美							
編集機関	蔵王町教育委員会							
所在地	〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10 TEL 0224-33-3008 FAX 0224-33-3831							
発行年月日	西暦 2014 年（平成 26 年）3 月 25 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
はらいせき 原遺跡	蔵王町大字小 村崎字戸ノ内 32-2	43010	05111	38° 07' 40"	140° 41' 32"	2006.6.28 } 2006.6.29	81.6㎡	コミュニティー センター建築計 画（確認調査）
かじさわいせき 鍛冶沢遺跡	蔵王町大字曲 竹字鍛冶沢地 内	43010	05020	38° 05' 16"	140° 38' 34"	2006.06.28 } 2006.07.13 2006.12.19 } 2006.12.22	909.6㎡	広域農道整備事 業計画（仙南 2 期地区、確認調 査）
				38° 05' 18"	140° 38' 29"	2010.04.19 } 2010.04.20		
だいいせき 台遺跡	蔵王町大字塩 沢字神前地内	43010	05009	38° 05' 58"	140° 40' 52"	2007.03.06 } 2007.09.04	130.0㎡	蔵川局部改良事 業計画（確認調 査）
にしうらBいせき 西浦 B 遺跡	蔵王町大字円 田字西浦北 51-2	43010	05160	38° 05' 58"	140° 39' 16"	2009.11.12	105.0㎡	店舗建築計画 （確認調査）
やちいせき 谷地遺跡	蔵王町大字円 田字谷地 76-2	43010	05021	38° 06' 00"	140° 39' 05"	2011.02.22 } 2011.03.01	410.0㎡	消防庁舎建設用 地造成計画（確 認調査）
えんだいりBいせき 円田入 B 遺跡	蔵王町大字円 田字清上 123-4	43010	05146	38° 06' 45"	140° 39' 14"	2011.06.08	162.4㎡	個人住宅建築計 画（震災復興事 業、確認調査）
てらもんまえいせき 寺門前遺跡	蔵王町大字円 田字寺門前 51-1 外	43010	05161	38° 06' 04"	140° 39' 04"	2011.06.29 } 2011.07.02	432.8㎡	社会福祉協議会 施設建設計画 （確認調査）
すわだてまえいせき 諏訪館前遺跡 隣接地	蔵王町大字平 沢字上ノ台 58	43010	05014	38° 07' 20"	140° 40' 50"	2011.01.17	108.0㎡	清立寺駐車場造 成計画（確認調 査）
みのわいせき 三の輪遺跡	蔵王町大字小 村崎字三の輪 53-1	43010	05194	38° 07' 43"	140° 41' 49"	2011.04.21	43.4.0㎡	個人住宅建築計 画（震災復興事 業、確認調査）
とのうちいせき 戸ノ内遺跡	蔵王町大字小 村崎字戸ノ内 中 94	43010	05197	38° 07' 42"	140° 41' 26"	2009.06.16 } 2009.06.25	85.5㎡	個人住宅建築計 画（本発掘調査）
あたごやまいせき 愛宕山遺跡	蔵王町大字平 沢字立目場 81	43010	05012	38° 06' 11"	140° 41' 47"	2012.10.18 } 2012.10.19	45.0㎡	愛宕神社神楽殿 再建計画（震災 復興事業、本発 掘調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡	不明	不明	土坑・柱穴 19 か所	なし	
鍛冶沢遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡・溝跡・土坑・柱穴多数	縄文土器・土製円盤・剥片石器・磨製石斧・石棒・敲石	縄文時代後期～晩期中葉 (広域農道整備事業)
	不明	不明	なし	縄文土器・ミニチュア土器・剥片石器・磨石	縄文時代後期 (農道青ノクキ線拡幅事業)
台遺跡	集落跡	古墳	竪穴住居跡 5 軒以上	土師器・須恵器・中世陶器・縄文土器・石製模造品	古墳時代中期・後期
西浦 B 遺跡	不明	不明	土坑・溝跡・柱穴	なし	
谷地遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居跡・遺物包含層・土坑・溝跡・土器埋設遺構・焼土遺構・柱穴多数	縄文土器・剥片石器・礫石器・棒状石製品	縄文時代前期末～中期前葉
円田入 B 遺跡	不明	縄文	土器埋設遺構 4 基・土坑 4 基	縄文土器・剥片	縄文時代後期
寺門前遺跡	集落跡	縄文	土坑・溝跡・柱穴多数	縄文土器・剥片石器・磨製石斧・礫石器・陶器	縄文時代中期前葉
諏訪館前遺跡 隣接地	不明	古墳	土坑 1 基・柱穴 3 か所	土師器・陶器	古墳時代中期
三の輪遺跡	不明	近世	盛土整地層・柱穴 7 か所	近世陶磁器・石皿	近世後半頃
戸ノ内遺跡	集落跡	平安	竪穴住居跡 1 軒・井戸跡 1 基	ロクロ土師器	平安時代前葉
	不明	不明	土坑 4 基・性格不明遺構 2 基・柱穴 6 か所	土師器・ロクロ土師器・須恵器・縄文土器・灰釉陶器	
愛宕山遺跡	集落跡	弥生～古墳	土坑 1 基	土師器または弥生土器	袋状土坑
	不明	古墳	土坑 2 基	土師器・弥生土器	古墳時代前期～中期
	不明	不明	土坑 4 基	土師器・弥生土器・剥片・一銭硬貨 (大正十年)	
要約	<p>平成 18～24 年度に実施した遺構確認調査・小規模緊急発掘調査について報告した。主な成果は下記のとおりである。</p> <p>&lt;遺構確認調査&gt;</p> <p>原遺跡 時期不明の土坑・柱穴を確認した。</p> <p>鍛冶沢遺跡 広域農道計画路線内で縄文時代後期～晩期中葉頃のものと思われる竪穴住居跡・土坑など多数の遺構を確認した。遺構の分布は濃密で、遺物の出土量も多い。また、農道青ノクキ線拡幅計画範囲内では遺構は確認されなかったが、縄文時代後期頃のものと思われる遺物が出土した。</p> <p>台遺跡 古墳時代中・後期頃の竪穴住居跡とみられる遺構プランを確認した。遺構プランは重複が著しく、遺物の出土量も比較的多い。</p> <p>西浦 B 遺跡 時期不明の土坑・溝跡・柱穴を確認した。</p> <p>谷地遺跡 縄文時代前期末～中期前葉頃のものと思われる竪穴住居跡・遺物包含層をはじめとする多数の遺構を確認した。遺構の分布は極めて濃密で、遺物の出土量も膨大である。</p> <p>円田入 B 遺跡 縄文時代後期頃のものと思われる土器埋設遺構などを確認した。</p> <p>寺門前遺跡 縄文時代中期前葉頃のものと思われる土坑など多数の遺構を確認した。遺構の分布は濃密で、一部は隣接する谷地遺跡との関連が考えられる。</p> <p>諏訪館前遺跡 古墳時代中期のものと思われる土坑・柱穴を確認した。</p> <p>三の輪遺跡 近世後半頃の盛土整地層・柱穴を確認した。</p> <p>&lt;小規模緊急発掘調査&gt;</p> <p>戸ノ内遺跡 遺跡東部の丘陵麓で平安時代前葉(9 世紀前葉～中葉)の竪穴住居跡 1 軒・井戸跡 1 基を確認した。遺物は「仲」の墨書土器を含むロクロ土師器が出土している。近隣で同時期の有力者居宅を含む集落跡を確認している前戸内遺跡との関連が考えられる。</p> <p>愛宕山遺跡 平地との比高差 90m 以上の丘陵尾根上に立地する。弥生～古墳時代の袋状土坑、古墳時代の土坑を確認した。弥生時代中～後期、古墳時代前・中期の遺物が出土している。袋状土坑はその形態から貯蔵穴の可能性が想定され、居住に伴う生活痕跡と考えられる。</p>				

印刷製本仕様

製 本：A4 判(縦)、無線(あじろ)綴じ、並製本

ページ数：76 ページ

印 刷：表 紙 オフセット印刷、片面 4 色刷り、280 線

本文等 オフセット印刷、両面 4 色刷り、280 線

用 紙：表 紙 マットコート 220kg

見返し 色上質 特厚口 (108kg)

本文等 コート 110kg

原稿形式：Adobe® InDesign® CS4 (6.06) PDF /X-1a:2001

(OS：Microsoft® Windows® 7 Professional)

ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第 18 集

## 蔵王町内遺跡発掘調査報告書 1

各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調査

(平成 18 ～ 24 年度)

原遺跡・鍛冶沢遺跡・台遺跡・西浦 B 遺跡・谷地遺跡・円田入 B 遺跡・

寺門前遺跡・諏訪館前遺跡・三の輪遺跡・戸ノ内遺跡・愛宕山遺跡

2014 年(平成 26 年) 3 月 25 日 印刷・発行

編集・発行 蔵王町教育委員会

〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北 10

T E L 0224-33-3008 F A X 0224-33-3831

印刷・製本 株式会社 グラフィック







三の輪遺跡出土肥前磁器（江戸時代）